

# 鶴翔会

平成29年4月1日発行 2017年 122号

## 岡山医学同窓会報



診療風景



山岡憲二 教授



講義風景



## 表紙の写真

---



やまおか けんじ  
山岡憲二 教授 (1903~1987)

福岡県出身。昭和3年九州帝国大学医学部卒業後、第一内科（金子内科）に入局し、診療及び研究に従事。昭和20年6月、岡山医科大学第一内科教授に就任した。就任2週間目に岡山空襲があり、木造の内科教室が完全に焼失した。終戦後、復員した教室員らにより整理された疎開荷物の中にブルフリッヒの光度計があった。戦後の研究設備の無い中で、ブルフリッヒの光度計を中心に胆汁色素の研究に着手。山岡教授の指導の下、焼け残ったハンスフィッシャーのピロール核の化学などを参考に胆汁色素代謝に関するオリジナルな研究に教室をあげて取り組み、研究成果として一步一步完成され、「肝臓の臨床、胆汁色素」（山岡教授）、「生体内胆汁色素代謝に就いて」（小坂淳夫助教授：のち岡山大学長）として発表された。

また、昭和27年岡山県下に流行性肝炎が流行した際には、徹底した疫学調査と臨床的研究を行い、第28回日本

伝染病学会総会での特別講演として成果を発表し多くの感銘を与えた。

戦後の混乱期中、山岡教授は独創的な研究を進め、岡山大学第一内科における感染症学と消化器病学、特に肝臓病学を中心とした診療と研究体制の礎を築いた。また、社会福祉法人旭川荘の設立発起人として参画するなど社会福祉面についても活躍した。昭和31年10月、九州大学第一内科の教授に転任し、後に医学部附属病院長を務めた。

昭和40年（1965）、岡山大学教授時代から研究を続けたヘモグロビン代謝、胆汁色素生成の酵素学的機序解明の功績により、日本学士院賞を受賞した。

（参考：岡山大学医学部百年史、九州大学医学部第一内科HP、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器・肝臓内科学HP、社会福祉法人旭川荘HP）

<b>巻頭言</b>	1
鶴翔会会長（医学部長） 大塚愛二	
<b>ご挨拶</b>	2
岡山大学長就任 槇野博史	
岡山大学病院長就任 金澤 右	
退任 森田 潔	
退任 谷本光音	
退任 三好新一郎	
退任 平松祐司	
退任 上者郁夫	
福岡大学病院感染制御部教授就任 高田 徹	
新見公立短期大学教授就任 斎藤健司	
川崎医療福祉大学医療情報学科教授就任 佐藤修平	
<b>会員動向</b>	11
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など）	
学位授与	
平成28年度（平成29年3月）岡山大学医学部医学科卒業者	
会員訃報	
<b>同期会だより</b>	13
昭和28年卒クラス会 矢部芳郎	
昭和29年岡山醫科大學卒業生同期会（二九医会） 武智秀夫	
平成28年度 みとう会（昭和30年卒同窓会） 山本泰久	
昭和31年卒業「壬辰会」の卒業60周年記念同期会 小林敏成	
昭和41年卒卒業50周年記念同窓会 松本 皓	
昭和43年入学・昭和49年卒業生（43－49会）の同期会報告 公文裕巳	
<b>支部だより</b>	17
平成28年度 鶴翔会呉支部総会の報告 木村 亘	
本年度の鶴翔会松山支部総会報告 谷水正人	
兵庫県鶴翔会神戸支部報告 三輪恕昭	
第50回鶴翔会新居浜支部総会報告 鈴木誠祐	
ゴルフ報告 西本 健	
平成28年度鶴翔会山口県支部総会 藤本 剛	
2017年2月26日 岡山医学同窓会香川県支部会 青江 基	
H28年度鶴翔会近畿総支部報告 野上浩實	
<b>新聞より</b>	23
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2016.9～2017.3）	
<b>関連病院だより</b>	28
社会医療法人渡邊高記念会西宮渡辺心臓・血管センター 槌田昌平	
<b>歴史の広場</b>	30
1898（明治31）年の第三高等学校医学部と1902（明治35）年の岡山医学専門学校と岡山県病院について 石田純郎	

---

フェニックス 小林敏成  
目医者をつぶやき「持ちたる者の資格」 松尾俊彦  
「サルバルサン戦記－秦佐八郎」を読んで 坪井修平

## 学生だより

## 解剖実習

解剖学実習を終えて 栗原侑生  
見ず知らずの人の人生を垣間見る解剖実習 豊田陽子  
ご遺体を目の前にして 矢野愛華

## 医学研究インターンシップ

石川桃子  
医学研究インターンシップを通して 大西友紀  
医学生における海外留学の意義とは 藤田佳奈

## 西日本医学生学術フォーラム

西日本医学生学術フォーラム 開催報告 大塚勇輝  
西日本医学生学術フォーラムに実行委員として参加して 林田慎太郎

## 教室だより

---

海外への留学者一覧

## 岡山より

---

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会のご案内  
ご寄贈いただきました！  
平成28年度 Student Doctor 認定式  
平成28年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式  
第111回 医師国家試験 合格者状況  
平成28年度卒年次別会費納入状況  
おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！  
(公財)岡山医学振興会より一継続は力一 難波正義  
事務局からの訂正・お詫び  
岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧  
鶴翔会会報 投稿内規

## 編集後記

# 巻 頭 言

鶴翔会会長（医学部長） 大塚 愛 二

2017年度がスタートし、同窓の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。昨年度は、熊本で大きな震災があり、また様々な自然災害の報が入り、被災された地域において医療活動をなさっておられる諸先生方に心よりお見舞い申し上げます。

さて、岡山大学では、この4月から新体制となりました。これまで6年間、森田潔学長ならびに許南浩理事におかれましては、大学全体の舵取りをしていただき、私たちを導いてくださったことに心より感謝申し上げます。そして、新学長に榎野博史先生がなられました。榎野先生にはこれまで大学病院長として私たちをご指導くださり、また鶴翔会の副会長としてご尽力いただきました。ここに厚く御礼申し上げる次第です。病院長として培われた管理運営能力をこれから大学全体に発揮して下さることと大いに期待される所です。また、新しく岡山大学理事・病院長として金澤右先生が就任されましたことをご報告いたします。

岡山大学は、引き続き橋渡し研究加速ネットワークプログラムに採択され、また、医療法上の臨床研究中核病院の指定が決定いたしました。この両者に同時になるという立ち位置は、旧帝国大学・慶応大学・岡山大学というところです。これもひとえに同窓の皆様のご支援があつてのことと厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご支援ご協力賜りますようお願いいたします。

2020年へ向けての150周年記念事業も、おかげさまで順調に進みつつあります。大学病院の入院棟11階のフロア150も完成し、また、旧生化学棟の内部改修も1階の西半分が終了いたしました。鹿田に来られましたら、ご覧いただけますと幸いです。なお、150周年記念・ルネッサンス基金へのご寄付も、学内外の皆様のご厚情により進んでおりますが、ぜひ引き続き絶大なるご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。



下山 敦 士



## ご 挨拶

### 岡山大学長に榎野博史氏 ご就任



#### ご 挨拶

同窓会の皆様におかれましては、益々清祥のこととお慶び申し上げます。この度平成29年4月より第14代岡山大学学長に就任致しました。私は岡山市内に生まれ、深柢小学校、岡山大学教育学部附属中学校、岡山大安寺高等学校を卒業し、岡山

大学医学部で学び、卒業後も一貫して岡山大学医学部で勉強した者でありますので、郷土岡山と母校を愛する気持ちは誰にも負けないつもりです。

また、高校生時代の多感な時にアメリカンフィールドサービスでホームステイしながら米国の高校に1年間学び、国際性を身に着ける事ができました。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長及び岡山大学病院院長在職中は、多方面において一方ならぬご支援を賜り誠に有難うございました。私が学長在任中の2020年に、岡山大学は創立72周年を、岡山大学医学部は創立150周年をそれぞれ迎えます。しかし、本学がその記念日を無事に迎えるためには、まだまだ多くの乗り越えるべき困難な課題が立ちばだかっています。教職員の皆様とともにしなやかにこの難局を乗り越え、次世代の岡山大学人へと繋げる役割を果たしていく所存です。

いま全国の大学の多くは、生き残りをかけた切磋琢磨の苦闘を続けています。政府からの運営費交付金は年々削減され、大学独自の個性を生かした各種の活動も、その可能性が先細りされつつあります。地域のトップランナーを常に目指す本学も、その例外ではありません。

このような中であっても、若い教職員や学生たちのエネルギー溢れる萌芽を見守り育てるために私は、和顔愛語の心でリーダーシップを発揮して、本学にしか成し得ない新たな挑戦に取り組むたいと考えます。その気持ちを表すスローガンが、《超えていく「実りの学都」へ》です。

これまで本学が実施してきた国際的社会貢献事業、異分野融合型研究事業並びに遺伝子医療、ロボット手術や臓器移植等の高度先進医療を始めとする国際的医療貢献事業などをさらに加速させると共に、文理融合の理念のもと学部、研究科、大学そして国の枠をも超えた連携・協働を《しなやかに》促し、全学を挙げて世界と伍し、世界に貢献できる人材の育成を目指します。それが私に課せられた使命であり、また同時に私がこれまで同窓会の皆様から頂いた大恩に報いることでもあります。

岡山大学はこれからも、人工知能時代の到来に先駆けた教育・研究・社会貢献及び情報の融合によるソーシャル・イノベーションの創出を通じて、日本・世界最先端の「実りの学都」を実現してまいります。引き続き本学へのご指導並びにご鞭撻を心よりお願い申し上げます。学長就任の挨拶とさせていただきます。

#### 略 歴

- 昭和42年 6月 米国Emmaus High School卒業
- 昭和43年 3月 岡山県立岡山大安寺高等学校卒業
- 昭和50年 3月 岡山大学医学部卒業
- 昭和50年 6月 岡山大学医学部附属病院第三内科医員(研修医)
- 昭和50年 9月 坂出市立病院勤務
- 昭和52年 1月 岡山大学医学部附属病院医員(研修医)(第三内科)
- 昭和58年 7月 岡山大学医学部助手(内科学第三講座)
- 昭和59年 7月 米国Northwestern大学医学部(病理)客員助教授
- 平成6年 1月 岡山大学医学部助教授(内科学第三講座)
- 平成8年 4月 岡山大学医学部第三内科教室教授(現 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 腎・免疫・内分泌代謝内科学)
- 平成14年 4月 岡山大学病院副病院長
- 平成21年 4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長
- 平成23年 4月 岡山大学病院長、国立大学法人岡山大学理事
- 平成29年 4月 国立大学法人岡山大学長

## 岡山大学病院長に金澤右氏 ご就任



### 向きあう、つながる、広がる ご挨拶

同窓の先生方には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。私は、森田潔前学長ならびに榎野博史新学長の御配慮により、このたび岡山大学理事・岡山大学病院長を拝命することとなりました。浅学菲才の身には過分

な職責ではありますが、皆様のご支援をいただきながら、岡山大学病院の運営をさせていただきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成16年度の国立大学法人化以降、清水信義先生、森田潔先生、榎野博史先生の歴代の病院長を中心とする教職員の弛まない努力により、岡山大学病院は順調な発展を遂げてきました。年間診療報酬額は今や320億円に迫り、職員も2000人を優に超え、名実ともに我が国を代表する特定機能病院のひとつとなっています。私の第一の使命は、まずは、この岡山大学病院の現状をきちんと継続し、さらに発展を目指すことにありと思っています。「現状の継続」とは、いかにも守りのように聞こえますが、医療や社会の状況が刻一刻と変わっていく現在、実はなかなか難しいことと思っています。少子高齢化に伴う社会環境変化や医療行政変革のみならず、「群馬大学病院事件」で明らかになった院内安全管理のガバナンス問題、臨床研究についての新たな国の規制法案、高額医薬品の出現等々、直面する問題は多数あり、それらを一つ一つ解決しないと「現状の継続」は果たせません。幸いにして、岡山大学病院には若くて優秀な人材がたくさんおられますので、私の当面の仕事はこれらの方々が十二分に力を発揮できる環境、体制を作っていくことだと思っています。それが、次代の発展につながり、有用な人材育成の循環につながると思います。加えて、関連病院の先生方にもぜひご支援いただき、関連病院と岡山大学病院との人材の交流に努めたいと思います。

私のつたない思いではございますが、岡山大学病院は、平成29年4月より「向きあう、つながる、広がる」、英語では、“Facing your Face, Facing our community, Facing the world”を合言葉として、患者さんを大事にして、地域に貢献し、世界に羽ばたく病院を目指したいと思っています。ご指導のほど、よろし

くお願い申し上げます。

### 略 歴

- 昭和30年9月 長野県長野市生まれ
- 昭和49年3月 長野県長野高等学校卒業
- 昭和56年3月 岡山大学医学部卒業
- 昭和56年4月 愛知県がんセンター放射線診断部研修医
- 昭和61年4月 倉敷成人病センター放射線科医長
- 平成元年12月 米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンター放射線診断科臨床研究員
- 平成4年4月 岡山大学医学部附属病院放射線科助手
- 平成12年4月 岡山大学医学部放射線医学教室助教授
- 平成16年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科放射線医学分野教授
- 平成20年4月 岡山大学病院卒後臨床研修センター医科系部門長
- 平成23年4月 岡山大学病院副病院長

## 森田潔学長 ご退任



### 岡山大学長の任を終えるに 当たって

#### ご挨拶

平成23年4月岡山大学長に就任して以来、6年が早くも経ち、平成29年3月末をもって岡山大学長の任を終えることになりました。

私は昭和49年に岡大医学部卒業と同時に小坂二度見先生の麻酔・蘇生学教室に入局し、麻酔科医として歩み、平成14年に麻酔・蘇生学分野教授、平成17年岡山大学病院長を経て、平成23年から岡山大学長として奉公することが出来ました。この間、多くの先輩、同輩、後輩の方々にご支援を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

学長任期の6年間を振り返ってみますといろいろなことが走馬灯のように思い出されます。学長就任と同時に、厳しい大学改革の流れの中で岡山大学が真の国立大学として存続していくため、岡山大学を国内トップ10、世界トップ100の大学にするという目標を掲げ、改革に乗り出しました。

最初に、「美しい学都・岡山」を掲げ津島キャンパスと鹿田キャンパスの教育研究環境の改善に取り組む

こととしました。国内外から優秀な研究者、学生が集い、切磋琢磨するキャンパスの実現を目指しました。幸いなことに福武純子さんという素晴らしい理解者に出会うことができ、全国的に注目を集めたJunko Fukutake Terrace（岡山大学Jテラス）とJunko Fukutake Hall（岡山大学Jホール）をはじめ教育研究施設の整備が実現できて、多くの方から「整備され見違える美しいキャンパスになった」との声を聴くことができるようになりました。

大学の評価は何と言っても研究力であり、教育力であり、そして、それらを社会に還元できてこそ社会から初めて認められると思っています。

研究力の向上のために取り組んだことを挙げてみますと、まずは「研究大学強化促進事業」があります。この採択には大学の自己資金で独自に採用したりサーチ・アドミニストレーター（URA）が大きな役割を果たしました。また、研究特区「グローバル最先端異分野融合研究機構」を設置し、大学の研究を質、量ともに世界レベルに押し上げ、その結果、平成28年には、異分野基礎科学研究所、惑星物質研究所、資源植物科学研究所の三つの研究所を有する研究大学に発展することができました。

一方、大学の重要な使命の一つである学部教育力の向上も大きな課題であり、教育の改革にも着手しました。

平成28年度に全学部で導入した60分授業、4学期制は全国初の取り組みであり、今や“教育改革は岡山大学に学べ”と言われてしていると聞いております。将来的には多くの優秀な教育者、研究者を岡山大学から輩出されることを期待しております。

また、組織は人だと言われ、大学の教職員の意識が大学を支える重要なファクターだと思い、教職員に高い意識と誇りを持って大学の業務に当たってもらうことを大切にしてきました。広報についても今までとは違った観点で取り組み積極的に広報に努めました。JR東京駅や岡山駅に看板を出したり、全国紙に一面広告を出したりと初めての試みも多く批判的な意見もありましたが、大学のためと思い断行しました。

こうした取り組みの一つ一つが漸く実を結んで、教職員の意識も高くなり、岡山大学の誇りを持って研究に、教育に、運営に前向きな姿勢で取り組んでいることを実感することができるようになってきました。

2013年の文部科学省の「研究大学強化促進事業」、厚生労働省の「臨床研究中核病院」、2014年の文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援（Top Global University Project）」、2016年「革新的医療技

術創出拠点プロジェクト」に採択され、着実に我が国屈指のポテンシャルを持つ大学へと一歩一歩着実に前進していると実感しております。先日、トムソン・ロイターの発表した「アジアで最もイノベティブな大学ランキングTOP75」（Reuters Top75: Asia's Most Innovative Universities）で、本学が38位（国内13位）にランクインし海外からも高い評価を得ることができたと思っています。

また、岡山大学メディカルセンター（OUMC）構想については、早い時期から、地元岡山の経済界、政府から大きな期待が寄せられ、各方面から有形無形の支援を受けて準備を進めております。今後も実現に向けて引き続き全力を尽くしていく所存ですので、皆様のご理解とご支援の程お願い申し上げます。

私の専門である麻酔・蘇生学分野については、森松教授に後任の座を譲りました。現在、森松教授を先頭に、周術期の患者さんの安全を守り、質の高い周術期管理の実現に向け、臨床、研究、教育についての取り組みが鋭意行われています。そうした取り組みが、岡山大学病院における肺移植、肝臓移植をはじめとする高度医療、年間10,000例を超える手術数を支え、存在感を岡山から世界へ発信しており、世界標準の麻酔・蘇生科の実現に向け着実に前進していることを安心して見守っているところです。

本年3月31日で岡山大学長の任を解かれましたが、今後学外にあっても常に岡山大学と岡山大学医学部を見守り、その発展を祈念しております。

#### 略 歴

昭和43年3月	岡山県立朝日高等学校卒業
昭和49年3月	岡山大学医学部卒業
昭和49年7月	岡山大学医学部附属病院麻酔科医員
昭和50年10月	岡山大学医学部附属病院麻酔科助手
昭和52年7月	高知県立中央病院麻酔科
昭和52年12月	アルバートアインシュタイン大学モンテフィオーレ病院研究員
昭和55年1月	岡山大学医学部附属病院集中治療部助手
昭和55年7月	香川県立中央病院麻酔科
昭和59年4月	岡山大学医学部附属病院麻酔科助手
昭和59年5月	岡山大学医学部附属病院麻酔科講師
平成5年7月	岡山大学医学部麻酔・蘇生学講座助教授
平成14年4月	岡山大学大学院医歯学総合研究科麻酔・蘇生学分野教授
平成17年6月	岡山大学病院 病院長



平成20年4月 国立大学法人岡山大学理事  
平成23年4月 国立大学法人岡山大学長

## 谷本光音教授 ご退任

### ご挨拶



このたび、平成28年10月をもちまして岡山大学を退任いたしましたので、これまでご支援を賜りました皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成13年4月、岡山大学大学院医歯学総合研究科の設置と同時に着任いたしました。この間15年以上に亘り旧第二内科、現在の血液・腫瘍・呼吸器・アレルギー内科にご協力とご支援を賜り、皆様には心より感謝申し上げます。100年に及ぶ歴史と伝統のある内科学教室にとってこの間はまさに波乱万丈の期間でもありました。着任後3年で新臨床研修制度が発足し、2年間は新入局者が全くいない時代を過ごしました。しかしこの逆境の中で、むしろ教室員との距離が近くなったようにも感じました。皆で力を合わせてこの時期を乗り越え、少しずつ入局者が増えていったことで、教室に活気が戻り、それと同時に各分野に優れた指導者を教授として多く輩出することができました。これも岡山大学という大きな存在があったことが追い風になったことは言うまでもありません。

また、各分野ではPI (Primary Investigator) を中心に研究体制を確立し、多くの業績を生み出すことができました。特に臨床に即した研究成果が欧米誌に掲載されることが多くなったことを大変嬉しく思っています。さらに、教育を教室のもう一つのテーマにして学生や大学院生に楽しく自由に学んでもらう環境も整備できました。このことは教室の中の伝統として今後とも継承していただきたいと思っております。

診療については中国、四国地域で常にNo.1であることを目指しました。肺がんの治療研究グループOLCSGが日本を代表する研究組織として活躍していること、造血細胞移植推進事業拠点に岡山大学病院と愛媛県立中央病院（教室の関連施設）が中国、四国地域で唯一の施設として選定された事がそのことを示していると思っております。

私は、退任直前の5年間、医歯薬学総合研究科の研

究科長を務めさせていただき、岡山大学の多くの方々と知り合うことで私自身を成長させていただきました。多くの出会いがあって素晴らしい時間を過ごさせていただき心から感謝申し上げます。

最後になりますが、研究科と医学部の益々の発展と鶴翔会の皆様のご健勝を祈念して、私の退任の挨拶とさせていただきます。

### 略歴

昭和52年3月 名古屋大学医学部 卒業  
昭和56年3月 名古屋大学大学院医学研究科 満了  
昭和56年4月 名古屋大学医学部附属病院医員  
昭和56年10月 米国NY州NY市スローンケタリングがん研究所研究員 (Dr. Lloyd J. Old Lab)  
昭和60年11月 名古屋大学医学部附属病院医員  
昭和61年10月 名古屋大学医学部第一内科研究生 (法務技官 名古屋拘置所医務課)  
平成3年11月 名古屋大学医学部第一内科助手  
平成10年6月 名古屋大学医学部附属病院講師 (第一内科)  
平成13年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究病態制御科学専攻腫瘍制御学講座教授  
平成16年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究病態制御科学専攻腫瘍制御学講座教授  
平成16年6月 岡山大学医学部附属病院副院長 (至平成23年3月)  
平成23年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科研究科長 (至平成28年3月)  
平成28年11月 岡山大学名誉教授  
平成28年11月 独立行政法人国立病院機構岩国医療センター副院長  
現在に至る。

## 三好新一郎教授 ご退任

### ご挨拶

2017年3月に定年退職するにあたり、ご支援いただきました同窓会の皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、2009年4月、腫瘍・胸部外科（旧第二外科）に着任しました。着任早々の教授会で外



科臓器別再編成の命を仰せつかりましたので、この路線に沿って魅力ある岡山大学外科の構築を行うことを最重要のミッションとして取り組んで参りました。また、教授の不在期間が1年8ヶ月ありましたので、教室の再建も重要な課題でした。

まず、若手外科医の勧誘と教育を目的に、3外科教室が協力して岡山大学外科研修マネジメントセンター(MC)を立ち上げました。MCは1年に2回のセミナーと約20余りの研修会を行っており、7年を経過した現在、約140名の外科専攻医が登録し、大学や関連病院で外科専門医を目指して頑張っています。臓器別再編成では2011年4月、腫瘍・胸部外科を呼吸器・乳腺内分泌外科に改称し、消化器外科、心臓血管外科と合わせて担当分野が明確になりました。この結果、愛媛大学のほか、多くの旧第一外科関連病院（今治済生会病院、岩国医療センター、中国中央病院、福山医療センター、岡山済生会総合病院、姫路赤十字病院、津山中央病院）へ新規に呼吸器外科医を派遣することができました。さらに、2016年には旧第一外科、旧第二外科が融合することを目指して岡山大学外科同窓会の創設に至りました。

教室の再建としては、私の任期が8年と短かったので、主にSurgeryの伝承を行いました。赴任当時教室員は皆若く優秀でしたので、少しの水と栄養を与えるだけで大きく成長しました。肺移植では新しい術式が開発され、肺癌・乳癌の領域では著明な手術数の増加と素晴らしい研究論文が数多く出ました。また、昨年は第69回日本胸部外科学会定期学術集会を成功裡に主催することができました。

このように鶴翔会の皆様のご支援のもと、伝統ある岡山大学の教授としての重責をなんとか無事に終えることができたのではないかと考えています。皆様のご支援に深謝し、ご健勝を祈念して退任のご挨拶とさせていただきます。

## 略 歴

昭和52年3月 大阪大学医学部卒業  
 昭和52年7月 大阪大学医学部附属病院第一外科で研修  
 昭和53年7月 国家公務員共済組合連合会大手前病院外科  
 昭和56年7月 大阪大学医学部 第一外科 研究員  
 昭和59年7月 大阪府立羽曳野病院 外科  
 昭和60年7月 大阪大学医学部 第一外科 研究員  
 昭和61年7月 大阪大学医学部 第一外科 助手  
 昭和62年7月～昭和63年6月 トロント大学胸部外科

## 研究員

昭和63年7月～平成元年6月 ワシントン大学  
 胸部外科 研究員  
 平成3年9月 大阪大学医学部 第一外科 講師  
 平成3年10月 和歌山県立医科大学 第一外科 助教授  
 平成9年4月 大阪大学医学部 第一外科 助教授  
 平成13年4月～ 獨協医科大学 胸部外科 教授  
 平成21年4月～ 岡山大学大学院 腫瘍・胸部外科 教授  
 平成23年4月～平成29年3月  
 同 呼吸器・乳腺内分泌外科 教授

## 平松祐司教授 ご退任



### ご挨拶

平成29年3月をもって定年退職するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。昭和52年岡山大学卒業後、関連病院研修、留学期間を除き35年あまり鹿田キャンパスで過ごし、最後の14年間は第12代産科・婦人科学教授を務めさせていただきました。この

間、学内、鶴翔会、同門の先生には大変お世話になり感謝の気持ちで一杯です。襷を引き継いだ時は、その直前の新卒後研修制度開始、福島大野病院事件、妊婦たらい回し事件などもあり、新入医局員は減少し激しい向かい風でしたが、教室員一丸となって乗り切ってきました。

日本産科婦人科学会でも長年、若手医師育成、リクルーティングの仕事に関わり、プロモーションDVD、サマースクール、ニュースレターをはじめ、産婦人科学会の約20の新規事業を立ち上げてきました。これらの試みにより、まだ十分とはいえませんが産婦人科志望者は増加し、充実した時間を過ごさせていただきました。またこの間、第64回日本産婦人科学会、第53回日本婦人科腫瘍学会をはじめ多くの学会、研究会を主催させていただきました。

最近5年間は、医療安全のツールであるTeam STEPPS普及につとめ、院内の関連各科と、また関連病院でも共通言語ができ、よいチームができあがってきたように感じています。

この40年間の医療、医学の進歩にはめざましいもの

があります。産婦人科には、周産期、婦人科腫瘍、生殖・内分泌、女性のヘルスケアの4分野がありますが、教室員には少なくとも2つ以上のサブスペシャリティー取得を推奨し、質の高い医師の育成を目指してきました。教授就任直後は、教室員は臨床、教育に追われ、研究に力を回せない状況でしたが、現在では大学院生も20名を超え、選択実習で回ってくる学生も毎年30名を超えるようになり、今後が楽しみです。

個人的には小熊恵二元医学部長の依頼で鶴翔会の看板を書かせていただき、また展覧会に出品していた佐藤一斎の言葉が吉野正元医学部長の目にとまり、鹿田図書館の玄関ホールに掲示していただいているのもよい思い出です。

最後になりましたが、岡山大学医学部ならびに鶴翔会の益々の発展を祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。

## 略 歴

昭和52年3月 岡山大学医学部卒業  
 昭和52年4月 岡山大学医学部産科婦人科学教室入局  
 昭和52年12月 社会保険広島市民病院勤務  
 昭和53年12月 香川県立中央病院勤務  
 昭和54年12月 岡山大学医学部附属病院医員  
 昭和56年2月 広島赤十字・原爆病院勤務  
 昭和56年4月～昭和60年3月 岡山大学医学部大学院  
 昭和60年4月 岡山大学医学部附属病院医員  
 平成元年6月 岡山大学医学部附属病院助手  
 平成7年9月 岡山大学医学部附属病院講師  
 平成11年4月 岡山大学医学部助教授  
 平成12年 Harvard Medical School, Joslin Diabetes Center  
 平成13年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科 産科・婦人科学 助教授  
 平成15年4月 同 医歯学総合研究科 産科・婦人科学 教授  
 平成17年4月～平成29年3月 同 医歯薬学総合研究科 産科・婦人科学教授

## 上者郁夫教授 ご退任

### ご挨拶

本年3月末をもちまして岡山大学大学院保健学研究科を定年退職するにあたり、退任のご挨拶を申し上げます。これまで長年にわたりご支援いただきました先



生方に心より厚くお礼申し上げます。

私は昭和52年に岡山大学医学部を卒業後直ちに放射線医学教室に入局し、入局当時の故山本道夫名誉教授のご厚意により、4月末から岡山済生会総合病院の内科に研修医として出向させていただき、1年8か月間、内科

医として臨床医学の基礎を学ばせていただきました。昭和54年1月に大学に帰局してからは、学位論文の研究に携わるとともに当時大学病院に導入されたばかりの電子走査型の超音波検査の臨床および研究に従事させていただき、人体内部の臓器がリアルタイムで観察できる機械の登場に驚きました。昭和59年からは故青野要教授から当時国内のいくつかの国立大学にだけ導入されましたMRI装置の臨床応用と研究を命じられ、CTと異なり横断像だけでなく直接、冠状断像や矢状断像が得られる画像診断装置の登場に大きな衝撃を受けました。それまで超音波検査を担当していた大学病院の産婦人科の先生方と懇意にさせていただいた関係で、MRI装置導入当初から婦人科の患者さんの検査依頼を多くいただき、放射線被曝の心配のない装置で有用な診断情報が多く得られるMRI検査は当初から婦人科領域にはたいへん有用な検査法でした。最初の装置は常電動0.15テスラという低磁場装置でしたので、現在の機械と異なり、検査時間も長く、画質も不良でしたが、新たな発見の毎日でした。昭和の終わりにスーダン国に医療援助で約1か月間海外生活を体験しました。スーダンという国はアフリカ最大の国でしたが非常に貧しい国で、当時CTが国に1台だけ、MRIはないという医療後進国でした。初めて日本以外の国で生活し、母国の文化の高さ、生活の質の高さに驚き、日本のありがたさを痛感した1か月でした。日本に帰国後すぐに平成時代となり、平成3年に初めて超電導1.5テスラのMRI装置が大学病院に導入されてからは、最新鋭の装置を用いて多くの研究課題に恵まれ、初めて婦人科領域にdynamic studyを応用し多くの研究成果を上げることができました。平成12年に保健学科に移りましたが、婦人科領域のMRI検査をそのまま担当させていただき退職まで33年間、女性骨盤部MRI診断の研究を継続させていただけたことに心から感謝申し上げます。平成15年には保健学研究科が新設され、修士、博士課程の教育・研究にも携わることになりました。学内においては地域連携推進部会委員、ACTA MEDICA OKAYAMA編集委員・運営委員、



保健学科教務委員等、主に教育研究に関する役職を担当させていただきました。

これまで長きにわたり、よき指導者、先輩に恵まれ、多くの同僚、後輩の先生方、およびコメディカルの方々にご協力いただき、楽しく有意義な大学生活を送ることができました。ご支援ご鞭撻を賜りました皆様から厚く御礼申し上げます。退職後は微力ながら地域医療に携わっていきたく存じますので、今後とも何卒宜しく願い申し上げます。鶴翔会の皆様方のますますのご発展とご健勝をお祈りして退任の挨拶とさせていただきます。

### 略 歴

昭和52年3月 岡山大学医学部卒業  
 昭和52年4月 岡山大学医学部放射線医学教室入局  
 昭和52年4月 岡山済生会総合病院内科 研修医  
 昭和54年1月 岡山大学医学部付属病院放射線科 研修医  
 昭和54年4月 岡山大学医学部付属病院放射線科 医員  
 昭和56年6月 岡山大学医学部付属病院放射線科 助手  
 昭和63年3月 岡山大学医学部付属病院放射線科 講師  
 平成2年4月 岡山大学医学部付属病院中央放射線部 助教授  
 平成4年1月 岡山大学医学部放射線医学講座 助教授  
 平成12年4月 岡山大学医学部保健学科放射線技術科学専攻 教授  
 平成15年4月 岡山大学大学院保健学研究科放射線技術科学分野 教授

## 福岡大学病院感染制御部教授 に高田徹氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、平成28年10月1日付けで福岡大学病院感染制御部教授を拝命致しました。私は昭和62年に岡山大学医学部を卒業

後、九州大学大学院医学研究科に進み*Campylobacter*の基礎研究を行って学位を取得しました。平成6年に福岡大学へ着任以来、3年間の留学生生活を挟んで約20年間感染症・感染制御の診療・教育・研究に携わってまいりました。留学中はピロリ菌やマイクロバイオーム研究で世界的に知られ2015年にTime誌の「世界で最も影響力のある100人」にも選ばれたMartin J. Blaser教授のご指導の下、基礎研究のみならず、米国における感染症医療を幅広く学ぶ事ができました。

今日、世界的に深刻化する薬剤耐性菌の多様化やグローバル化に伴いリスクが増大する新興再興感染症等、感染症を巡る状況も私が母校を卒業した30年前とは随分と様相が異なるものとなってきました。今後は、国内外の医療・研究機関の皆様とも感染制御学に関わる有機的な連携を強化し、人材の育成に微力を尽くしたいと存じます。

鶴翔会同門の先生方には、今後とも温かいご支援、ご指導を賜ります様、何卒よろしく願い申し上げます。

### 略 歴

昭和62年 岡山大学医学部医学科 卒業  
 九州大学医学部第一内科入局  
 昭和62年 佐賀県立病院好生館内科研修医  
 昭和63年 九州大学医学部付属病院内科研修医  
 平成5年 九州大学医学部大学院内科系 修了、医学博士  
 国家公務員等共済組合連合会 千早病院 内科医師  
 平成6年 福岡大学医学部臨床検査医学講座 助手  
 平成11年 Vanderbilt大学内科感染症部門リサーチフェロー  
 平成12年 New York大学医学部内科リサーチフェロー  
 平成14年 福岡大学病院血液・糖尿病科 講師  
 平成20年 上海市（復旦大学附属）公共衛生臨床センター 客員教授  
 平成21年 福岡大学病院感染制御部 部長  
 福岡大学病院腫瘍・血液・感染症内科 准教授  
 平成25年 福岡大学病院感染制御部 診療教授  
 平成28年 福岡大学病院感染制御部 教授



## 新見公立短期大学教授に 齋藤健司氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平成28年4月1日付で、新見公立短期大学教授を拝命いたしました。

私は岡山理科大学理学部および大学院修士課程で故小田琢三先生（新見女子短期大学第4代

学長）の最後の弟子として研究の基礎を学びました。修士課程修了後は、岡山県北部の新見女子短期大学（現在の新見公立大学・短期大学）に着任し、教育に携わると同時に岡山大学医学部分子医化学で研究生・在外研究員としてIV型コラーゲンの研究を進めて参りました。

分子医化学では、故二宮善文先生に20年間にわたり大変お世話になりました。大橋俊孝先生（現在の分子医化学教授）には所属当初から研究を直接ご指導いただきました。また、米澤朋子先生にもいろいろお世話になりました。別の大学で教育をしながら研究をする環境の私に対して、先生方は本当に親身になって指導してくださいました。心よりお礼を申し上げます。

平成13年に学位を取得した後は、二宮先生のご推薦によりドイツのエルランゲン・ニュルンベルグ大学のErnst Pöschl教授のもとで研究をすることができました。2年間の長期研修は新見公立短期大学では前例がありませんでしたが、新居志郎第5代学長、難波正義第6代学長のお力添えにより実現することができました。留学時に得られた人脈や経験は、今でも私の大きな財産になっております。

この様に、私は鶴翔会の先生方に何から何までお世話になっております。現在、大学の教員として存在できているのも同門の皆様のお陰です。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

現在は、公立大学法人新見公立大学の学生部次長兼大学改革担当として、研究や教育だけでなく新見公立大学・短期大学のマネジメントに関わることもしております。入試、教務、学生支援、地域連携、大学改革などいくつものプロジェクトをコントロールしながら、小さな大学の発展に力を尽くしています。新見公立大学も大きな改革の最中であり、公文裕巳学長が示された「中山間地域で活躍する保健福祉のリーダー養

成校として輝く大学にする」という目標に向かって、日々、考え、悩み、動き回っております。自分の考えで大学の将来の形が変わることもあるため責任は重いですが、その分、やりがいをもって大学改革の仕事に取り組んでいます。

新見公立大学と岡山大学医学部との関係はとりわけ深く、歴代の学長が岡山大学医学部出身者であるだけでなく、多くの非常勤講師も派遣していただいております。今後も鶴翔会の先生方にお世話になることがありますと思います。これからもご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 平成4年3月 岡山理科大学理学部生物化学科卒業
- 平成6年3月 岡山理科大学大学院理学研究科生物化学専攻修士課程修了
- 平成6年4月 新見女子短期大学 教務職員
- 平成6年10月 岡山大学医学部研究生（平成6年10月～平成13年3月）
- 平成10年4月 新見女子短期大学看護学科 助手（平成11年に新見公立短期大学に校名変更）
- 平成13年4月 岡山大学医学部 客員研究員（現在に至る）
- 平成15年1月～平成17年1月 ドイツ連邦共和国エルランゲン・ニュルンベルグ大学 博士研究員
- 平成18年4月 新見公立短期大学幼児教育学科 講師
- 平成20年4月 新見公立短期大学幼児教育学科 准教授
- 平成28年4月 新見公立短期大学幼児教育学科 教授

## 川崎医療福祉大学医療情報学 科教授に佐藤修平氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび平成29年4月より川崎医療福祉大学医療情報学教授を拝命いたしました。岡山大学在職中には、金澤右教授殿、岡山大学医学部放射線科の先生方をはじめ

め、多くの方々にご指導をいただきました。改めて感謝申し上げます。

私は平成2年に金沢大学医学部を卒業後、岡山大学放射線科に入局し、平木祥夫名誉教授のもとで放射線科医としてのスタートを切りました。いろいろな画像診断のモダリティがある中、平木先生には核医学の奥深さを教えていただきました。また、研修医時代には当時岡山大学小児科におられた鎌田政博先生（現 広島市民病院 循環器小児科）に直接指導をいただく機会を得ることができ、先天性心疾患の魅力を存分に教えていただきました。

以来、核医学と循環器画像診断を専門として臨床、研究を行ってまいりました。この間、核医学領域に関しては、脳血流、肝受容体、心筋、脳受容体、FDGなど新しいトレーサが次々と開発され、それらを用いて臨床研究を行うことができました。ベータ線を用いた悪性リンパ腫の治療やアルファ線を用いた前立腺癌骨転移の治療にも関わることができました。また循環器領域に関しては、平成23年に岡山大学病院にdual source CTが導入され、その優れた時間分解能が特に小児循環器領域の診断に有用であることを学会発表や論文を通して発信いたしました。そのおかげで小児循環器科や心臓血管外科の先生方には懇意にいただきました。特に新医療研究開発センターの王 英正教授の心臓内幹細胞移植療法の臨床研究に関わることもできたことは、大きな財産となりました。

これまでの私の仕事は診療放射線技師の協力なくしてはなし得なかった仕事ばかりであり、今後は川崎医療福祉大学でよい診療放射線技師を育てることで恩返しをしたいと考えています。今後とも同窓の皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

## 略 歴

昭和59年 東京大学工学部計数工学科 卒業  
 平成02年 金沢大学医学部医学科 卒業  
 平成02年 岡山大学医学部放射線科 入局  
 平成04年 岡山大学病院放射線科 医員  
 平成12年 岡山大学病院放射線科 助手  
 平成16年 岡山大学病院放射線科 講師  
 平成23年 岡山大学医歯薬学総合研究科 放射線医学准教授  
 平成24年 岡山大学病院 医療情報部 副部長 兼任  
 平成25年 岡山大学病院 小児放射線科 科長 併任  
 平成29年 川崎医療福祉大学 医療情報学科 教授



下山敦士

# 会 員 動 向



## 受 章

正六位 (会員) 故森 下 和 郎  
 旭日双光章 (昭34) 藤 井 慶 祐  
 “ (昭45) 大 野 尚 文  
 瑞宝双光章 (昭34) 眞 鍋 豊 彦  
 瑞宝中綬章 (昭38) 西 崎 良 知  
 平成28年度日本医師会最高優功賞表彰

(昭40) 田 中 茂 人

このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。  
 ※会員の方が医師会長などに就任された時や、各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

## 医学部・病院関係

### 定年退職

呼吸器・乳腺内分泌外科学 三 好 新一郎  
 産科・婦人科学 平 松 祐 司  
 保健学研究科 上 者 郁 夫

### 准教授就任

発達神経病態学 秋 山 倫 之

### 講師就任

CKD・CVD地域連携包括医療学 吉 田 賢 司  
 IVRセンター 渡 邊 敦 之  
 病院経営戦略支援部 鈴 木 康 司

### 転出

岩国医療センター 谷 本 光 音  
 (血液・腫瘍・呼吸器内科学)  
 カリフォルニア大学 佐 野 俊 二  
 (心臓血管外科学)  
 南岡山医療センター 吉 永 治 美  
 (発達神経病態学)

倉敷芸術科学大学  
 川崎医療福祉大学

許 南 浩  
 (岡山大学理事)  
 佐 藤 修 平  
 (放射線医学)

## 関連病院関係

### 新規入会

西宮渡辺心臓・血管センター (兵庫県)

### 所在地変更

屋島総合病院 (香川県)  
 (旧) 高松市屋島西町1857-1  
 (新) 高松市屋島西町2105-17

## 学位授与

### 博 士

#### 平成28年9月30日 (甲) (医歯薬学総合研究科)

杉 山 成 史	形成再建外科学
山 下 美 保	小児医科学
杉 本 盛 人	泌尿器病態学
宇 賀 麻 由	放射線医学
雜 賀 美 帆	形成再建外科学
竹 島 美 香	神経情報学
富 田 晃 司	放射線医学
池 田 智香子	精神神経病態学
浦 野 真 一	消化器外科学
吉 田 一 博	消化器外科学
三 浦 公	消化器・肝臓内科学
石 田 道 拓	消化器外科学
渡 部 聡 子	形成再建外科学
谷 口 恒 平	病理学 (腫瘍病理)

#### 平成28年12月27日 (甲) (医歯薬学総合研究科)

谷 野 雅 昭	麻酔・蘇生学
西 谷 正 史	消化器・腫瘍外科学
野 山 和 廉	耳鼻咽喉・頭頸部外科学
眞 鍋 明 広	病理学 (腫瘍病理)
尾 崎 修 平	整形外科学
江 原 弘 貴	総合内科学
竹 原 彩	皮膚科学
塩 崎 恭 子	麻酔・蘇生学
香 川 洋 平	整形外科学
中 道 亮	整形外科学

藤井 詩子 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 畑中 崇志 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 舟久保 徳美 公衆衛生学

平成28年12月27日(乙)(医歯薬学総合研究科)

保田 雪子 分子腫瘍学

平成28年度(平成29年3月)  
 岡山大学医学部医学科卒業者

石戸 佑典 安原 大貴 湯川 椋也 大丸 隼人  
 中田 悠介 松田 昌樹 渡部 寛史 青柳 壘  
 英賀真二郎 有吉 雪乃 生島 健太 池田 賢太  
 池田 礼奈 石井 貴大 石川 千尋 石田 智治  
 石原聡一郎 伊藤 太一 糸川 真未 井上 貴斗  
 井上 舞 岩村 紗弓 上田 裕一 白根 碧 フライズ  
 浦上 仁志 大石 恵一 大川 裕輝 大沢 一希  
 大槻 花穂 大坪 巧育 大本 智子 大森 真理  
 岡 あゆみ 岡 凌也 岡崎 右京 緒方 栞  
 尾下 遼 越智 聡子 籠浦 正彬 柏坂 舞  
 片岡 進 鎌村 真帆 亀井 裕子 假谷 彰文  
 河口 達登 川口優里香 川野 香 木原 走  
 葛目 亜弓 工藤 貴之 栗岡 勇輔 齊藤 宇亮  
 坂田 聡大 坂田 宏行 沢田 孝平 嶋崎 岳  
 杉山 新 角南 亮輔 関戸 崇了 妹尾 春佳  
 曾良かおり 鷹取 亮 高橋 利明 竹居 セラ  
 武口 哲也 田島 裕之 谷脇 祥吾 調枝 治樹  
 鶴房 里彩 寺嶋 悠也 中村 峻輔 長尾 良太  
 永木 瑞穂 行田 まな 成田 周平 川口満理奈  
 野海 拓 野木 祥平 藤本 沙里 埴生 典秀  
 濱田久美子 濱見奈央子 林 里美 林 直宏  
 原田 晋二 日向 礼奈 平井聡一郎 廣瀬 梓  
 福田 能丈 福元 花奈 藤本 耕慈 堀 萌子  
 堀川 恭佑 牧田美友紀 松原 千哲 水島 秀崇  
 水田 亮 三又明日香 三宅 広将 宮脇 規壽  
 明井 孝弘 村上 詩歩 村田 圭 村田有里恵  
 守本 祐一 矢杉 賢吾 山岡 大将 山崎 冴羅  
 山崎 悠 山崎 友輔 柚木 宏介 横田 雄也  
 横山 翔平 吉原 聡子 渡辺充希子 泉 はるか  
 佐野 智子 島谷 直孝 禅正 和真 藪下 広樹

昭23 今村 静生 28. 3. 16  
 昭23 古田 睦 廣  
 昭23専 佐藤 藤端 28. 4. 12  
 昭23専 濱野 充生 28. 10. 3  
 昭24専 唐井 昭 28. 11. 12  
 昭25 坂本 武司 28. 3. 6  
 昭25 古前 敏明 28. 9  
 昭25 関場 香 29. 1. 10  
 昭25専 市村 宏 27. 10  
 昭25専 久米 隆夫 26. 12. 8  
 昭25専 大村 真喜雄 29. 1. 27  
 昭25専 赤木 制二 29. 3. 15  
 昭25専 山下 三代吉 29. 3. 17  
 昭26 長田 高壽 29. 1. 6  
 昭26 志水 一朗 29. 2. 9  
 昭26専 井上 靖之 28. 5. 29  
 昭26専 田中 民子 28. 4. 29  
 昭26専 小塚 虎治郎 28. 11. 24  
 昭27 八幡 勝美夫 27. 11  
 昭27 湯浅 幹夫 27. 12  
 昭28 大久保 定雄 27. 12  
 昭28 安田 稔 28. 4  
 昭28 福 幸吉 28. 10. 23  
 昭29 森末 久雄 27. 11. 29  
 昭30 佐藤 泰雄 28. 11  
 昭30 森本 浩平 29. 1. 20  
 昭31 鈴木 勲 28. 8. 23  
 昭33 土田 潤一郎 27. 8. 5  
 昭37 藤原 恒弘 28. 12. 26  
 昭37 高田 茂 29. 1. 10  
 昭37 小川 智之 29. 1. 19  
 昭37 大本 武千代 29. 3. 7  
 昭37 小野 昭英 29. 2. 10  
 昭38 魚脇 路弘 27. 12. 21  
 昭38 下里 常弘 28. 10. 21  
 昭40 小坂田 和 29. 2. 12  
 昭40院 東野 秀雄 27. 12  
 昭41 塩飽 善友 28. 11. 14  
 昭41 五藤 正法 29. 4. 1  
 昭41 吉津 法爾 28. 2. 12  
 昭43 中桐 伸五 28. 12. 1  
 昭44 山下 縣鐵 27  
 昭45 下野 雅通 29. 1. 14  
 昭46 和気 義弘 29. 1. 28  
 昭46 藤原 唯朗 21. 12. 21  
 昭55 広瀬 英裕 28. 12. 22  
 平3 宮木 卓 27. 7  
 会員 久保田 井 祐蔵 27. 6  
 会員 笠井 藤 浩一 28. 11. 1  
 会員 佐藤 友 良和 28. 11. 22  
 会員 住森 下 義 28. 12. 30  
 会員 中桐 義 忠

会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

旧教員 古谷 生 28. 8. 18  
 昭20 津下 健哉 28. 5  
 昭20専 秋久 文夫 28. 6. 1  
 昭21 隅岡 正春 26. 5. 30



## 同期会だより

### 昭和28年卒クラス会

#### 昭28 矢部 芳郎

昭和28年（1953年）卒の者が、今年（平成28年11月12日）も集まりました。集まったのは6名、年々少なくなりますが、クラス会というものの性質上、やむを得ないことでしょう。去年の会以後に亡くなられたのは、伊原康夫、大久保定雄、福幸吉、松久光男、安田稔の5名。そして、同期卒業77名中、現在までの物故者は45名。

亡くなられた旧友の名前を読み上げ、黙とうしました。それから、それぞれの個人的なこと、旧友のこと、

最近の医療に関することなどについて話しました。そして、「できれば、お互い何とか元気で、来年も会おう」と言って、別れました。



参加者

前列、左より：入野昭三、小山靖夫、物部大成、北中 創  
後列、左より：矢部芳郎、松田 穆

### 昭和29年岡山醫科大學卒業生同期会 (二九医会)

#### 昭29 武智 秀夫

去る平成28年10月16日（日）ホテル・グランヴィア3Fルビーの間において、昭和29年岡山醫科大學卒業生の同期会が行われた。私たちは岡山醫科大學最後の卒業生で、今はない旧制高校卒業生である。

88人卒業した。逝去したもの50人、消息不明者2人で、残りの36人中14人が出席した。

粟井夫妻、奥田夫妻、菊井、倉橋、小池、小林夫妻、武智、多胡、谷、濱田、東、深江夫妻、守田、湯之上の18人がそのメンバーである。

一番若い人は昭和6年の早生まれ（85才）、一番年

長は昭和2年（89才）。一応みんな元気であった。

11：45より写真撮影、その後食事を取りながら、ずいぶん話が弾み、よくしゃべってくれた。みんな結構優雅に生活を楽しんでいるようだった。

来年の再会を期し、15：00に散会した。



### 平成28年度 みとう会 (昭和30年卒同窓会)

#### 昭30 山本 泰久

みとう会（昭和30年卒同窓会）が、2016年10月29日に岡山プラザホテルで開催され、20名（赤松、井上、

岡田、小高、金岡、喜多嶋、熊代、佐藤、高田、鍋島、西岡、松尾、森、森友、横矢、山本、御夫人4名）で楽しく会談しました。まず、今年10月に亡くなられた高松の本多正憲君に黙祷。松尾会長の年間のお話などの後、最高齢の熊代君（福島90歳）の音頭で乾杯！久しぶりの仲間同士での雑談は、耳が遠い人が多く、大きな声で話し合うので大変でした。補聴器が役に立たない人ばかり。近況報告をしていただきましたが、長

い演説の人たちの話もあり色々勉強になりました。85歳を過ぎててもやる気満々の人がたくさんいるのです。日本の将来はやはり自分の先の事を気にしていない老人たちが心配しているのではないかと思います。あまり病気の話はなかったようでそれなりに出席者は元気でした。例年のごとく小高君の美歌を何曲か聴き、珍しく岡田君の歌が披露されました。岡田君は救急医療普及のため世界中を駆け回った無理がでたのか車椅子での出席でした。解散は9時で、昔のようにしゃべり足りない仲間が1杯飲みながら粘る光景はなく、やはり年齢を感じたことでした。

山本 泰久 記



## 昭和31年卒業「壬辰会」の 卒業60周年記念同期会

### 昭31 小林 敏 成

卒業58年の同期会で、卒業後10年毎の大きな節目の記念同期会は60周年が最後になる、との皆さんの意見があり、会長の私と、庶務戸谷拓二、委員上田健治、大森達也、尾上修、楠本喬、国富昭夫、末長敦、渡辺好政の諸君で準備をはじめました。

58周年では鹿田キャンパス・ツアーを組みましたので、60周年は津島キャンパスと後楽園周辺への3時間程度のバスツアーが提案され、はがきで皆さんの意見を聞きますと、お互いに足腰が弱っているため、皆で話し合う「おしゃべり会」がよいとの返事でした。

戸谷君から60周年の記念冊子を作ろうと提案があり、会計的にも充分余裕があるので、彼が中心になって壬辰会医学部卒業60周年の記念小冊子を作りました。会員名簿に各人の近影写真付き近況報告と、下にコメントが書き込まれた集合写真集です。それに戸谷君が、医学部創立百周年記念絵葉書・1970年（昭和45年）の写真をはじめ、現在までの医学部の変遷を示す写真を説明つきで12頁つけ加えてくれました。

卒業60周年の壬辰会記念会は、平成28年5月19日（木）正午集合で、ホテルグランヴィア岡山の3階「サファイア」の間で行いました。出席は21人で夫人が5

人加わった26人の会でした。集合写真撮影のあと、総会では58周年後2年間の物故者（藤原久義、河野昌雄、前原福司、勝村達喜、浅野純生の各君）への黙祷、会計報告、連絡網の変更などのあと、今後の同期会は集まれる人で適宜に開くことなどを決めました。

宴会では、各人の年齢相応の体と考への近況報告が、ユーモアをまじえてありました。A君が一過性脳虚血発作で倒れ、出席していた榊原君の病院の救急車で入院ということも起こりました。

引き続き行われた二次会（おしゃべり会）では上記の記念小冊子を中心に、なごやかな思い出話がはずみ、16時30分に「お互いに体に気をつけよう」を合言葉に解散しました。

広島に生まれ、13歳で原爆の悲劇に直面した渡辺晋（筆名天瀬裕康）君が皆さんに原爆文学の新著『異臭の六日間』（近代文藝社）を謹呈してくれました。大感謝です。



## 昭和41年卒 卒業50周年記念同窓会

昭41 松本 皓

平成28年10月8日ANAクラウンプラザホテル岡山において、私共昭和41年卒の卒後50周年記念同窓会を開催致しました。卒後半世紀を経過し、後期高齢者に仲間入りしましたので、皆一様に頭の毛が薄くなったり、白髪化したり、顔にしわや老人斑が増えたりと老化現象が見られましたが、参加者58名はそろって元気一杯でした。体調の悪い方のため、今回は同伴者の参加も可能と致しましたが、奥様同伴の方は2名のみで、他の56名はいずれも単身参加でした。卒業時89名であったクラスメンバーのうち、物故者はこの時点で9名、病気療養中の方が3～4名おられました。我々のクラスは入学時には安保闘争の真っただ中、津島キャンパスの正門前には毎日ピケが張られておりました。また、卒業時にはインターン闘争のさなかで、インターンは大学病院に立てこもり、1年後の国家試験は全国規模でボイコット致しました。このように闘争の時代に育った我々は『憎まれっ子何とか』で年は取っても気は若く、物故者の数も比較的少ないようです。

卒業後に集金した年会費やこれまでの同窓会や行事などでプールしておいた同窓会会計が十分であったため、今回は会費は一切集めず、加えて同窓会後に残った資金を卒業50周年記念として岡山医学振興会と医学部ルネッサンス基金へ寄付させて頂きました。

記念同窓会は、最初に集合写真撮影に始まり、山崎善久君の司会のもと、物故者への黙とう、続いて事務局からの報告と今後の同窓会の在り方についての説明の後、清水信義君の開会のあいさつと乾杯の音頭に引き続きにぎやかな宴会となりました。

久方ぶりに同窓会に参加した方や遠方から来られた方を中心に近況報告がなされ、得意のカラオケも数多く披露されました。最後は小田滋君の閉会のあいさつで締め、次回同窓会での再会を誓って散会となりました。

なお、宴会の様子はプロの写真家をチャーターしてスナップ写真を224枚撮影し、これをディスクにダビングして参加者はもとより、欠席者にも配布致しましたところ、参加できなかった方から多くのお礼状が届き、宴会の様子や同級生の姿を把握することが出来て良かったと大好評でした。

終わりにになりましたが、1年半前から準備にご協力賜った在学中の各臨床グループの幹事の皆様にご心より御礼申し上げます。





## 昭和43年入学・昭和49年卒業生 (43-49会)の同期会報告

### 昭49 公文裕巳

2017年3月5日(日)に43-49会をホテルグランヴィア岡山にて開催しました。前回は、森田 潔先生の岡山大学学長就任をお祝いしての開催でしたので6年振りの会となりました。森田先生は、「岡山大学を国際的な研究・教育拠点としての『美しい学都』とする」と宣言して2011年4月学長に就任され、岡山大学のブランド力向上に6年間奮闘され、数々の成果を挙げられました。今回の会は、森田学長の任期満了の機会に、その労をねぎらうとともに、准高齢者世代となっている同期生の現況とこれからの語る会として企画しました。

予定の30名は、定刻の12時30分より前に全員が集合し、記念撮影の後に懇親会を開催しました。遠くからは、石川清司(沖縄)、橋本(旧姓中川)登紀子(滋賀)、山本康生(高知)、長樽 巧(愛媛)、福田賢司(鳥根)先生達が参加されました。3テーブルで各10名の着席で、バイキング形式の料理とアルコールを頂戴しながら、リレー形式で30名全員が時間制限なしで、それぞれの思いを語りました。約1/3の医院を開業されている方からは、新規高齢開業や後継者問題を含む苦労話もありましたが、概ね順調な経営環境で、独り身となり自由になった話のほかに、不妊治療、病児保育や在宅精神科医療など現在の社会問題に取り組んでいる元気の出る話がありました。約2/3の勤務医のほぼ全員が、既に第二の勤務地に異動しており、エイジシュートの実現など各自各様の日常の夢とともに、団塊の世代の我々が日本の社会の発展のために、75歳までは現役で社会貢献を含めて頑張らないといけないという活力のある准高齢者の話が多くありました。森

田学長からは、岡山大学病院の厚生労働省「臨床研究中核病院」、文科省「橋渡し研究拠点」、文科省「スーパーグローバル大学創成支援」等の採択など岡山大学の躍進に関すること、OUMCメディカルセンター構想についての思いと学長時代の病気の治療や外遊に関すること、それらを折々のエピソードを交えて話されました。6年間に悔いることなく、全力で岡山大学の発展につくしてこられたのは、「ノンポリではあったが、70年安保の時代を経験したことが、苦しくても負けなまいという不屈の精神の基盤となっていた。」というメッセージは、印象的であるとともに、同じ時代を生きてきた43-49会メンバー全員の今までの、また、これからの生き方への激励となりました。森田夫妻に感謝の意味をこめてねぎらいの花束を贈呈し、最後に、山本和秀先生からの近況報告と閉会の挨拶で会を終了しました。

なお、今回、同期会等の案内や住所等の変更確認(鶴翔会から未だクラス委員の私に毎年照会あり)を短時間で簡単に実施したいという思いから、出欠の返事を電子メールでお願いしました。予想に反して、極めて反応が悪く、出欠確認に長時間を要しました。次回からの案内は、従来どおり往復はがきとすることにしましたが、案内が確実に届くように、住所等の変更があった場合は、その都度、鶴翔会の事務局ないし私宛にご連絡をお願いします。次回の会は未定ですが、多数の先生方の参加を期待しています。





## 支部だより

### 平成28年度 鶴翔会呉支部総会の報告

呉支部長  
木村眼科内科病院  
木村 亘 (昭46)

平成28年度 鶴翔会呉支部総会が平成28年10月20日 呉阪急ホテルに於いて開催され、開業医・勤務医合わせて14名が参加いたしました。

総会では、支部長挨拶のあと議事（会計報告）に入り、平成27年度の会計報告が了承されました。

総会に続いて行われた特別講演では、木村 亘の座長で、岡山大学医歯薬学総合研究科 生体機能再生・再建学講座眼科学分野 白神 史雄 教授による「糖尿病網膜症に関する治療法」と題する講演が行われました。

講演では、糖尿病網膜症に関する内外の最新の知見や、歯に衣着せぬ核心を突いた解説、自験例の報告や今後の見通しをお教えいただき、大変感銘深い講演となりました。白神教授には、質疑にも答えていただき、その後の懇親会にも出席していただきました。

懇親会では4名のピチピチの研修医の先生方とも昔話に花が咲き、和気あいあいの中で楽しみ、くつろぎました。来年はもっと沢山の先生方に参加していただき、更に盛り上げていこうと語り合い散会しました。



### 本年度の鶴翔会松山支部総会報告

幹事  
四国がんセンター  
谷水 正人 (昭57)

本年度の鶴翔会松山支部総会が平成28年10月1日午後6時から道後のホテル椿館で開催された。今年度も山下治彦副会長の総合司会のもと、貞本和彦会長の力強い挨拶に始まり、粛々と本会の活動の報告があった。以下項目別に説明する。

- 1) 平成27年度会務報告：鶴翔会松山支部総会（平成27年10月24日、伊予鉄会館、参加者数29名）、親睦ゴルフの報告（平成27年11月3日、北条カントリー倶楽部、優勝井谷昭先生（昭和37年卒）、鶴翔会（岡山医学会）総会（平成28年6月4日、岡山プラザホテル）の報告があった。
- 2) 平成27年度会計報告が事務局より行われ、会計監査は永井伸也監査人より報告があり、承認された。
- 3) 役員人事：近藤陽一先生（平成2年卒松山赤十字病院小児科部長）が先任の小谷信行先生と交代して

新役員に承認された。役員は、新年度も会長1名、副会長1名、常任幹事1名、幹事19名、監事1名で構成される。

4) 鶴翔会本部の状況について報告があった。今年も事務局長妹尾行恭氏にお越しいただいた。森田潔学長のリーダーシップの下で岡山大学創立150周年記念行事が順調に進捗している状況が報告された。最近の岡山大学の発展ぶりがわかり、母校が益々発展している様子に会員一同大変感銘を受けた。

5) この後、岡山大学アラムナイ（全学同窓会）愛媛県支部（愛称：愛媛半田山会）と合同の総会並びに特別講演会が開催された。学長の「森田ビジョンの総仕上げ」と、愛媛大学泌尿器科学雑賀隆史教授（昭和63年卒）の「最近の泌尿器科手術—とくにロボット手術について」の特別講演が行われた。鶴翔会より25名、法文経ほか学部より36名の出席があり（写真参照）、懇親会では、貞本和彦先生自らのフラダンス（アロハ・坊ちゃんマドンナズ）なども披露され大いに盛り上がり交流できた。これらについては別途、アラムナイ全学同窓会報にて報告予定である。

以上、谷水正人（昭和57年卒）記



## 兵庫県鶴翔会神戸支部報告

神戸支部長

三輪 恕 昭 (昭39)

兵庫県鶴翔会神戸支部の2月総会を、全国的に大雪が予想された平成29年2月12日に、県庁前の兵庫県民会館で行いました。寒風が強い日でしたので欠席者も出ましたが、下記の9名が集いました。

本日までに9名の会員が亡くなりましたので、まずは1分間の黙祷をささげました。昨年はまだ、9月に兵庫県鶴翔会総会を我々の支部が担当しましたので、お互いに労をねぎらうことから始めました。昨年はじめから事務局が本格的に始動しはじめ、溝渕先生が着任早々から総会準備に入ってくれましたお陰で、無事にこの1年を乗り切れたのだらうとまずは感謝しております。

兵庫県鶴翔会神戸支部のこの1年間の会員の動きや、会費や収支の全版についての事務局からの報告を聞き、了承したあと、支部会員の名前と顔が合えばより親密になりやすいのではないかとの提案から、名簿に顔写真をつけたらどうかとの提案がなされ、検討す

ることとなりました。写真は、駅などにあるボックスで免許証大の写真を各自が撮って、事務局宛に1枚送ってもらうのは如何でしょうか。

支部総会を無事終えた後、地下1階の食堂で歓談しながら会食し、記念撮影を行いました（前列右より、藤井 S34、山本 S52、三輪 S39、八坂（陽）S34、後列右より、佐牟田 S59、溝渕 S52、郡山 S45、梶本 S59、城 S61 敬称略）。





## 第50回鶴翔会新居浜支部総会報告

住友別子病院

鈴木 誠 祐 (昭58)

本年は鶴翔会新居浜支部設立50周年に当たり、記念行事として平成29年2月4日(土)、16時から、あかがねミュージアムにおいて、鶴翔会新居浜支部設立50周年記念市民公開講座を開催いたしました。岡山大学病院院長榎野博史先生を講師に迎え、「健康長寿社会を目指す岡山大学病院」と題して講演していただきました。来るべき長寿社会に向けて健康寿命を延ばすためにはメタボ対策、健康診断、医療機器、運動、仕事が大切であること、テクテク・カミカミ・ニコニコ・ドキドキで健康長寿を達成しようということをジョークや問題形式を取り入れてお話され、さらに人類の進化と水の問題から腎臓病にはじまり、糖尿病・高血圧症と幅広い分野にわたり、一般市民にもわかりやすくご講演を賜りました。

引き続き、同日、18時30分から、リーガロイヤルホテル新居浜において、第50回鶴翔会新居浜支部総会が榎野病院長と妹尾行恭鶴翔会事務局長をお招きして、23名の先生方の参加で開催されました。宮田栄一支部長(昭37)のご挨拶、昨年にご逝去された故弓山真弓先生(昭24)・故仙波上夫先生(昭24)に対する黙祷のあと、事務局から会員移動の報告(平成29年1月現在、会員数87名：開業医22名・勤務医59名・特別

会員6名)があり、会計報告と監査結果(井上孝雄先生 昭40)が承認されました。その後、妹尾事務局長より岡山大学の医療面での充実した活動の様子、旧生化学棟大講義室改修など岡山大学医学部創立150周年記念事業の進捗状況、革新的医療技術創出拠点プロジェクトでの旧帝大にならぶ岡山大学の活躍の様子、学生の動向等について大学の近況をお話していただきました。母校のますます発展する姿にたいへん嬉しい思いがしました。記念撮影に引き続き、小西秀信先生(昭39)の司会で懇親会に移りました。西本健副支部長(昭47)の乾杯で幕を開け、榎野病院長、妹尾事務局長を囲んで和やかな雰囲気の中、和気藹々の懇親会となり、楽しい時間はあっという間に過ぎて、松尾嘉禮副支部長(昭40)の一本締めで中締めとなりました。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず新居浜まで足をお運びいただきご講演を賜りました榎野博史病院長、妹尾行恭事務局長に改めて感謝申し上げます。



## ゴルフ報告

住友金属鉱山株式会社別子事業所健康管理室

西本 健 (昭47)

例年通り、翌2月5日(日)に懇親ゴルフコンペを滝の宮カントリークラブにて行いました。諸般の事情が重なりエントリー8名、参加7名(宮田栄一先生昭37、小西秀信先生昭39、松尾嘉禮先生昭40、西本健、佐々木章公先生昭56、太田和美先生平2、福原哲治先生平4)でホールアウト6名と寂しい人数となりました。

生憎の雨天で雨具着用のプレーとなりましたが、特別ルール(クリーン&プレイス)も採用し、楽しくプレーしました。ダブルペリア優勝は福原哲治先生、BGは小西秀信先生でした。若手組は白ティー(55歳

以上)を使用、高齢グループはゴールドティー(70歳以上)からのプレーも可能な年齢ですが、飛距離自慢の方ばかりで、シルバーティー(65歳以上)を使用しました。結果、ドラコンやニアピンなど、順位賞以外の10個の各賞は高齢組の独占となりました。

ゴルフを続け健康長寿を延伸し、来年も元気で懇親ゴルフコンペに参加しましょう。若手も負けずに頑張りましょう。



## 平成28年度鶴翔会山口県支部総会

岩国医療センター  
藤本 剛 (会員)

平成28年11月19日に岩国医療センター附属看護学校において平成28年度の山口県支部総会が開催されました。

今回の支部総会を担当した青雅一先生（昭56年卒）の開会宣言、竹内仁司支部長（昭51年卒）のご挨拶に続き、庶務担当の弘中さんから会員数の動向（平成28年度支部会員総数216名）の報告がありました。その後、この1年間にご逝去された浅井敬一先生（昭37年卒）、富山忠彦先生（昭29年卒）、田中稔彦先生（昭23年卒）、板垣文夫先生（昭45年卒）の4名のご冥福をお祈りして全員に黙祷を捧げました。引き続き、副支部長が上岡博先生（昭23年卒）から亀井治人先生（昭59年卒）へ交代された報告があり、岩崎皓一先生（昭39年卒）から会計監査の承認をいただきました。

特別講演は佐伯晋成先生（昭56年卒）の司会で講師は麻酔・蘇生学教授森松博史先生をお迎えし「多職種で取り組む周術期管理」の演題で拝聴しました。岡山大学病院では年間10000件麻酔件数があり、その内約7000件を麻酔科が担当、PERIOシステムを導入し、痛みを止めるだけでなく食べて動けることが大事で

パラダイムシフトが起きていること、多職種が少しずつ頑張ること、そしてテクノロジーも大事だが目で見で判断することが重要という点につき熱くご講演いただきました。小坂二度見教授の小児エーテル麻酔の動画も大変印象的でした。

続いて鶴翔会事務局長の妹尾行恭様に「岡山大学医学部の現況」につきご講演いただきました。中国四国地方で唯一の臨床中核病院に指定された岡山大学病院は、最新の手術室・医療機器を整備し高度先進医療だけではなく、教育・研究においても目覚ましい成果を上げており、益々の発展が期待される状況であることをご教示いただきました。

その後、今春から岩国医療センターに着任した初期研修医6名の紹介があり、全員で記念撮影を行い、三井清先生（昭36年卒）の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。森松教授・妹尾様もご参加いただき大変楽しい時間を過ごすことができました。初期研修医から超ベテランの医師に至る様々な世代の医師が親交を深めることができ、とても有意義な懇親会でしたが、時間の経つのはあっという間で、竹内支部長の挨拶があり次回小郡での再会を約束して閉会となりました。

最後になりましたが、ご多用中にもかかわらず、鶴翔会山口県支部総会のため岩国までお越しくださり、懇親会までご出席いただきました森松教授、妹尾事務局長に深謝いたします。今後ともよろしく願いいたします。





## 2017年2月26日 岡山医学同窓会香川県支部会

香川県立中央病院  
青江 基 (昭61)

40名 (+教授2名)

2017年2月26日に、中尾篤典教授、塚原宏一教授のお二人を含めて42名の参加者により、恒例の高松市二蝶で岡山医学同窓会香川県支部総会および医学講演会が行われました。総会では、森下立昭支部長のご挨拶の後、この一年間の物故者の6名の先生方に対して黙祷を行いました。会計などの事務連絡にて総会は修了し、続けて医学講演会に入りました。

まず、救急医学講座の中尾篤典教授より、「救急医なんてやっとなれるか!」と題して、ご講演を頂きました。救急医の忙しい日々の紹介や、先生の御略歴、特に米国留学中にアメリカ側から東日本大震災に救助隊の一員として現地に入って活躍された話などが印象的でした。さらに、当日参加していた初期研修医の先生を前に出して即席の救急外来演習をされ、いかに救急医学が研修医に必須の知識かということを示されました。そして、岡山医療圏での救急体制に言及され、救急車の応需率、断らない救急を目指しているが、応需率を上げるがために、救急患者を一端は受容しても結局は転移搬送する例も多く、岡山の救急は、応需率

は高く、病院収容時間までは短いものの、病院間の転院搬送が多いのが特徴ということで、救急医は、このような患者の流れをコントロールするのが役目とのことでした。救急医を増やさなくてはならないということ強調しておられ、医学生に、しっかりとした救急教育をして、将来救急を志す人を育ててゆきたいと、力強い御言葉を頂きました。

次に、小児医科学講座の塚原宏一教授より、「岡山大学小児科の現状報告と将来予測」と題してのご講演を頂きました。御自分の経歴を簡単に御紹介された後、小児科診療とは、「こどもの総合医」として、全ての臓器診療をカバーするだけでなく、成育、身体と心の健康、さらに社会・保健など多岐に渡る医療に精通していなければならないとお考えを示されました。その後、岡山大学小児科の現況報告、将来予測と話は進み、岡山大学病院小児科専攻医研修プログラムを詳しくご紹介頂きました。将来は、岡山大学病院が小児科若手医師のマグネット病院となり、「日本で最も充実した小児医療」を新たな資源として、国内外からの患者流入と医療者交流を促しながら、グローバル化を体現するといった将来への頼もしいお話しをお聞きすることが出来ました。最後に、小児医療と研究マインドとして、ご自身のご研究の一部や、教室での研究の一部を御紹介頂きました。

両教授の御講演をお聞きした後は、そのまま懇親会に移り、楽しい夜は更けて行きました。

(文責 S61 青江)



## H28年度鶴翔会近畿総支部報告

近畿支部長

**野上浩實(昭48)**

平成27年度鶴翔会近畿総支部同窓会は平成29年3月5日(日)、リーガロイヤルホテル大阪で開催されました。今年はいららかな初春の好天にめぐまれての開催となりましたが、常連出席の先生方の体調不良、また研修医の先生は多忙な勤務もあり、参加人数は22名となりました。

谷口武先生(昭60)の司会の下、先ず本年度亡くなられた井原康夫先生(昭28)、鈴木勲先生(昭31)、山縣鐵一先生(昭44)、福幸吉先生(昭28)へ黙祷を捧げ、全員で御冥福をお祈りしました。次いで、近畿総支部長、野上浩實(昭48)、阪奈和支部長、谷口武先生(昭60)、京滋部支部長の波柴忠利先生(昭40)より支部報告があり、総会出席の増加のため、若手の先生の参加が必要、研修医の参加無料、平成卒の先生の動員などの対策をたてる必要があるなどの提案がありました。H27年度収支決算報告の後、妹尾事務局長より岡大医学部および鶴翔会の現況について報告があり、4月より学長に就任される榎野博史先生を中心に、臨床研究中核病院としてさらなる発展を遂げる決意であること、また150周年記念事業として大規模な内部改修工事が予定されているとの報告がありました。続いて、健康科学研究所所長の井上正康先生(昭45)による「21世紀病の逆襲と腸内細菌」の一般講演があり、人間の腸内に宿る数百兆の腸内細菌は、神経伝達物質を介して肥満にも関与し、多様な機能を支配しているなど興味深い内容に一同感嘆しました。次に、岡山大学大学院消化器・肝臓内科学教授、岡田裕之先生より「消化器病診療の現況と展望」という演題で特別講演を頂きました。最近の消化器内視鏡の進歩には著しいものが

あり、早期胃がん、早期咽頭がんに対するESD、術後の狭窄防止に細胞シート移植など、動画像を交えて御供覧頂きました。また、バイオマーカーとしての便中へモグロビンの検出や膵がん診断への超音波内視鏡の応用も目を見張るものがあり、先端医療の神髄に触れました。その後、全員で記念撮影があり、安田正幸先生(昭43)の司会の下、中華料理に舌包みを打ちながら懇親会に入りました。今年は小人数なので、ほぼ全員に近況報告を頂き、またたく間に時間が経過し、最後に岡山大学医学部学生歌を全員で合唱し、来年の再会を約束して閉会となりました。今回の成果として、平成卒の先生方に多数参加して頂き大いに盛り上がったことです。今後とも他の同門の先生にも呼び掛けて、近畿地区の鶴翔会を盛り立てていきたいものです。末尾ながら近畿総支部(大阪、奈良、和歌山、京都、滋賀、三重)に在住で来年度参加の希望の先生がございましたら、下記までご一報下されば、来年度案内状をお送りいたしますのでよろしく申し上げます。

〒598-0043 大阪府泉佐野市大西1-5-20

谷口病院 谷口 武(鶴翔会阪奈和支部長)

TEL 072-463-3232

FAX 072-463-5714



# 新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2016.9～2017.3)

日付	媒体	見出し	備考
2016/ 9/18	山陽新聞	18 備中力 地域を語る	在宅医療を支える中核に急性期から終末期まで 来年4月老健施設開設 難波義夫 (昭50)
2016/ 9/19	山陽新聞 MEDICA	13 名医に聞く 斜視・弱視の治療	傷跡残りにくい高度な手術 長谷部 聡 (平4院)
		14 自己免疫と戦う ～善と悪のはざままで～	自己免疫疾患と皮膚病変 - こんな皮疹に注意! - 大野隆司 (旧教員)
		15 慢性閉塞性肺疾患COPDの現状	淵本康子 (平23院)
		16 スペシャリスト 小児神経外来	障害児の育ち 地域で支える 御牧信義 (昭58)
	山陽新聞	22 新市民病院が完成	来月1日開院 瀬戸内市民
2016/ 9/25	山陽新聞	33 がん遺伝子調べ治療法	最先端の検査外来 効果見込める薬を選択 岡山大病院
2016/ 9/28	山陽新聞	15 加齢と運動機能の衰えて発症	「ロコモ度」判定、予防を短時間の継続的体操有効 千田益生 (岡山大病院総合リハビリテーション部)
		4.5 座談会 次代に繋がる岡山の創造	岡山駅運動公園口エリアから考える 学園都市 大学の人事や研究地域に生かす 森田 潔 (岡山大学長)
2016/ 9/30	山陽新聞	30 肺がん予防へ あす市民講座	岡山赤十字病院
2016/10/ 2	読売新聞	14 病院の実力 胃がん	粘膜下層越えたら手術 腹腔鏡は実績数参考に 岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、広島市民、福山市民、香川労災、愛媛県立中央
		28 病院の実力 岡山編 胃がん	ESD合併症少なく 岡山大病院及び岡山大学関連病院
		29	腹腔鏡 肉眼より鮮明に 香川俊輔 (岡山大病院低侵襲治療センター)
	山陽新聞	34 407例目脳死、肝臓は岡山大へ	岡山大病院
2016/10/ 3	山陽新聞 MEDICA	13 院長に聞く 岡山旭東病院	人間尊重を基本に理念経営 土井章弘 (会員)
		14 自己免疫と戦う ～善と悪のはざままで～	突発性(免疫性)血小板減少性紫斑病について 竹内 誠 (昭58)
		16 スペシャリスト 前立腺がんロボット手術	治療実績国内上位 全国から指導依頼 上原慎也 (平5)
	山陽新聞	23 移植医療理解して	大藤剛宏 (岡山大病院臓器移植医療センター)
2016/10/ 4	山陽新聞	28 409例目脳死判定 肝臓は岡山大へ	岡山大病院
2016/10/ 5	山陽新聞	32 50代女性への脳死肝移植終了	岡山大病院
2016/10/ 6	山陽新聞	26 特養訪れ無料眼科検診	市専門医部会 目の愛護デー前に 杉本敏樹 (平1)
2016/10/16	山陽新聞	29 乳がん検診大切さ学ぶ	ピンクリボン岡山 公開講座に 岡山大病院乳腺・内分泌外科
2016/10/17	山陽新聞 MEDICA	13 名医に聞く 岡山県における糖尿病医療の新展開	かかりつけ医中心に連携体制強化 四方賢一 (岡山大病院新医療研究開発センター)
		16 高難度疾患に多角的な治療	高度脳神経センター 開設1年半で成果 複数診療科が連携 岡山赤十字
2016/10/18	山陽新聞	28 人権学習の場に	社会交流会館完成祝う 邑久光明園
2016/10/21	山陽新聞	26 最適のがん治療選択	予防教育活動にも意欲 赤在義浩 (昭58)



日付	媒体	見出し			備考	
2016/10/24	山陽新聞	21	松岡良明賞祝う会	今後も努力	赤在義浩(昭58)	
2016/10/25	山陽新聞	26	福山市民病院で女性脳死と判定	肺は岡山大病院へ	福山市民、岡山大病院、愛媛県立中央	
2016/10/26	山陽新聞	28	50代女性への脳死肺移植終了		岡山大病院	
2016/10/27	山陽新聞	30	最新放射線治療確立へ連携協定	岡山大とIEAE	岡山大学	
			新学長4候補 岡山大公表	来月21日選考会議	横野博史(岡山大病院)	
2016/10/31	山陽新聞	23	ダ・ビンチ活用600件超	前立腺がん全摘 中四国最多	岡山大病院	
			米名門大で活躍を		佐野俊二(岡山大心臓血管外科学)	
2016/11/ 2	山陽新聞	7	岡山大メディカルセンター構想	地域の発展へ有意義	医療機関連携でシンポ	岡山大
2016/11/ 3	山陽新聞	26	神戸大学と連携協定	ハンセン病教育・啓発推進		邑久光明園
2016/11/ 4	山陽新聞	23	高額治療薬に戸惑い	劇的效果も医療費膨張		吉岡弘鎮(平12)、川井治之(平4)、別所昭宏(平1)、田端雅弘(昭60)
2016/11/ 6	読売新聞	15	病院の実力 乳がん治療			岡山大病院、姫路赤十字、広島市民、福山市民、香川労災、四国がんセ
		26	病院の実力 岡山編 乳がん治療			岡山大病院、倉敷中央、おおもと、倉敷成人病セ、津山中央、岡山市民、広島市民、福山市民、福山医療セ、中国中央、尾道市民、庄原日赤
	山陽新聞	28	在宅医療を考える がんの子どもを支えよう	晴れやかネット活用テーマ 治療や復学 母親の体験発表も	事例報告や講演 岡山大でフォーラム開幕	藤井基弘、小森栄作 嶋田 明(岡山大病院小児科)
2016/11/ 7	山陽新聞 MEDICA	13	院長に聞く 川崎医科大学総合医療センター	救急、高度専門医療、リハビリ柱に		川崎誠治(昭61)
		16	アトピー性皮膚炎の治療法は	症状に応じ最適な薬選択	保湿で皮膚バリアー維持	大野貴司(旧教員)
	山陽新聞	23	腎臓病センター移転開設	透析ベッド増、機能強化		岡山済生会総合病院
	山陽新聞	23	迅速支援へプロジェクト	南海トラフ地震で甚大被害想定 高知、徳島8市町対象	医師派遣など訓練	菅波 茂(昭48)、川崎誠治(昭61)
2016/11/12	山陽新聞	35	先人の功績伝える	旭川荘に「敬愛館」オープン		旭川荘
			時間外労働削減へ岡山旭東病院視察	過労死防止月間で労働局		岡山旭東病院
2016/11/13	山陽新聞	29	山陽新聞を読んで	野球への憧憬喚起させる		石川 紘(昭40)
2016/11/20	山陽新聞	30	最期まで笑顔で 在宅医療のあした	第4部提言 ③中山間地ニーズに応えまちづくり		菅原英次(昭56)
2016/11/21	山陽新聞 MEDICA	13	名医に聞く 肺がんの胸腔鏡手術・気胸の治療	1200例執刀 全国トップクラス		森山重治(昭55)
		15	自己免疫と戦う ～善と悪のはざままで～	肺高血圧症 ～その正体と恐れ寄る陰にせまる～		福家聡一郎(平8)
			心によりそう人々	うつ病 治療と回復経過		清水義雄(平4)
2016/11/22	読売新聞	31	総合大ならではの連携と事業推進	次期岡大学長		横野博史(岡山大病院長)
	山陽新聞	28	学部連携深め変化を	岡山大次期学長に聞く	財政基盤確立もテーマ	
		30	岡山大学長に横野氏			
2016/11/25	読売新聞	27	脳血管の収縮原因解明	くも膜下出血治療	岡山大、抗体作成成功	西堀正洋(岡山大薬理学)、伊達 勲(岡山大脳神経外科学)
	朝日新聞	25	くも膜下出血 手術後の動脈収縮	誘導たんばく質確認		
	山陽新聞	32	くも膜下出血 血管収縮仕組み解明	独自治療剤で改善		



日付	媒体		見出し		備考
2016/11/26	毎日新聞	24	くも膜下出血後遺症 新治療法開発の可能性	引き金タンパク質特定	西堀正洋(岡山大薬理学)、伊達 勲(岡山大脳神経外科学)
	日経新聞	42	くも膜下出血の後遺症	引き金物質特定	
2016/11/27	山陽新聞	18、19	第4回晴れやかネット研究会 住み慣れた地域で暮らし続けるために		在宅医療・介護の情報連携も 合地 明(昭51)
2016/11/29	山陽新聞	24	ミャンマー医療支援続ける岡山大	歯学でも交流本格化	若手4人受け入れ 岡山大学
2016/11/30	山陽新聞	26	市文化奨励賞	発展へ一層尽力して	喜多村真治(岡山大病院腎臓・糖尿病・内分泌内科)
		29	心筋再生医療を追究	日本の医学発展に成果還元	佐野俊二(岡山大心臓血管外科学)
2016/12/ 3	山陽新聞	28	研究者15人を助成	岡山医学振興会が贈呈	岡山医学振興会
2016/12/ 4	読売新聞	16	病院の実力 肝臓がん	肝臓がん 主な治療は3つ手術、ラジオ波、肝動脈塞栓療法 状態から判断	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、岡山済生会、福山市民、広島市民、香川県中、愛媛県中、高知医療セ
		28	病院の実力 岡山編 肝臓がん	ラジオ波 体負担少なく	岡山大病院、倉敷中央、岡山済生会、岡山市民、津山中央、倉敷成人病七、福山市民、福山医療セ、広島市民、中国中央、尾道市民、庄原赤十字、井上、香川県中、愛媛県中、高知医療セ
2016/12/ 7	山陽新聞 MEDICA	15	名医に聞く 小児の重症疾患治療	中四国全域から患者受け入れ	塚原宏一(岡山大小児医科学)
		16	アドバンス・ケア・プランニングを知ろう	生き方見直す機会に	松岡順治(岡山大病院緩和と支持医療科)
2016/12/ 9	文芸春秋 1月	197	名医の遺言 「マニュアル世代の医師たちへ」	医学部で「人間」を鍛えろ	小山靖夫(昭28)
2016/12/11	読売新聞	12	がん患者ごとに効く薬探す	ゲノム診療 遺伝子の異常、幅広く	岡山大病院
	山陽新聞	30	医学研究通じ交流	岡山で西日本フォーラム 14大学から110人参加	岡山大医学部
		32	岡山大ブランド力1位	中四国59大学調査 医学部実績評価か	岡山大学
2016/12/13	読売新聞	18	医療ルネサンス 精神科救急	「措置入院」判断に難しさ	来住由樹(平2)
2016/12/14	山陽新聞	26	高原慈夫基金2施設に助成金		故高原慈夫(昭6)、高原郁夫(昭45)
2016/12/17	山陽新聞	28	がん細胞狙い薬運搬	林原発見の細胞活用	進行患者治療に期待 藤原俊義(岡山大消化管外科学)、田澤 大(岡山大病院新医療研究開発セ)
2017/ 1/ 8	読売新聞	10	病院の実力 血液がん治療	血液がん 外来治療の患者増	造血幹細胞移植は症例数目安に 岡山大病院、倉敷中央、中国中央、愛媛県立中央
		26	病院の実力 岡山編 血液がん	分子標的薬 副作用少なく	種類増え選択に余地 岡山大病院、倉敷中央、岡山医療セ、岡山市民、岡山赤十字、岡山労災、中国中央、広島市民、尾道市民 前田嘉信(岡山大病院血液・腫瘍内科)
	山陽新聞	26	岡山大病院で脳死両肺移植	30代男性	岡山大病院
2017/ 1/ 9	読売新聞	23	ブランド力 岡大1位	中四国59大学調査	岡山大学
	山陽新聞	22	30代男性への脳死肺移植終了		岡山大病院
2017/ 1/14	山陽新聞	24	この人 腎臓の再生医療研究		喜多村真治(岡山大病院腎臓・糖尿病・内分泌内科)
2017/ 1/15	読売新聞	35	医療の質向上への連携	大規模病院 岡山市に集中	岡山大病院、岡山市民、岡山済生会、岡山赤十字、岡山労災、岡山医療セ

日付	媒体		見出し		備考
2017/ 1/16	山陽新聞 MEDICA	15	院長に聞く 笠岡第一病院	地域と歩む医療が大切	橋詰博行 (昭52)
		17	自己免疫と戦う ～善と悪のはざままで	がんと免疫	細川 忍 (平10)
		18	川崎医科大学総合医療センター開院記念	第1回市民公開講座	瀧川奈義夫 (昭63)、猶本良夫 (旧教員)
2017/ 1/18	山陽新聞	30	川崎医科大学 医療センター病院長選出		猶本良夫 (旧教員)
2017/ 1/22	山陽新聞	27	ハンセン病療養所	施設保存を議論 関係者らシンポ	長島愛生園、邑久光明園
2017/ 1/26	山陽新聞	25	脳卒中予防や症状学ぶ	「LaLa Okayama」セミナー	杉生憲志 (岡山大病院脳神経外科・IVRセンター)
2017/ 1/30	山陽新聞	20	長時間労働解消へ 医療現場働き方改革	県研修会で医師ら学ぶ	則安俊昭 (昭60)
			実用化高まる期待	正常細胞ダメージ減 患者の負担軽減	岡山大、松井秀樹 (岡山大細胞生理学)
		21	次世代がん放射線治療	薬剤加速器完成目指す 研究センター4月開設	
2017/ 2/ 2	読売新聞	26	岡大に最新がん研究拠点	中性子療法確立へ今春	IAEAなどと連携、鏡野町が研究費寄付
	山陽新聞	7	岡大に支援拠点を	岡山同友会とAMDA構想 大規模災害に備え	菅波 茂 (昭47)
		27	最新がん放射線治療研究	岡山大と鏡野町協定 拠点施設整備目指す	岡山大
2017/ 2/ 3	山陽新聞	25	高梁、真庭の病院へ	岡山大医学部地域枠第1期生2人	岡山大医学部
2017/ 2/ 4	読売新聞	31	歴史を振り返り岡大将来像を探る	あすシンポ	大塚愛二 (岡山大医学部長)、金政泰弘 (昭26)
2017/ 2/ 5	読売新聞	17	病院の実力 スポーツ外傷治療	膝の靭帯 腱を移植して再建	「後十字」手術 高い技術必要
		28	病院の実力 岡山編 スポーツ外傷	関節鏡 手術痕小さく	
		29		前十字靭帯 必ず手術を	
2017/ 2/ 6	山陽新聞	21	岡山大の歴史学ぶ 公開シンポ		大塚愛二 (岡山大医学部長)
		23	抗生物質減 急ぐ病院	薬効かない耐性菌 影響拡大	正しい知識 患者に啓発へ
	山陽新聞 MEDICA	14	川崎医科大学総合医療センター開院記念市民公開講座 岡山市中心部の脳神経センターとしての役割		岡山大病院、岡山済生会、岡山市民、倉敷中央、国富泰二 (昭41)
2017/ 2/ 8	山陽新聞	25	医師偏在 地域医療の課題	岡山大医学部1年生実習報告	岡山大医学部
2017/ 2/10	山陽新聞	28	ベトナムで21日肺移植	6歳男児へ同国初成功目指す	岡山大病院
2017/ 2/12	山陽新聞	29	拒絶反応減 治療効果的に	検査や手術子供に説明 プレパレーション広がる	岡山大病院、倉敷中央、倉敷成人病セ、福島邦博 (平2)
	読売新聞	35	岡大 ベトナムで肺移植	21日執刀 6歳男児 海外2例目	岡山大病院
2017/ 2/15	山陽新聞	27	ベトナム初 肺移植成功へ全力	現地医療進展に意欲	岡山大病院
2017/ 2/17	山陽新聞	29	がんテーマ あす公開講座		岡山赤十字病院、山田了士 (岡山大精神神経病態学)
2017/ 2/18	読売新聞	29	生体肺移植の子に届け	ベトナムで手術執刀医に千羽鶴 岡山南高生	大藤剛宏 (岡山大病院臓器移植医療センター)
	山陽新聞	31	医師もおむつや介助	「する側」「される側」体験講座	医療、介護連携強化へ
			肺移植の男児へ千羽鶴	岡山南高生 岡山大チームへ託す	岡山大病院

日付	媒体		見出し	備考
2017/ 2/20	山陽新聞 MEDICA	13	院長に聞く 津山中央病院 地域の医療を守り、活性化 の中核に	藤木茂篤（会員）
		16	回復者と共生する社会を 岡山の中学校で「こころの 病気を学ぶ授業」	佐藤光源（昭42院）
2017/ 2/21	山陽新聞	28	男児を診察 準備整う きょうベトナム初の肺移植	岡山大病院
2017/ 2/22	山陽新聞	24	集い特集 岡山大学医学部 卒業50周年同窓会	岡山大学医学部41年卒業の 皆さん
		29	「栄養療法」注目集まる 医師や薬剤師チーム 患者 サポート	県内48施設導入 10年で2 倍 犬飼道雄（平18院）
		31	ベトナム初 肺移植成功 男児の容体安定	6時間半 満点の出来 岡山大病院、大藤剛宏（岡 山大病院臓器移植医療セン ター）
2017/ 2/23	読売新聞	31	ベトナム男児肺移植成功 2、3か月後退院目指す 岡山大チーム	岡山大病院
	山陽新聞	35	ベトナムで手術成功の男児 移植肺 良好に機能	
2017/ 2/26	山陽新聞	35	事前の話し合い大切 終末期医療テーマ 公開シ ンポに250人	岡山県医師会
2017/ 2/27	山陽新聞	28	436例目脳死 肝臓は岡山大 へ	岡山大病院
2017/ 2/28	山陽新聞	35	岡山大病院で脳死肝移植 60代男性へ	岡山大病院
2017/ 3/ 6	読売新聞	34	病院の実力 災害拠点病院 非常時の備えに差 浸水対 策や広域避難訓練	岡山赤十字病院、香川県立 中央、あき総合、高知医療セ、 近森
2017/ 3/ 7	山陽新聞	26	岡山大学に起業家育成拠点 新ホール建設へ	岡山大学
		27	岡山大病院で初の脳死ド ナー 腎臓など移植へ	岡山大病院、岡山医療セン ター
2017/ 3/ 8	読売新聞	35	岡山に国際救援拠点構想 大規模災害に備えAMDAな ど	菅波 茂（昭47）
	山陽新聞	31	岡山大ドナーの腎臓 40代 男性に移植手術終了	岡山医療センター、岡山大 病院
2017/ 3/11	山陽新聞	38	439例目脳死、肺は岡山大へ	岡山大病院
2017/ 3/12	山陽新聞	27	読者のページ 山陽新聞を 読んで 医療による国際貢献	石川 紘（昭40）
		32	30代男性への脳死肺移植終 了	岡山大病院

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。



## 関連病院だより

### 社会医療法人渡邊高記念会 西宮渡辺心臓・血管センター

病院管理者・脳神経外科部長 榎田 昌平

この度は、岡山大学医学部の関連病院としてご承認いただきまして、誠にありがとうございます。

社会医療法人渡邊高記念会は、初代理事長の渡邊高（岡山大学医学部第2外科出身）が昭和40年に西宮の地に西宮渡辺病院を開設したことに始まります。平成22年県内第一号となる社会医療法人の認定を受けました。昭和49年には早くも脳神経外科を開設し、昭和51年9月に関西地区では一番にCTスキャナーを導入した病院でもあります。岡山大学の第一内科、第二外科から医師派遣をいただき、平成9年からは脳神経外科教室からも常勤専門医に来ていただくようになりました。

西宮渡辺心臓・血管センターは、地域の循環器医療に対する初代理事長の熱い思いで、岡山大学心臓血管外科佐野教授のご指導のもとに、平成18年6月1日に西宮市内の中心地に開設されました。開院以来、地域の循環器専門病院として着実に発展を続けています。

以下に、施設の概要を示します。

【病床数】100床（ICU 12床、SCU 6床）

【診療科】内科、循環器内科、心臓血管外科、脳神経外科、放射線科、不整脈科、麻酔科

【医師数】男性16人、女性5人（平成29年4月）

【主な医療職】看護師105人、臨床検査技師11人、理学療法士16人、薬剤師6人、作業療法士3人、診療放射線技師7人、言語聴覚士1人、臨床工学技士9人、管理栄養士4人、救急救命士6人、臨床心理士1人

【主な施設・組織】脳卒中センター、心血管蘇生センター、疾病予防運動施設、予防介護通所リハビリテーション

【主な設備】ハイブリッド手術室、ハイブリッド対応血管撮影装置、血管撮影装置2台、低体温療法装置、2管球搭載CT（シーメンス製 SOMATOM Force、2×192）、1.5テスラMR装置、平成29年度3テスラMRI追加

【平成28年診療実績】▽急性大動脈解離 51件 ▽冠動脈バイパス術 13件 ▽心臓弁膜症への外科手術 26

件 ▽経皮的冠動脈形成術 426件（緊急 162件、待機 264件） ▽大動脈ステントグラフト術 6件（胸部 5件、腹部 1件） ▽慢性心不全へのデバイス治療 4件 ▽不整脈へのデバイス治療 28件 ▽カテーテルアブレーション術 190件 ▽脳神経外科手術 127件（脳動脈瘤クリッピング 20件、コイル塞栓術 10件、頸動脈内膜剥離術 10件、脳梗塞に対する急性期血栓回収術 10件等）

開設当初は岡山大学の心臓血管外科教室から常勤医の派遣をしていただきましたが、現在は神戸大学の関連施設として心臓血管外科常勤医2名体制で年間100例を超える心臓大血管手術を行っております。また、循環器内科は近隣の兵庫医科大学に医師派遣をしていただいた時期を経て、現在は出身大学に関係なく優秀な21名の常勤医が頑張っています。平成26年から不整脈のアブレーション治療も開始しており着実に件数が増加しています。また、119番通報と同時に医師や救急救命士が出動するラピッドレスポンスカー（ドクターカー）を導入し、平成27年6月から24時間運用による救急診療体制を整えています。平成26年から脳神経外科診療も開始しており、平成27年からは常勤脳外科専門医3名体制で24時間救急応需が可能になっています。さらに平成28年9月から脳卒中内科医1名も加わり、平成28年の手術件数は120件あまりに達しました。平成29年度からは脳外科も常勤5名体制となる予定です。

このように当院は心臓・脳の循環器疾患に特化した病院であり、最新の高度医療機器を設備して救急疾患への迅速・的確な対応が可能です。

平成28年には病院機能評価を初回受審し6月に認定を受けることができました。以前からIPW（多職種連携）カンファレンス、心不全カンファレンスなど多職種参加によるカンファレンスを積極的に行っており、診療・ケアの質向上につなげていることに対して高評価（S）をいただきました。



当院は、おかげさまで昨年平成28年に10周年を迎えることができました。これからも『敬天愛人』～命を敬い人を愛する医療の実践～ という当法人の理念のもとに、循環器・脳血管疾患の超急性期から慢性期までに対応すべく、職員一丸となって頑張っております。

岡山大学関連病院の皆様には、今後ともご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



下山敦士

# 歴史の広場

## 1898（明治31）年の第三高等学校 医学部と1902（明治35）年の岡山 医学専門学校と岡山県病院について

昭48 石田 純 郎

国立国会図書館が古い図書について、インターネットで公開を始めた。1898（明治31）年の第三高等学校医学部と1902（明治35）年の岡山医学専門学校と岡山県病院についての写真と記事を見つけたので、報告する。

細謹舎は表町の天満屋の南側に店舗を持ち、昭和30年代には岡山市で最も大きな書店の一つであったが、すでに廃業した。戦前には店舗は上ノ町にあり、出版にも携わっていた。

1898（明治31）年5月7日刊の読紫楼主人著の『訂正増補 岡山名所図会』は、初版が1892（明治25）年の刊行で、この本はその第5版である。編集者兼発行者は岡山市大字上ノ町60番邸の北村長太郎、発行所は同所在地の細謹舎である。その28頁から29頁にかけて、岡山県病院と第三高等学校医学部の記事があり、巻頭の写真頁に、第三高等学校医学部の写真がある。

岡山県病院（内山下） 岡山城を出て、旧路をとりて、高等小学校の南を出れば、宏壮なる家屋あり。これを岡山県医学校とす。院はもと垂公園のある地に設けしを、明治23年ころに新築し、翌年移りたるものにて、その器具等の完全せる、蓋わが国に於て稀に見るところなりといふ。ことを以てその来りて治療を乞ふもの、

常に院に満つ。（岡山県病院は現在のRSK本社の道を隔てて、向かいにあった）

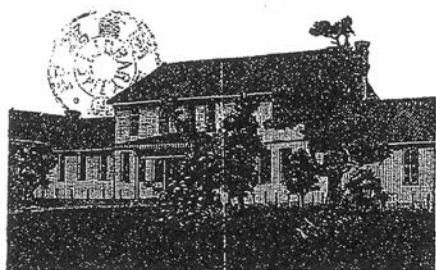
第三高等学校医学部 岡山県病院の南に在るものを、第三高等学校医学部とす。その境域広潤にして、その屋宇高爽たり。初め今の高等小学校の有る地に設けしを、病院を新築するときに、共に新築して、ここに移れるものにして、内山下の中央を占め、病院とともに、岡山の一偉観なりとす。この南に高く煙突の聳ゆるものを。（写真①）

1902（明治35）年11月23日刊の『岡山後樂園 備作名勝写真案内』は、実質上、『岡山名所図会』を改称した書で、著者兼発行者は岡山市大字上ノ町55番地の北村長太郎、発行所は同所在地の細謹舎である。その32頁と33頁に岡山県病院と岡山医学専門学校の写真と記事がある。

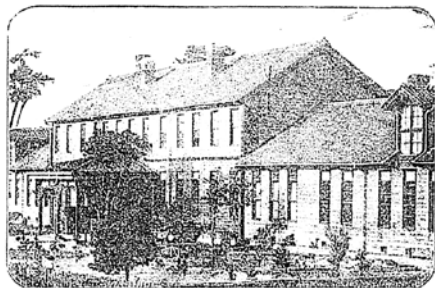
岡山県病院は、関西に於て、一頭地を抜き、他府県より診療を乞ふものの多きは、よく人の知るところなり。其理由とする所は、医員皆其人を得て、所謂起死回生の実効を奏するを以てなり、本県は既に甲種医学校として令名あり。尋で医学部を設けられ、今の医学専門学校の教授は皆其技を此病院に揮はるるを以て、かく好評を博せる、決して偶然にあらず。位置は、即ち内山下にありて、医学専門学校と相並べり。（写真②）

岡山医学専門学校は内山下にあり。此校の前身を、第三高等中学校医学部といひ、又其前身を、岡山県立医学校とす。岡山県立医学校は、甲種として其名天下に鳴りしもの、故に京都の第三高等中学も、特に医学部をここに定め、明治19年に其組織に改めたりしが、学制の変更によりて、医学専門学校となりしなり。校地は岡山県病院に隣り、此校の教授、概ね県病院にありて、治療に従事するなり。（写真③）

写真が不鮮明で申し訳ないが、貴重な写真であるので、収載した。当時、医学校は国立、病院は県立であった。



写真①：第三高等学校医学部（1898）



写真②：岡山県病院（1902）



写真③：岡山医学専門学校（1902）





# 随 想

## フェニックス

昭31 小林 敏 成

医学の正門、そしてそれを入ると歴史ただよう雰囲気の中にモダンなJunko Fukutake Hallがある。フェニックスが、それを仲立ちするように並んでいる。

私たちが岡山大学医学部に入学したのは、昭和27年4月で、その年の干支が壬辰（みずのえたつ）であることから、同期会を壬辰（じんしん）会としている。昨年5月19日に医学部卒業60周年の記念会をホテルグランヴィア岡山で行った。10年ごとの大きな節目の会はこれが最後であろう、とのことで会長の私と庶務の戸谷拓二君で、壬辰会医学部卒業60周年の記念小冊子（カラーグラビア60頁）を作った。

会員名簿に各人の近影付き近況報告と、下にコメントが書き込まれた集合写真集。卒業前の集合写真は全員学生服で、卒業写真には後楽園の鶴鳴館で謝恩会をした後、園内の唯心山を背にして、恩師の先生方と全員背広姿で写っている。そして10年ごとの記念会、宮島、姫路、高松、東京、福山、倉敷、米子、那覇、奈良、広島、今治、静岡、京都、高松、呉、松山、岡山での同期会の集合写真である。それに戸谷君が岡山大学医学部創立百周年記念絵葉書・1970年（昭和45年）の写真をはじめ、現在までの医学部の変遷を示す写真を説明文をつけて12頁付け加えてくれている。

その写真の一枚に、大木に成長したフェニックスが、フェニックス通りという説明文が付いて並んでいる。40年前（昭和51年）の壬辰会医学部卒業20周年の記念植樹と説明はあるが、医学部創立百周年（昭和45年）の記念絵葉書で、基礎医学棟の前に背丈ほどのフェニックスが並んで写っているのである。壬辰会が卒業20周年の昭和51年に記念植樹したフェニックスが、その6年前の昭和45年に既に植わっている。

平成18年に私たちは壬辰会医学部卒業50周年記念会を国際ホテルで行った。そのことに関して、私は鶴翔会（岡山医学同窓会報・平成18年10月1日発行、2006年、101号）の同期会だよりに投稿している（17～19頁）。〈卒業20周年記念植樹・昭和31年卒業〉〈昭和31年卒業・卒業30周年記念〉と、刻まれた記念碑の写真とともに、フェニックスとくろがねもちの写真が掲載

されていて、「写真は卒業20周年と30周年に、壬辰会が医学部内に記念植樹したフェニックスとくろがねもちである。壬辰会の会員は既に全員医学部の土地を離れているが、フェニックスとくろがねもちの木はしっかりと根付いている」と、私は同期会便りを締めくくっている。これらの写真は、当時壬辰会の会長をしていた大田原俊輔君（岡山大学名誉教授・小児神経学）が、撮影してくれたものである。

私は卒業以来現在まで壬辰会の会計係を続けている。古い出納簿を取り出してチェックしてみると、10周年の記念会の出納で、記念植樹（フェニックス15本）52,500円と記念碑8,000円の記載があり、その領収書（領収証、金52,500円也、但し記念植樹代金として右金額正に領収しました。昭和41年6月29日、医学部会計係長〇〇〇〇印、昭和31年卒業壬辰会殿）もある。50年前の記憶をたどってみると、その当時、医学部でフェニックスを植えるとの話を聞き、事務長さんをお願いして壬辰会医学部卒業10周年の記念植樹にいただいた。

記念碑は、当時岡山刑務所の医官をしていた戸谷君が、刑務所の作業所で作ってもらおうと安価でできる、というので彼に依頼した。戸谷君宛ての領収書（領収証書 納入者戸谷拓二、物品製作、記念碑1ヶ、金8,000円、上記金額領収しました、昭和41年9月9日、岡山刑務所収入官吏、法務事務官〇〇〇〇印）もある。

卒業20周年記念会では、出納簿に植樹代金の記載は無い。30周年の記念会には、記念植樹くろがねもち（武田園）130,000円の記載が出納簿にあり、武田園の請求書（記念樹植栽、クロガネモチ1本85,000円、同植込12,000円、二脚鳥居支柱2,500円、土壌改良剤500円、標識石碑30,000円、合計130,000円）と、受取人が武田園の中国銀行本店振込金受取書がある。

私たち壬辰会は、フェニックス15本を卒業10周年記念として、そしてくろがねもち1本を30周年記念として植樹し、それぞれの記念碑を作っているのである。何故卒業20周年の記念植樹の記念碑が存在し、10周年のそれが無いのであろうか。記念碑を撮影してくれた大田原君は3年前の平成25年に死亡している。広島市に住んでいる戸谷君に電話をして、君が岡山刑務所に依頼して作ってもらった10周年の記念碑で、卒業10周年が20周年と間違っただけではないか、と聞くと「そんなことはないと思うが、50年も前のことは忘れている」との返事であった。

私は確認のため医学部へ行った。くろがねもちの木は図書館の入口の西側に存在し、その根元に卒業30周年と刻まれた記念碑もある。フェニックスは医学部正

門を入った通路の両側に在り、15本植樹しているので数えてみると19本で、さらに1本が図書館と学生ボックスの東側中庭に在った。しかし、記念碑は見当たらない。植樹して50年、半世紀を経て見事に成長したフェニックスの幹に触れながら空を眺めていると、当時の記憶が実感をともなってよみがえってきた。事務長さんに医学部で20本植える計画であるといわれたが、会計係の私が、予算の関係で20本のうちの15本を壬辰会の記念植樹に、独断でしていただいたのである。

20本のなかの15本を記念植樹にすると、記念碑の置き場所がむつかしい。私は会計係として、あまりにも安易に15本にしてしまった。20本すべてを壬辰会で植樹するという努力をしなければならなかったのではないか。それにしても、記念碑は一体どこへいったのか。何故10周年が20周年に間違えられて刻まれたのか。一時、フェニックスを取り除こうという話があったと、聞いたこともある。鶴翔会（岡山医学同窓会報）への投稿のために大田原君が撮ってくれた写真も、くろがねもちとその記念碑の写真は手元にあるが、何故かフェニックスのそれらは失せて見当たらない。私は何か不思議な因縁の存在を意識するのである。卒業後60年が過ぎた老人の妄想であろうか。

## 目医者をつぶやき 「持ちたる者の資格」

昭60 松尾 俊彦

最近の眼科診療では、光干渉断層計（OCT, optical coherence tomography、図）による網膜断面画像の撮影が日常となっています。少し前までは多方向から撮影した写真を何枚も貼り合わせて全体像としていた眼底写真も、魚眼レンズを使った広角撮影で眼底全体を1枚の写真にできます。そんな電子カルテの画像を見るのも楽しみの一つ。眼底鏡で覗いて黄斑部にはないと思っていた網膜下液（漿液）が、OCT画像で確認すると薄っすら存在していることもあるので、ヒトの目など所詮OCTにはかなわないかと思ったりもしています。

OCT網膜画像の最大の利点は、患者さんと一緒に画像を見ることができる点です。患者さんと医者との情報共有が簡単にできるようになり、治療方針や治療効果を説明しやすくなりました。もう一つの利点は、散瞳しなくてもOCTで黄斑網膜の断面像を写すことが

できることです。眼底鏡、角膜前置レンズや接触レンズで眼底黄斑部を観察するためには、散瞳薬を点眼する散瞳が必須です。非散瞳の状態、つまり通常の大きさの瞳孔を通して見ても単眼鏡でしか眼底は観察できず、黄斑の大きな変化は分かるものの微細な変化は確認できません。患者さんの前房が浅くて散瞳すると緑内障発作を誘発するリスクがある場合、車を運転して来院したため安全を考えて検査後に眩しさが残る散瞳をしない方がよい場合には、非散瞳下でも明瞭に微細な変化を描出するOCTが威力を発揮します。黄斑部の眼底観察は患者さんにとっては眩しくて辛い検査ですが、近赤外光（波長840 nmや1050 nmなど）を使っているOCTなら、全く眩しくないのです。そして得られたOCT画像は、厳然たる事実を突きつけます。これもまた世の中の進歩。医師にとって強い味方となるツールの登場は、患者さんにとっても間違いなくいい方向に進んでいると言いたいところです。

ちょっと昔の話になりますが、電子カルテで検査値や画像ばかりを見て、患者さんの顔を見ず、聴診など身体診察もしない医者姿がクローズアップされたことがありました。とは言っても、眼科は眼底を見てなんぼの世界なので、電子カルテばかりを見て診察しないということなどあり得ないと当時は思っていたのです。ところが昨今、ついに眼底を診ない眼科医が登場しているのです。

若い眼科医の行動を見ていますと、白内障術前の患者さんにも漏れなくOCTを撮っています。保険算定ができない検査になりますが、例えば、確かに黄斑に病変がないという厳然たる事実を画像が示してくれば、術後視力を説明するにはいい根拠になります。眼底を診なくても、それなりに診療が進められるというわけです。それでも私のような年寄り目医者は、この視力低下は白内障の濁り具合と見合っているなどと考える自分の勘を大切にしています。優れたツールによって得られた事実の背景を考えなければ意味がないと思っています。

白内障はたいしたことはないのに視力が悪い場合、何かがあります。歪んで見えるという症状があれば、黄斑上膜などがあるのでと眼底を診ていく。黄斑がきれいであれば視神経疾患があるのではと考えて、視神経乳頭の色合をしげしげと診ます。これが取りも直さず臨床の楽しみです。臨床の醍醐味は、あれこれと考えて診察を進めることにあります。私は思っています。

「その持ちたる物の重さを感じず己と共にありて自在なるをはじめ持つという。持つためには持てるだけの資格がなくてはならぬ。特に士たる者は持てるべ

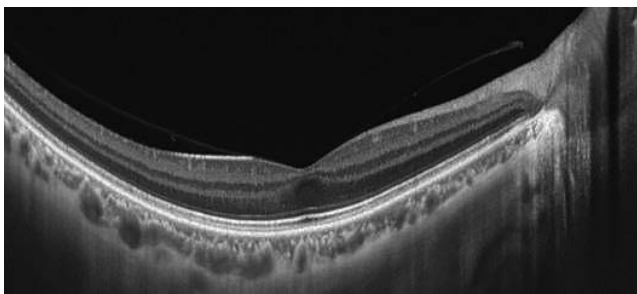
くして持たねばならぬ。」かの「子連れ狼」が刀を持つ前の一子大五郎に語る一節です。最強のツールの使い手になるには相応の修養が必要なはず。伝家の宝刀も、下手に抜くとその刃で自らを傷つけてしまいます。ましてや医師も「師」。未熟さゆえに他人を傷つけるなどあってはならぬこと。

医療全般に目を転じると総合診療を重視する流れの中で、視診、触診、打診、聴診などの身体診察 (physical examinations)、簡便な神経学的診察 (neurological examinations) を行うようにと、再び丁寧に教えられました。現状のOCTは網膜一断面の画像に過ぎず網膜全体を見ている訳ではありません。「眼科の身体診察」とも言うべき眼底鏡による観察と併せて使ってこそ診断力は高まります。頼れるツールが見せてくれる状況を「見る」だけでなく、得られたデータを読み解く力、すなわち「持ちたる者の資格」を備えた医師こそが手練れとなり、患者さんの信頼を得ることができるようになるのでしょうか。

かくして老剣士、いや老目医者も持ちたる者の資格を失わぬために、その歩みを止めぬ努力をしようと思っています。

備考 OCT検査は「眼底三次元画像解析」として診療報酬点数200点が患者1人につき月1回に限り算定できる。もちろん緑内障 (視神経乳頭陥凹)、眼底疾患の診断の目的である。白内障の術前検査では算定できない。

図 私の右眼黄斑網膜を通るOCT水平断面像。神経網膜の層構造がよく分かる。写真右に視神経断面が見える。写真下方には蜂巢状の血管腔がある脈絡膜、更にその下に無構造の強膜が描出されている。



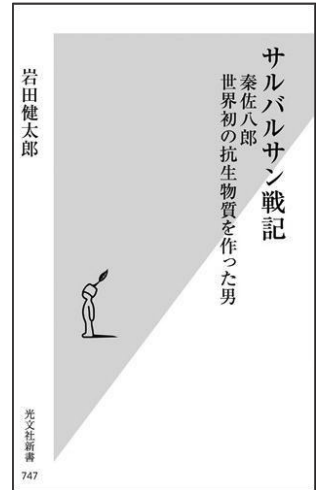
## 「サルバルサン戦記—秦佐八郎」 を読んで

昭40 坪井修平

明治時代、本学前身の岡山第三高等学校医学部卒業生でノーベル賞級の業績を挙げたのが秦佐八郎である。最近、岩田健太郎神戸大学医学部教授によって上梓された「サルバルサン戦記—秦佐八郎」(光文社)を読み、大変感銘を受けたので、ハイライトを抜粋して紹介する。

(註) 副題に「…世界初

の抗生物質を…」とあるが、著者はインターネットで「抗生物質なのか、抗菌薬なのか、呼称をめぐる歴史的経緯」(2016/08/04)と題してつぎのように述べている。“従来、抗生物質と狭義の化学療法薬に分けられていたが、現在は多くの抗生物質が合成されるので、その区別がない。抗菌薬=抗生物質でさしつかえなからう。「サルバルサン戦記」のサブタイトルは「世界初の抗生物質を作った男」である。もちろん、わざとだ。正確には「世界初の化学療法薬を作った男」である。”



### 同郷 森林太郎

秦佐八郎は11歳年長の森林太郎 (鷗外) と同じ石見国、現在の島根県益田市の出身である。父は酒造りをする豪農で、14人のこどもがおり、12人目が明治6 (1873) 年に生まれた8男佐八郎である。好奇心の強い佐八郎は砂が水を吸い込むように、勉学を楽しんだ。14歳の時、近在の親戚で11代続く医家の秦家の養子になった。医薬予備校に入学して1年間勉強した後、明治24 (1891) 年、岡山第三高等学校医学部に入学した。当時、関西随一の名門校で後に岡山大学医学部となる。第三高等学校は後の京都帝国大学で、医学部だけが岡山にあった。

### 邂逅 森林太郎と秦佐八郎

森林太郎は東京帝国大学医学部卒業後、明治17 (1884) 年ドイツ留学、細菌学のパイオニア、コッホに師事する。帰国後、明治26 (1893) 年、わずか31歳



で陸軍軍医学校長となった。佐八郎は明治28（1895）年卒業後、養子先のチヨと祝言を上げて間もなく志願兵として兵役に就き、台湾平定に参加した。森の現地視察があった。佐八郎は森に声をかけた。「森先生！ 秦佐八郎と申します！ 先生と同郷の石見の出身で、岡山第三高等学校医学部を卒業、現在、東京近衛第一連隊に所属しております！ 閣下！ お尋ねしたい儀がございます！ 実は脚気病の件であります！ ご存じのように軍では大量の患者が発生し、兵の9割までに至り、その1割は心不全のため死亡しております。岡山の漢方医は、麦飯で脚気を治していると聞きます。私自身、学生時代脚気で危うく一命を落とすところでありましたが、漢方医の指示した麦飯を食べて回復しました。海軍の高木兼寛医師は練習艦における麦飯給食を行い、艦内における脚気病を激減させたと聞き及んでいます」佐八郎は森の顔色がさっと変わったことに気づいた。「海軍の輩は初めに結論ありきの麦飯論を正当化すべく、そのようなフェルツェルングのなかった状態であるような実験を行ったのだ。脚気病の診断基準も確たるものはなく、またその判定者も左様なアブジトリッヒな診断を行うわけだからして、到底科学的に正当な結論と言えるわけではないのだよ！」その目は遠くを射抜くように爛々としており、先の鷹揚さは消え失せていた。

別れ際に森は言った。「ああ、秦君、君は郷里の誉れだよ。是非とも日本人として、石見の男として、この台湾の地で十二分に活躍してくれたまえ。健闘を祈る」

### 薫陶 井上善次郎と荒木寅三郎

明治29（1896）年、佐八郎は軍務を修了し、第三高等学校付属岡山県立病院の助手になり、診療と共に研究活動も行った。『井上内科新書』『内科診断学』を刊行した井上善次郎から内科学、後年京都帝国大学総長となる荒木寅三郎から医化学を学んだ。井上と荒木は、佐八郎の優れた頭脳と、粘り強い探究心を大切にしたいと思った。荒木は北里柴三郎の友人で、「北里の下で研究しないか」と勧めた。

### 北里柴三郎・志賀潔・野口英世

明治31（1898）年、佐八郎の東京留学の願いが叶った。北里柴三郎が設立した大日本私立衛生会伝染病研究所（伝研）に着き、志賀



潔（27歳）の案内で北里に初めて対面した。この時北里45歳、佐八郎25歳。明治32（1899）年、神戸市で、日本初のペストの流行が発生した。北里柴三郎は急いで現地に向かった。佐八郎も同行した。この年、野口英世（22歳）はすでに伝研を退職し、北里の配慮で、将来のアメリカ留学のための『つなぎ』として横浜港の検疫官補になっていた。北里はペストが流行した香港でペスト菌を発見したが、同時期にパスツールの弟子イエエルサンもペスト菌を発見したと主張した。北里の手紙係からスタートした佐八郎の伝研生活であったが、明治38（1905）年には伝研のエース級の研究者に成長していた。和歌山でのペスト流行では対策の中心人物となり、報告書も自ら書いた。数多くの学会発表、論文執筆も行っていった。「海外留学は野口英世や志賀潔に先を越されたが、自分もいつかは留学したい。北里もいつかは自分を留学させてくれるだろう」「焦りはない。今のために、今の魂は使い尽くすのだ」

### ドイツ留学

明治40（1907）年、佐八郎はドイツ留学を果たした。ベルリンのコッホ研究所でエールリッヒの愛弟子のワッセルマンのもとで免疫の研究をして1年を過ごした。当時の所長は、北里柴三郎の師であるローベルト・コッホから、ガフキーに交替していた。その後、モアビット市立病院に移ってヤコビー博士の下で数か月間研究する。ヤコビー博士がエールリッヒの弟子だったので、彼を通じてエールリッヒが所長を務めるフランクフルトの国立実験治療研究所へ移れるように頼んでもらった。

### エールリッヒ

秦佐八郎がフランクフルトに着いたのは明治42（1909）年1月のことであった。つば広の黒の帽子、コート、チョッキ、ズボンと黒尽くめの佐八郎は、大男ぞろいのドイツにあっては、小さな甲虫のようにみえた。しかし、ひげをたくわえていないその顔は精悍で落ち着いた力強さをたたえていた。右手にステッキを握っている。このとき、佐八郎36歳。3階の廊下には強い葉巻の匂いが立ちこめていた。部屋に入ると、パウエル・エールリッヒ（55歳）がそこにいた。前年の明治41（1908）年に免疫の研究によりノーベル生理学・医学賞を受賞していた。白髪で、かつ豊かな白髭をたくわえている。「無事に着いて何よりだった。さっそく



実験にとりかかってもらおう！」「色素誘導体を、そしてアトキシール誘導体をスピロヘータ感染動物に注射し、その効果を調べるのじゃ！ 君の研究室も、君を助けてくれる助手ももう用意してある！ 今日から研究に取りかかるのじゃ！」 当時、医学上最大の問題は伝染病・感染症であった。微生物学は医学上最も重要な学問領域であった。ペスト、コレラ、結核、そして梅毒。多くの感染症が人類にとって脅威であり、効果的な治療薬が存在しなかった。その多くが『死に至る病』であった。

### エールリッヒの北里評

突然、エールリッヒは佐八郎の日本における師北里柴三郎の名をあげた。「北里君は、破傷風菌の抗毒素を作り、治療に応用した。ベーリングはジフテリアの抗毒素を作りあげた。それにしても北里君は気の毒だった。やってることはベーリングと全く同じなんだよな。北里君が先に抗毒素を作っているし、なんでベーリングだけがノーベル賞を受賞したのか。ひどいじゃないか。」

### 実験に没頭

佐八郎はとても我慢強く、そして辛抱強かった。彼は辛抱を自然に受け入れることができた。「世の中はそもそも己が思うようにならないもの」という達観が佐八郎にはあった。佐八郎は下宿から数km先の研究所に徒歩で通勤し、歩きながら今日の実験のことを考えていた。「試験管を手取るだけが、研究ではない。歩きながら思考しているときが、おれにとって最良の研究時間だ」佐八郎は同じ実験を飽きることなく何度も何度も繰り返した。二度目の実験は一度目の実験という体験が積み重ねられた、より重厚な実験である。三度目の実験はさらなる積み重ねがある。その積み重ねが繰り返されると、気づけばそこに大いなる知見が獲得されていることがある。

### 魔弾 サルバルサン

砒素化合物には色々なバリエーションがある。ヘキスト社からどんどん送られてくる。とにかくひたすら試してみるだけである。佐八郎は数々の失敗にめげず、地道に愚直に実験を繰り返すことにした。エールリッヒがその姿を微笑まじげに眺めている。さらに実験を重ね、黄色フェノールにアミノ基が二つ追加された物質がどうも良さそうだ、という話になった。ジアミドアルゼノフェノールで、606号の番号がつけられた。佐八郎は、606号を回帰熱スピロヘータに感染し

た二十日鼠に注射した。街中の鼠が消えてしまったと噂されるほど大量の鼠がこの実験に消費された。研究室は実験用二十日鼠で一杯になり、隣の部屋や洗濯室、暗室まで提供され、助手も二人に増員された。エールリッヒと佐八郎は、薬剤の安全性についても実に慎重に検証した。佐八郎はついに、606号の適切な希釈倍率と、投与方法を確立した。二十日鼠からスピロヘータが消失したのである。佐八郎は鼠の次に鶏、兎、猿にも実験を広げ、606号の有効性と安全性を検証した。

次は人体実験である。偶々ペーターズブルグで回帰熱が流行し、放置すれば死に至る病であり、606号による回帰熱患者の臨床試験が承認された。患者は解熱し、回帰熱スピロヘータも消失した！ ついに化学療法によって回帰熱患者が快癒した。人類史上初めて『魔弾』が人命を救った瞬間であった。次は最大の難敵、梅毒である。明治42（1909）年9月、エールリッヒは精神病院院長から606号を梅毒患者に用いる了承を得た。すると病変はたちまち消失した。二期の発疹も、三期のゴム腫も速やかに消えてしまう。ワッセルマン反応も陰性化する。ついに、『魔弾』は人類の業病、コロンブス以降、ヨーロッパを、そして世界中を苦しめていた梅毒を倒したのである！ 606号は、『エールリッヒ秦六〇六』と改名された。明治43（1910）年12月、『エールリッヒ秦六〇六』は、『サルバルサン』という名称で製造販売され、臨床現場で用いられるようになった。Salvare『助ける』Arsenic『砒素』という二つの語句から命名された。

★このように、本書には生誕からサルバルサンを発見するまでの秦佐八郎が物語風に記述されている。冒頭に「本作は史実をもとに作られた物語であり、実在しない人物、場面、会話が含まれている」とある。野口英世と二人の酒席に南方熊楠や石川啄木を登場させ、後藤新平には佐八郎と酒酌み交わせながら原子爆弾やエイズ、阪神・淡路大震災を語らせるなどフィクションも交えて面白く、一気に読ませる筆力に感嘆させられた。著者は40代半ばで神戸大学医学部微生物感染症学教授を務める傍ら、『99.9%が誤用の抗生物質』『予防接種は効くのか？』『感染症外来の事件簿』『患者様が医療を壊す』など数々の著作を世に出している新進気鋭の作家でもある。

※以下、「サルバルサン戦記－秦佐八郎」を補足する。

### 秦佐八郎とノーベル賞

明治時代、北里柴三郎や野口英世、鈴木梅太郎、志

賀潔ら日本人学者がノーベル賞候補に挙げられていた。秦佐八郎も明治44（1911）年にノーベル化学賞、翌1912年・翌々1913年にノーベル生理学・医学賞の候補に挙がっていたものの、受賞はならなかった。エールリッヒが1908年にノーベル賞を受賞していなければ…、佐八郎の肌が白ければ…、情勢は変わっていたのではないかと想像される。

### その後の秦佐八郎

- 大正3（1914）年：北里研究所が創立され、所長－北里柴三郎、部長－秦佐八郎となる。
- 大正9（1920）年：慶應義塾大学医学部教授に就任。細菌学、免疫学を講じる。
- 大正12（1923）年：アメリカ・ロックフェラー財団の招きで同国とカナダの医事衛生視察。
- 大正15（1926）年：ドイツ帝国自然科学院会員に推される。
- 昭和3（1928）年：ドイツで開催された国際連盟主催、サルバルサン標準国際会議に出席。
- 昭和6（1931）年：恩師北里柴三郎博士死去。北里研究所副所長に就任。
- 昭和8（1933）年：帝国学士院（のちの日本学士院）会員に勅選され終身勅任官待遇を受ける。
- 昭和13（1938）年：脳梗塞のため慶應大学付属病院で死去。享年66歳。多磨霊園に御墓がある。

※現在、秦佐八郎博士の業績を称え後世に永くその名を伝える事を目的として、社団法人日本化学療法学会では「志賀 潔・秦 佐八郎記念賞」を設けている。

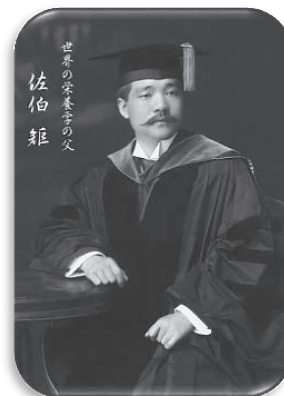
### 鶴翔会報、岡山大学医学部百年誌と秦佐八郎

- 本誌に秦佐八郎の偉業が紹介された記事は次のとおり。  
「我が医学部の歴史と伝統」昭30小田皓二、74号、1993。  
「秦記念館の竣工式に参加して」昭24島田宣浩、77号、1994。  
「化学療法の先駆者秦佐八郎博士の生誕地訪問記」昭24新潟大・中山 沃、79号、1995。  
「英国医史学教科書に日本人でただ1人記載されている秦佐八郎」昭48石田純郎、100号、2006。  
「志賀潔・秦佐八郎記念賞を受賞して」昭49公文裕巳、103号、2007。  
「表紙 表：秦佐八郎写真4枚、裏：表紙解説」104号、2008。
- 岡山大学医学部百年史（昭47年発行）には、異色の

教官および卒業生7名の中に秦佐八郎が挙げられている（p629～631）。座談会（p662～663）では、「秦佐八郎の思い出」と題して、“秦さんという人はぶっきら棒な人でしたが、研究室なんかでとても親切にやってくれる人でした” “秦さんを一番よく知っている方からある時偶然聞いたのですが、あの人が熱帯病学会でジャワへ行ったんです。船で上陸しますと、町中大変な騒ぎで立派なアーチが建ててあって花火なんかあがっているんです。一体何事かと思ったそうです。ところがこれは秦佐八郎が来るというので町中の歓迎ぶりだったので、土地のフランベジア患者がサルバルサンで治ったので、その発見者で神様だというんです。秦さんが行くと人々がさっと取り巻いて、靴の上から足へキスするんですって。秦さんは大変当惑したり、また感激したりしたそうです”と、秦佐八郎の人柄、名声を彷彿させるエピソードが紹介されている。

### 秦佐八郎に続く佐伯矩と横川定

- 秦佐八郎の3期後輩に、世界で初めて医学分野から「栄養学」を独立させた佐伯矩（サイキタダス）がいる。現在の愛媛県西条市で生まれ、伊予市で育つ。荒木寅三郎に生化学、北里柴三郎に細菌学や毒物学を学んだ後、明治38（1905）年、アメリカ エール大学で医化学



- や生理学の研究に従事し、北米、欧州、南米各地で「栄養」について招待講演を行っている。大根のジャスターゼの発見、食品分析表、栄養学校、栄養研究所も世界初である（「栄養学の創始者 佐伯矩」：昭30小田皓二、本誌80号、1996、「世界の栄養学の父、佐伯矩博士の五十回忌を迎えて」准昭48恩地森夫、本誌106号、2009）。7分搗き米の奨励、「栄養士」の命名、「栄養の歌」の作詞でも有名であるが、東京の佐伯栄養専門学校のホームページに、佐伯矩は1901年京都帝国大学（現・京都大学医学部）卒とあり、どこにも「岡山」の文字は見当たらない。鶴翔会から訂正して頂くように提案して頂きたい。ただし、佐伯矩記念館の佐伯栄養専門学校動画集「佐伯の歴史」では岡山で学んだことが明記されている。
- 13期後輩の横川定（サダム）は横川吸虫を発見し、コイヤアユの生食により経口感染することを突き止



めた。岡山県久米郡の出身で大8（1919）年台北医学専門学校教授就任、同年ジョンスホプキンス大学に招聘され、1年間研究した後、南米、ヨーロッパに渡り、大学病理学教室、伝染病院、防疫施設、熱帯医学研究所を視察し、多くの外国研究者と交流して理解を深め、新しい知識を得た。昭12（1937）年、台北帝国大学医学部教授兼学生主事に就任した。高安病、橋本氏病、川崎病など病名に名を残した日本人8人の中の1人でもある（「横川吸虫の発見者 横川定」：小田皓二、本誌91号、2001）。



### 医学史の講義

私の学生時代には医学史の講義がなく、世界的な業績を挙げた秦佐八郎はウロ覚え、佐伯矩、横川定については無知であった。しかし、近年の本学では医学史が重視されているようで、本誌87号・1999・P35で昭30卒小田皓二先生が新生に、103号・2007・P54で昭48卒石田純郎先生が医学部1年生に医学史の講義を担当されていることが判明した。

平成26年度医学部医学科便覧を見ると、医学部2年次生、後期、医学史0.5単位選必と記載されている。シラバスを拝見したところ、担当は非常勤の石田純郎先生で、世界、日本、本学の医学史の授業が8回とある。後輩達に、世界の医学の発展に尽くした秦佐八郎ら大先達の偉業を周知させ、誇りと勇気を与えるためにも、医学史を全学生に必須科目とし、他の科目でも感染症や栄養に関連する授業の際は、秦佐八郎や佐伯矩、横川定に言及してほしいものである。

手前味噌で恐縮であるが、私は勤務医25年、行政医10年務めた後、子どもの時からの夢「学校の先生」（常勤）を友人、知人のお蔭で達成することが出来た。3私大9年の常勤教職のほか国公私立大学短大専門学校の非常勤・臨時講師12校を含めると、計15校40年間で中四国・近畿の1万人余の看護・栄養・PT・OT・社会福祉・医学の学生達に、内科学・病態栄養学・臨床栄養学・病理学・一般臨床医学・糖尿病・脳血管障害等の講義を担当した。感染症の授業では秦佐八郎、横川定、栄養に関する授業の際は佐伯矩の功績を配布資料やパワーポイントで詳しく話し、「試験に必ず出す！」と予告していた。

### おわりに

世界100近い国々に医学の歴史探訪をされた石田純郎先生の秦佐八郎への熱い思いを紹介して結びとする。

「2、3年に一度、イギリスのオックスフォードとロンドンへ医学書の買い出しに行っている。イギリスの医学教育では、医史学の講義が30回以上はあるようで、教科書が何種類か刊行されている」「Medicine and Public Health Through Timeという教科書には、Ehrlich、Domagk、Flemingらと共に秦佐八郎が唯一の日本人として記載されている。北里柴三郎、志賀潔、野口英世の名前はない。同窓生の全員が秦佐八郎の名前を知っておいてほしい。イギリスの医史学上では、現在のところ、秦佐八郎の名は大変有名とは言い難く、同窓生として、彼をもっと顕彰していく必要を強く感じる。岡山大学医学部の教授陣の方でも、それをバックアップして頂きたいと思う」（本誌100号、2006、p57～58）。

（謝辞 妹尾鶴翔会事務局長およびスタッフの方々には資料蒐集に大変お世話になり、心より厚く御礼申し上げます。）

（参考までに：妹尾氏から鶴翔会報のバックナンバーから知りたい情報を探す際、全目次が網羅されているPDFファイルの検索機能が便利、と教えて頂いた。その利用法は次の通り。）

1. 鶴翔会のホームページの「過去の同窓会報目次一覧」「昭和63年以前の会報目次はこちら」をクリック。
2. ポインターを表中に置くと横長のツールバーが浮上し、右端のAdobe Reader をclick。
3. 画面左端に縦列上から3番目の「双眼鏡」をクリックすると「検索」が表示される。
4. 人名検索は氏名では検索0件となるので姓のみ指定する。例えば、医学史等多数の寄稿をなさっておられる昭30小田皓二先生の場合、小田と指定すると小田姓の論文が52件表示される。次に目的の項目をクリックすると、掲載誌の目次が出て、その項目がカラーの囲みで描出される。
5. PDFファイルをページ（P）で保存してある場合は、開いた後、上端ツールバーの「編集（E）」click、続いて「高度な検索（V）」をクリックする。その際、検索場所は保存ファイル名を指定する。拡大機能（+ をclick）を使うと読みやすい。

## 学生だより

### 解剖実習

#### 解剖学実習を終えて

医学部医学科2年生 栗原侑生

約三か月にわたる解剖学実習が終わり、通常通り座学の日々が戻ってきた。だからこそ、解剖学実習で学んだことをこれからに活かしていけるように実習を振り返ってみたい。

勉強という点について。実際に実習に臨んだ際にまず感じたことは、座学で自分が学んできたことと実際とではかなりずれがあるということである。参考書と見比べても何が何だかわからないことも多かった。他の班に助けを求めても、同じ部位を見ているはずなのに遺体の脂肪の付き方や筋肉の量などにより大きく異なるため、かえって混乱することになったりもした。しかし、優秀な人に尋ねると、即座に「これは〇〇だよ」と答えるのには驚いた。実際に同じものを見ている、知識の乏しい自分と、きちんと勉強して実習に臨んでいる人とは見えているものが全く違うのだと愕然とした。そしてより恥じ入ったことは、知識というのは頭の良しあしではなく「勉強したかしなかったか」で決まるという点である。きちんと勉強しておかないと貴重な機会も無駄にしてしまう、何より献体してくださった方に申し訳ないと思い、勉学に励もうと決心した次第である。

次に、考え方についてである。解剖学実習が始まった当初は、遺体に実際にメスを入れることに抵抗があった。これはご遺体に対して、「献体」というよりも「〇〇さんのご遺体」という意識の方がかなり大きかったためだと思う。しかし、解剖に慣れてきて、ふと気が付くと「〇〇さんのご遺体」という気持ちがかなり薄れてしまっていることに気が付いた。献体してくださった方やそのご家族の気持ちを忘れかけ、ただただ解剖をしていると思ったときは本当に申し訳なく思い、また自分が恐ろしくなった。医師とは、病気を治すことが目的ではなく、病気を治すことで患者さんの人生の質を向上させることが目的である。そう思っているはずなのに、実際の自分は目の前の方の人生す

から見失っていたのかと猛省した。それからは、献体をしていただいた方、そしてそのご家族のことを念頭に、実習に臨ませていただいた。そして、このことは今後とも決して忘れてはならないと深く心に刻んだ。

この実習を通して、知識、考え方ともに非常に多くのことを学ぶことができた。そして、今回得たことを今後の学習、さらには医師を目指すものの姿勢にも活かしていきたいと思う。

最後になったが、献体をしてくださった方およびご家族の皆様へ深く感謝を申し上げ、振り返りを終えたいと思う。

#### 見ず知らずの人の人生を 垣間見る解剖実習

医学部医学科2年生 豊田陽子

私が解剖実習を通して感じたこと、それは解剖することで初めて献体してくださった方の人生を垣間見ることができたということである。

私たち解剖実習を行う学生が解剖前に献体に関して知り得る情報はせいぜい名前、死亡日、死亡時の年齢、死因くらいであり、その時にはまだその人の人生がいかなるものであったかは分からない。しかしご遺体は一体として同じものは存在せず、生前の病気や怪我は痕跡として残っていることが多々ある。だから解剖中に、死因とは直接関係がなかったであろうと考えられる、その人が抱えていた数多くの病気や手術の痕跡を見つけることにより、部分的とはいえ、私たちはその人が生前いかに壮絶な人生を歩んでいたかを知ることになる。まるで生前一度も出会うことのなかった私たちに、完璧に美しいものだけで構成されたとは言いがたい、場合によっては醜いという表現の方が適切かもしれない側面をも併せ持った自らの一生をさらけ出し、自分という唯一無二の存在を無言で語るかの如く。そして私たちは解剖実習を通して、死ぬことによって初めて出会うことになったその人の人生を垣間見ることにより、その人をただの見ず知らずの他人から数々の修羅場を乗り越えて自らの人生を生き切った一人人として捉えるようになり、その人の人生の重さを肌で感じたのだった。

私たちは普通、初対面の人に対してその人がどのような人生を歩んできたかを考えることは滅多にない。しかし現在のその人をその人たらしめているのは間違

いなくその人の過去であり、その人と向き合うことはその人の過去を見つめることに繋がっている。だから私たちが他者と相対する際にその人の過去に思いを馳せることは重要であり、それをこの実習を通して学んだ。

最後に、この実習の機会を与えてくださった先生方や献体してくださった方々に感謝の意を表す。

## ご遺体を目の前にして

### 医学部医学科2年生 矢野 愛華

初めに、献体して下さった皆様のご遺徳を偲び、謹んで敬申の意を表します。

解剖実習では、座学ではどうしても分からなかった立体構造を明確に理解出来ました。単にアトラスを見るのと比べ、いかに実践的で鮮明なものであったかは筆舌に尽くしがたいです。筋肉・神経・血管の走行、管や溝の実質、各内臓の断面や表面などを、実際にじっくり観察して学べた事は、私にとって大きな喜びです。臓器や筋のそこにある必然性から命の神秘も感じました。自分で手を動かし、一つのものを同定、観察するのに何時間もかけたからこそ、数多くの詳細なスケッチを残したからこそ、医療チームとして共に働くかも知れない実習見学生に教えながら学んだからこそ、学んだ事が将来に活かせると思っております。

加えて今回の実習では、学問としての解剖学に留まらず、「医師たる」という事も学ばせて頂きました。

複数のご遺体を観察させて頂く中で、一つとして同じご遺体は無いという事に改めて気づきました。だからこそ、普遍的な見方を身に付けると同時に、臨床現場で還元する時は患者さん一人一人に向き合わなくてはならないという基本を再認識させられました。

また、解剖実習は、どの科の医師になろうとも根幹にして最も重要な為、時を忘れて没頭し、深夜まで、時には解剖室で朝を迎える事もありました。その中で、医学への知的好奇心・生涯学習の意欲がより高まりました。

さらに、生と死のつながりや死とは、そして医療とは何かを私なりに感じました。人はいつか必ず死に、ただ遅いか早いかの差があるだけです。しかし、医療はそれに刃向かう事で、生の煌めきを強めているのかも知れない。納棺時に遺品を入れる時は、ご遺体を一人の人としてその人生に思いを馳せる機会でもありま

した。そして、本来であればとっくにご遺族に見守られ、死出の旅立ちをされているはずなのに、社会・医学生のために自らの骸を提供して下さった有志の方々に対する敬意と感謝の念は私の中で忘れられないものとなりました。ご遺族においては、自分の大切な家族にメスを入れられ、納骨も先送らなければならないにも関わらず、私達に貢献して下さいました。将来多くの命に携わり、その人生を背負う医学生としての自覚と責任の重さをご遺体を目の前にして改めて感じました。

最後になりましたが、献体して下さった方々、ご遺族の方々、そしてこの様な貴重な尊い経験の場を設けて下さった先生方・ともしび会の皆様に感謝申し上げますと共に、今回の実習を糧に、皆様の意思を受け継いで立派な医師となれる様、日々努力して参ります。

## 医学研究インターンシップ

### 医学部医学科3年 石川 桃子

昨年のMRIではイタリア中部のラクイラ大学の Department of Life, Health and Environmental Sciencesに派遣させていただきました。ラクイラ大学では、主に農業が生殖器に対して形態学的にどのような影響を与えるのかを調べるため、マウスの卵母細胞を用いてサンプルを作製し、電子顕微鏡による観察を行いました。また、それと並行して、福島原発事故で放射線を浴びたサル精子や卵子の観察も行いました。サンプルを観察・分析する段階に至るまでに、サンプルの作製には多くの時間と労力が必要で、同様の作業を何度も繰り返さなければいけない場面も多く、研究に従事するには探究心と忍耐力が必要であると感じさせられました。サンプルから電顕用のスライドを作製する過程では、なかなか思うようなスライドを作ることが出来ず、トリミングや薄切をする上では自分の技術が研究結果を大きく左右するものであるということが分かり、そういった手技の技術を高めるトレーニングも重要であると感じました。研究に取り組む中で知識不足を痛感することが多かったため、今後の学生生活ではより一層考えながら学習しなくてはならないと思いました。また、英語によるコミュニケーションはなかなか思うように意思疎通が出来なかった場面も多く、医学を学ぶ傍ら、英語の学習も続けていきたいと思っております。

また、研究以外にも、研究室のメンバーや先生方が、



大学の催しものや地元のお祭りに連れて行ってくれたり、郷土料理をご馳走してくれたり、研究が休みの日には各地に出向いて日本とは違った気候や食事、文化や歴史に触れることが出来、現地の人々との交流もあり、大変有意義な時間だったと思います。滞在期間中に体調を崩してしまい、現地の病院にかかるという経験をしましたが、上手く言葉が通じない中でも親切に医療を提供して下さった現地の医療スタッフの方々を始め、帰国するまでにたくさんの方にフォローしていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。帰国から半年ほど経った今では、イタリアで現地の医療を実際に受けたことは自分にとって非常に貴重な経験だったと感じています。システムや方法に違いはあっても、医療に対する姿勢には国を越えても通ずるものがあると思ひ、そういった姿勢を今後自分が医療を提供する側として医療に携わっていく上で、大切にしていきたいと思ひました。

最後に、派遣にあたり、親身にサポートして下さった研究室の先生方を始めとする多くの方々に、このような貴重で素晴らしい機会を与えていただき感謝しています。MRIを通して体験したことや、学んだ多くのことを忘れず今後のキャリアに生かしていきたいと思ひます。

## 医学研究インターンシップを通して

### 医学部医学科3年 大西友紀

私は昨年のMRIにて広島大学原爆放射線医科学研究所・分子発がん制御分野で3か月間にわたり実習をさせていただいた。研究テーマはAurora kinase-Aの核内での過剰発現を制御する因子の探求であった。この過剰発現は発がんに関わっているため、制御因子が発見できれば新たな分子標的薬の開発につながると期待されている。MRI期間中は細胞を培養してsiRNAを導入して免疫染色して…と実際に手を動かす中で、数多くの失敗を繰り返し涙目になることしばしばであったが、それでも思い切って行って良かったと本当に思う。2年間を過ごし慣れ切った岡山を離れて広島で過ごした日々は懐かしく、愛おしい。その理由を適当にまとめてみる。

1年生はまだある程度の鮮度を保った毎日を送っているかもしれないが、2、3年生になると日々の新鮮味は徐々に失われマンネリ化が進行する。医学科の1

～3年生が主に関わる人と言え、教室で顔を合わせる友人、部活やサークルの先輩・後輩、バイト先の人、親兄弟といった具合であろうか。大部分の学生は基礎のどこそ教室の教授や講師などと授業でお会いすることこそあれ、日常で密接に関わる機会はほとんどないはずだ。しかしMRIではそんな方々と長い時間を共に過ごすことになり、新たに気付くことがあるだろう。例えば、研究者はただひたすら実験に没頭するだけという私の持っていたステレオタイプなイメージは崩れ去った。研究室では研究者以外にも秘書やテクニシャン、MRの方々が出入りしており、様々な人とコミュニケーションを取らなくてはならない。また、先生方も家族のある生活者である。女性の先生の方が忙しそうではあったが、男性の先生にも仕事と家庭を両立する苦勞を垣間見ることがあった。このように、先生方と共に過ごすことで臨床医とは違う生き方の実情を知ることができ、自身の矮小な視野が少し広がったように思う。

多忙な先生方の中に飛び込み、当初は実験室の勝手も分からず戸惑ってばかり。かと言って馴染みのない土地で友人が居るわけでもなく、何となく無力感や孤独に苛まれる瞬間もあった。そんなある日の21時、クリーンベンチで格闘を続け論文を漁りへとへとになった私にポストクのエレナさんが優しく声をかけてくれた。「練習すれば手技は上達するよ」「論文なんて慣れたらすぐ読めるようになるよ」と。それから仲良くなって度々他愛もない話をするようになり、今では帰省の度に途中下車して遊びに行くほどだ。振り返れば、自己を開示できる相手の存在があったからこそあの3か月がこれほど思い出深いものになったのだろう。自分の意志だけで事が為せる訳ではなく、物質的のみならず精神的に支えられ気力が充実してこそ何かができる訳で、改めて普段自分を受け入れてくれる人の存在のありがたみに気付かされた。一步踏み出さなかったら得られなかったかもしれない友人、見えなかったかもしれないものなど、新しい出会いと発見に満ちた刺激的なインターンシップだった。

最後に、完全にボランティアでありながらも多大な時間と労力を割いて下さった河合秀彦先生、Elena Zaharieva先生をはじめとする広島大学分子発がん制御分野の皆様、派遣前から様々な面でサポートして下さった片山博志先生をはじめとする本学分子腫瘍学教室の皆様には本当にお世話になりました。分子発がん制御分野では他大学の学生でありながらも温かく受け入れていただき、心に残る楽しいMRIとなりました。雑事に追われながらも精力的に研究や教育活動に取り

組まれる先生方のお姿から、何をやるにしても幅広い知識に加えて気力・体力が必要なのだと痛感しました。お忙しい中、本当にありがとうございました。これからも日々の勉学に励んでゆきます。

## 医学生における海外留学の意義とは

医学部医学科3年 藤田佳奈

私は昨年5月から7月にかけてペンシルバニア大学消化器病学教室にて医学研究インターンシップ(MRI)に携わる機会を頂いた。研究題目はTNF $\alpha$ が関連しているLOX酵素の発現がEoEの線維症とどのように関与しているのか、という基礎研究と、EoE患者における骨密度の変化が如何なるものかをみる臨床研究であった。基礎研究においては、大人・小児患者の生検を好酸球の数別に階級化したものやマウス・ヒト・in vivo 3D培養システム(オーガノイド)の3種類のサンプルで免疫化学染色やRT-qPCRを行うことでLOX発現に変化がみられるかどうかを調べた。これらの実験から、TNF $\alpha$ が上皮細胞に働きかけることでLOX発現を促し、そのLOXがコラーゲンのクロスリンクの度合いを上げて線維芽細胞を活性化したり、食道の収縮度合やコラーゲンの沈着度合を上げたりするという結論に至った。また、臨床研究ではEoE患者を食事制限やステロイド薬の有無で分類しBMI値のヒストグラムを作成した。

この度お世話になった研究室では、指示を待つというような受動的な姿勢ではなく自分で必要なものが何なのかを見極めて実験を行うという積極的な姿勢が求められた。従って、複数の論文を批判的な目で読み、仮説を考えたり新しい研究テーマを考えたりという練習を実験や後ろ向き臨床研究と並行して経験させて頂いた。研究に参加させて頂いただけでなく、食道十二指腸鏡検査やCHOPの臨床現場の見学や基礎研究に必要な手技を原理から学ぶ授業など、貴重な機会も多く頂き、上下関係なく自分の考えをシェアしたりアドバイスを与えたりして刺激しあう様子に感銘を受けた。

目まぐるしい変化を見せる社会の中で生き抜くには、その変化をいち早くキャッチし古い慣習にとらわれずに革新的・グローバルにうまく適応することが求められる。日本では目立ってはいけななどという慣習的な傾向があるので、主体性をもって物事に取り組

むというタフな姿勢を身に着ける点において留学はグローバル社会をリードしていく人材を育成するのに非常に有効な手段の一つであると考えている。今回のMRIも短期間ではあったものの国民性や文化の違い、食の違い、気候の違い、言語の違いなど、日本とは異なるものに直面し、その壁を乗り越えようとした努力と経験は大なり小なり今後の人生を支える軸を自分にもたらすこととなったと信じている。このようにして培った精神的強さやしなやかさ、自らイニシアティブをとり新たな領域に対して果敢にチャレンジしようとする精神は今後ますます多様化すると思われる医学研究・医学教育分野においても重要視されるものとなってくるとは思わないだろうか。今後はまず自分が何者でどのような信念を持っているかをしっかり把握した上で他者との情報・価値観の共有や国内外の情報に意識を向けていこうと思う。

最後に、この度私の留学を学内・国外で常に支えてくださった岡田裕之教授や池田房雄先生をはじめ、その他の多くの消化器・肝臓内科学教室の方々やペンシルバニア大学の中川教授、Dr. Amanda Muirへの感謝を忘れずに今後も頑張っていきたい。

## 西日本医学生学術フォーラム

### 西日本医学生学術フォーラム 開催報告

医学科5年 大塚勇輝

医学科5年生の大塚勇輝と申します。2016年12月、私が代表を務めるサークルCOMEのメンバーが中心となり、鹿田キャンパスJunko Fukutake Hallにて「西日本医学生学術フォーラム」を開催致しました。多くの皆様のお陰で無事盛会を取めることが出来ましたので、ここにご報告させていただきます。

#### 〈開催までの経緯〉

そもそもCOMEとは、岡山医学生学会(Conference of Okayama Medical students)の略であり、学内外の情報を収集・共有して視野を広く保ち、知的な興味と動機を持って医学生生活を送ろうという趣旨で3年前に発足させた大学公認団体です(顧問:大塚愛二先生)。他大学の医学生や、違うコミュニティや興味を持った医学生と、文化的或いは学術的に交流できる場というのはこれまでありませんでした。楽しんで相互に情報交換でき、その後の生活や学習のモチベーショ

ンを高めることができる場が作りたいたと、設立当初から思っておりました。

そのような折、2015年の末頃に、薬理学教室の西堀正洋教授より、「来年岡山大学で学生フォーラムを行うのだが、その企画・運営について学生の皆さんの視点を是非取り入れたいと考えている。力を貸してもらいたい。」という旨のご依頼を頂戴しました。フォーラム開催の1年程前、この様にして医学科1年～5年生の有志の学生数名が集い、3年生の中村薫さんを委員長として「西日本医学生学術フォーラム」に向けての準備が始まりました。

中村さんを中心とした学生委員会は、学生の視点でフォーラムを企画するにあたり、2つの革新的な要素を取り入れました。1つ目は、これまで西日本圏に存在していた3つの学生の研究発表会を統合したことです。それぞれの長所を取り入れ源流を汲みながら、全てを合同開催とし会の名称も新しいものとししました。これにより、それまで存在していた分野という垣根を超え、より多くの西日本全域の大学から参加者を募集することが出来ました。2つ目は、発表と同時に交流も大切にしたいと考えて基礎研究以外の要素も加えたことです。これにより、学年を問わず気軽に参加してもらうことができ、発表者以外にも楽しんでもらうことを可能としました。こういった発案により、14大学から1年生から6年生までの総勢127名に参加していただくフォーラムに発展させることが出来ました。

〈開催概要〉

- 会 期：2016年12月10日（土）10：00～17：15
- 会 場：岡山大学鹿田キャンパス Junko Fukutake Hall
- 実行委員会：岡山医学生学会COMEs、学生フォーラム準備委員会
- 世 話 人：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 薬理学教授 西堀 正洋
- 事 務 局：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 薬理学教室秘書室
- 後 援：岡山大学医学部創立150周年記念人材育成事業
- 協 賛：公益財団法人 岡山医学振興会  
NPO法人 岡山医師研修支援機構  
株式会社 医学教育出版社
- 協 力：岡山大学ARTプログラム推進室  
中四国若手医師フェデレーション

〈当日の様子〉

午前中は、学生の「口頭研究発表」を2セッション(11演題)行いました。演者それぞれの発表スタイルがあつて面白く、中でも前半最後に発表した大阪医大3年生井上さんは、おもむろにステージ上を歩き出して会場を驚かせました。発表というよりレクチャーに近い話し方であり聴衆を魅了しました。しかし、トーク力だけでは不十分であり、同時に、研究内容がしっかりして



→準備委員長 中村薫さん(医学科3年)



←準備委員会のようす



←ポスター

→当日の準備風景





いるという点も聴衆を引き込ませる上で重要だということは、熊本大6年永芳さんの発表を聞いて感じました。永芳さんは、医学生生活の集大成としてこれまでの多くの研究成果を、バランスよく配分してうまく時間内に収めていらっしゃいました。うまい発表というのは、研究内容についての詳細な知識を知らない相手にも、専門性の高い話が伝わるものなのですね。やはり発表には慣れ・経験が必要だと感じ、今回の様な学生の発表の場の必要性を痛感しました。座長を引き受けて下さった4人の学生の進行力とタイムキーピングも素晴らしいものでした。

昼休みは、こちらで指定したグループに分かれて「アイスブレイク」をしながら昼食をとってもらいました。交流を深めて欲しいという学生委員会の思いから、大学・学年を超えたグループを編成しました。アイスブレイクには、「嘘つき自己紹介」を行ってもらいました。これは、1つ嘘をいれた自己紹介をし、どれが嘘か見破るというものです。どのグループも大変楽しそうに歓談していたようですので、交流はうまくいったのではないかと感じております。昼食には鹿田キャンパス徒歩2分のケーキ屋さん、honey×2のサンドイッチを提供しました。

昼食後は、アイスブレイクしたグループで、「医学クイズ」に挑戦してもらいました。1年～6年まで全学年の参加者に楽しんでいただくため、適切な難易度の問題の作成は非常に難しかったです。困っていた我々を、先輩である岡大病院研修医2年目の西村義人先生（中四国若手医師フェデレーション代表）が全面

にご協力下さり、準備委員のメンバーも解答者として楽しく学ぶことができました。先輩の知識のストックの中からユーモア溢れる出題と解説をいただき、会場が盛り上がりました。個人的に好きだったのは、土管風呂に入る寒そうな男性にしか見えない写真を供覧し、エコーの原型を問う問題です。意外と参加者の正答率が高く、出題側としてはその造詣の深さに驚きました。

14時からは、医学部創立150周年記念事業の一環として、香川大学医学部薬理学の西山成先生に「特別講演」を賜りました。リサーチをする上でのものの考え方について、先生の半生を踏まえての貴重なお話しでした。セレンディピティとPOC (Proof of Consensus) の話など、今後の生活を送る上で必要な意識を得ることができ大変興味深いものでした。西山先生のご講演については、このあとの参加記にて、林田くんが詳しく述べていますのでご覧下さい。

15時からは、岡山大が誇るARTプログラムご出身の3人の若手の先生方に、各自のこれまでの道程、これからのキャリアについて「シンポジウム」形式で語っていただきました。我々医学生の近い将来の話として参考になる内容であり、特にARTプログラム利用も考えている私にとっては非常に役に立つものでした。

学生の「ポスター研究発表」(22演題)では、実に様々な分野の発表をしていただきました。岡山大からは4年生の奥村くんが自分の宇宙医学研究について、泉原くんが地域ゼミについて、飯尾くんが公衆衛生実習での研究結果について発表してくれました。基礎研究



↑ 集合写真

↑ 口頭研究発表  
田中瑛美さん(医学科3年)↑ ポスター研究発表  
奥村浩基くん(医学科4年) 写真左

以外にも斬新な内容の発表があることは、やはり思惑通り視野を広げる上で大変良かったと思います。個人的に興味を持ったのは、三重大3年佐藤さんの加齢黄斑変性に関する発表です。着眼点を公開遺伝子データベースに得ており、これなら誰でも簡単に研究を始められるのではないだろうかと思いました。なお、私自身も、大阪医大3年鈴木さんの全国医学生生理学クイズ大会の有効性に関する発表の共同演者をしていました。終了のアナウンスをしてもなかなか討議が終わらなかったところを見るに、このセッションがいかに面白いものであったかを感じることが出来ました。

閉会式では、最優秀演題・優秀演題を表彰し、副賞を贈呈しました。副賞の準備に際しては、NPO法人岡山医師研修支援機構と、株式会社医学教育出版社にご協賛いただきました。受賞された学生のお名前を以下に掲載致します（敬称略）。

●口演発表

- ★最優秀演題賞 永芳 友（熊本大）
- ★優秀演題賞 長野 広通（大阪大）／  
武田 遥奈（愛媛大）

●ポスター発表

- ★最優秀演題賞 佐藤 大樹（大阪大）／  
飯尾 享平（岡山大）
- ★優秀演題賞 奥村 浩基（岡山大）／  
宮西 和也（愛媛大）

情報交換会では、参加した学生から、視野が広がっ

た、刺激を受けた、また参加したい等の感想が聞かれ、他大学の先生方からも好評を頂戴することが出来ました。医学生が分野を越えて関わり合い、学問的に知的に交流できる場は今までほとんどありませんでした。このフォーラムへの参加が、researchに興味関心を持ち、新たな視点を得る、或いは、今よりさらに視野を広げ様々な事柄に関心を持ち、熱意を持って取り組むきっかけとなって欲しいと準備委員一同願っております。

最後になりましたが、貴重な機会と親身なご指導を下さった西堀正洋先生をはじめ薬理学教室の皆様、そして、ご協力下さいました同窓生の先生方に、この場を借りて心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。

〈参考〉

特設ウェブサイト

<http://phlr5s5n.wixsite.com/mresearchforum>

Facebook

<https://www.facebook.com/events/195702547505664/>

山陽新聞の報道記事

<http://www.sanyonews.jp/article/459353>



↑互いに刺激し合えた情報交換会



↑ARTプログラムの先輩のキャリアセミナー



↑↓大学・学年を超えたチームで競う「医学クイズ」



↑嘘つき自己紹介でアイスブレイク



↑司会進行を務めた日高啓介くん（医学科5年）



(<http://www.sanyonews.jp/article/459353> 12/11 山陽新聞朝刊 30面)



## 西日本医学生学術フォーラムに 実行委員として参加して

医学科1年 林 田 慎太郎

実行委員の一人として参加した会議は五月に発足した。入学したばかりで右も左も分からない上、部活動にも参加せずに研究室に通ってばかりいた時期、この会は先輩方との関わりを持てる貴重な機会だった。先輩や教授と言葉を交わすうちに、創立百五十年という長い伝統に興味が芽生え、調べてゆくうちに、本校の歴史から多くを学んだ。医学資料棟にも足を運んだ。年季の入った卒業証書や、当時の新聞など、貴重な書籍の積まれたその部屋でひとり、過ぎ去りし、また、積み重ねし年月に想いを馳せたのは有難い体験だった。

岡山大学医学部の興りは明治三年、岡山藩が備前国上道郡門田村操山の麓に医学館を設置し、医学生への教育を開始したときである。翌、明治四年、廃藩置県により岡山藩は岡山県となり、医学館は医学所と改称された。その後、医学教場、県病院、公立病院と改称が続いたのち、明治十三年には医学校として病院から独立した。明治十六年になると、東大に次いで、大学卒業後は無試験で免許を与えられる学校と認められた。それだけ教育が苛酷であったという証であり、嘗ては「東の東大、西の岡山」と評されていた、こともあった、らしい。これは、評価が落ちたことを必ずしも意味するわけではない。今や世界は分業の時代であり、各自がお互いの長所短所を支え合い補い合い、協力しつつ共存することが求められているのだから。

今回、フォーラムには香川大学薬理学教室から西山成先生を招聘し、「医師にリサーチは必要か」を題目に講演していただいた。先生は、何よりもまずは知りたいと思う心が大切だと言われた。今後、日本の医学、科学を動かすのはその心だと。アインシュタインは、神聖なる好奇心を失ってはいけないと言っており、好奇心に関する歴代の偉人たちの言葉を探せば枚挙に暇がないほどであるが、西山先生も例に漏れず、知ろうとする気持ちが科学者、引いては医師にとって大事なものであるとお話された。僕の母は十一人という大家族に育った。その影響で親戚が数多おり、小中高と様々な学年の従兄弟がいる。その子たちからあれやこれやと質問されたとき、如何に好奇心を擽ることができるか、それを念頭に置くことを心がけている。これは学問に限らず、スポーツにおいても、美術、音楽に

おいても同じであろう。かつてサッカークラブで子どもたちに指導していたことがあるが、そこでも、どのようにすれば楽しみを覚えてくれるだろうかと試行錯誤しつつ、グラウンドに立っていた。

また、先生によれば基礎医学で培われた知識や技能は飽くまでも副産物に過ぎず、日常的に科学する中で積み重ねられる思考法こそが、臨床の現場においても役立つものであるということであった。僕はまだ学部一年生であり、基礎医学を少し齧った程度でしかないけれど、同級生を含め、未だ臨床医学を習わない二年、三年生の人たちが、「早く臨床医学をしたい、基礎医学は面白くない」と愚痴のように溢しているのを幾度となく耳にしてきた。同時に、臨床医学を習い終え、CBTに臨む先輩方からは、「基礎医学の知識なしに臨床医学が理解出来る筈がない。もっと真面目に学んでおけばよかった」という後悔の声を聞くことも少なくない。基礎医学と臨床医学とは表裏一体にあり、どちらか一方が独立して存在しているのではないということである。西山先生の言葉はこのことを十分に裏付けていると思われた。

次に、先生は人に教える立場にある者はポリシーを持たなければならないと言われた。ご自分では確証的証拠、Proof of Concept を基に研究を行うよう心がけているらしい。現代科学の祖デカルトの残した『方法序説』には、明証的に真であると認めたもの以外は受け入れないというような言葉が書かれており、科学に内包される研究という営みは当然、このような考えの下に押し進められなければならないのであろう。疑い得るものを疑い尽くした先に、疑う自己だけは疑いなく有ることに至ったという逸話は一見狂気のように思えるが、それほどまでに確信を持って研究を進めていくことで初めて指導者を名乗ることができるのかもしれない。

また、僕が個人的に最も惹かれたのは、御自身の研究に関する話だった。ある日、ゲノム解析をしているときに、唯一のゲノム変化が、遺伝子を丸ごと崩壊させるという事実に至りついた先生は戸惑ったという。しかし、研究室には過去に植物について学んできた人がいて、その人は同じ現象を目にしても平然としていたらしい。訳を聞けば、彼女は以前植物学を修めてきており、植物の世界ではそうした事柄は決して珍しくないということであった。先生はそこから次の研究への着想を得、新たな研究がそこに開始されたとのことだった。異分野のエキスパートが一つ所に集えば、互いが互いを刺激し合い、新たな発見へと繋がるということである。



さて、歴史を辿れば、一寸の光陰を惜しんで学問に勤しんだ多くの先人に出会う。近代医学の祖、緒方洪庵が岡山県出身だと、春の入学式で初めて聞いた。天然痘治療への貢献が有名だけれど、何よりの業績は、大坂に適塾を開いたことではないか。門下には、日本近代陸軍の創立者大村益次郎や、舞姫騒動で辞職に悩む森鷗外を引き止めたとされる陸軍軍医総監の石坂惟寛など、錚々たる面子が並ぶが、その中のひとり、福沢諭吉の著した書物『福翁自伝』には眼を見張る叙述が残されてある。最後に少し長い引用をして、報告とも呼べぬ感想を終えようと思う。

(引用始め) 学問勉強ということになっては、当時世の中に緒方塾生の右に出る者はなかろうと思われるその一例を申せば、私が安政三年の三月、熱病を煩ろうて幸いに全快に及んだが、病中は括枕で、座蒲団か何かを括って枕にしていたが、追々元の体に回復して来たところで、ただの枕を試してみたいと思い、その時に私は中津の倉慶敷に兄と同居していたので、兄の家来が一人あるその家来に、ただの枕を試してみたいから持って来いと言ったが、枕がない、どんなに捜してもないと言うので、不図思い付いた。これまで倉屋敷に一年ばかり居たが、ついぞ枕をしたことがない、というのは、時は何時でも構わぬ、ほとんど昼夜の区別はない、日が暮れたからといって寝ようとも思わず、頻りに書を読んでいる。読書に草臥れ眠くなって来れば、机の上に突っ伏して眠るか、あるいは床の間床柱を枕にして眠るか、ついぞ本当に蒲団を敷いて夜具を掛けて枕をして寝るなどということは、ただの一度もしたことがない。その時に初めて自分で気が付いて「なるほど枕はない筈だ、これまで枕をして寝たことがなかったから」と初めて気が付きました。これでも大抵趣きがわかりましょう。これは私一人が別段に勉強生でも何でもない、同窓生は大抵みなそんなもので、およそ勉強ということについては、実にこの上に為ようはないというほどに勉強していました。(引用終り)



井上 一

## 教室だより

(平成28年8月～平成29年3月)

### 細胞組織学

平成28年7月31日に、第42回第一解剖学教室同門会を開催しました。酷暑の中、同門の先生方にご参集いただき心より御礼申し上げます。8月16日より、村山秘書に代わり新しく吉永秘書を迎えました。本年3月24日付で、井上大学院生が博士課程を修了し、博士(医学)の学位を取得しました。また、衣畑大学院生は修士課程を修了し、引き続き本学博士課程へ進学します。

教育面では、10月第3学期より医学科一年次生へ細胞組織学講義・実習を行いました。組織学特別講義として、金井正美教授(東京医科歯科大学)、近藤洋一教授(大阪医科大学)、佐々木順造教授(新見公立大学)にご講義いただきました。発生学特別講義として、中島裕司教授(大阪市立大学)、井関祥子教授(東京医科歯科大学)にご講義いただきました。大学院特別講義として、七田芳則教授(京都大学理学研究科)より「分子からみた視覚の成り立ち」と題して、三戸太郎准教授(徳島大学生物資源産業学研究部)より「ゲノム改変技術の開発と応用による昆虫の発生研究」と題してご講演いただきました。

研究面では、「The Cricket as a Model Organism」(Springer社)が出版されました(板東・大内、分担執筆)。新規視物質オプシン3に関する論文がPLOS ONE誌(加藤院生・藤田・佐藤・大内)に、マウス組織におけるREICの発現解析に関する論文がJournal of Molecular Histology誌(公文裕巳本学ICONTセンター長との共同研究;井上・藤田・板東・大内)に掲載されました。学会活動として、第69回日本酸化ストレス学会学術集会(藤田)、日本解剖学会第71回中国・四国支部学術集会(佐藤)、第39回日本分子生物学会年会(衣畑)、第122回日本解剖学会(板東・藤田・大内)で発表しました。(藤田 記)

### 人体構成学

学会活動としましては、西田准教授が第53回九州リウマチ学会(9月3-4日、熊本)、「RAの病態・診断・治療のUp-date」と題して講演、第49回中国・四国整形外科学会(10月、徳島)、「関節リウマチの診断

と治療のピットフォール」と題して講演しました。日本解剖学会第71回中国・四国支部学術集会(10月22-23日、岡山大学)において、大塚教授は特別企画シンポジウム「臨床応用解剖実施の経験から」にて座長を務めました。また同会にて、榎崎技術職員は「ラット冠状動脈における弾性線維3次元構造の解析」、小見山技術職員は「近赤外線イメージングを用いたご遺体の固定方法の改良」と題して発表しました。大塚教授、百田助教、小阪助教、上園深希(医3年)が参加する第122回日本解剖学会総会・全国学術集会(3月28-30日、長崎)において、小阪助教はシンポジウムを共同企画し「眼：虹彩および網膜に存在する組織幹細胞の実態」と題して講演、上園さんはポスター発表を行います。

その他国内学会・講演会活動としては、西田准教授は第27回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会(広島)、第44回日本関節病学会(別府)、第31回日本臨床リウマチ学会(東京)、第43回日本股関節学会学術集会(大阪)、第9回日本運動器疼痛学会(東京)に参加・発表しました。大塚教授は「岡山大学の源流」第一回シンポジウム(2月5日、岡山大学)にて「岡山医学教育の萌芽」と題して講演を行いました。

海外出張では、品岡助教が8月17-19日にMacquarie大学(シドニー)にて研究成果の討議を行いました。11月22日-12月8日にはイタリアL'Aquila大学からManuel Belliが研究のため滞在しました。3月の春解剖には同じくL'Aquila大学から2名の医学生Enrico Gleve、Federica Gazzoliが参加します。3月末には戎井孝太君(M2)が修士号を取得し社会人となります。(小阪 記)

### 脳神経機構学

人事関係では、9月に大学院生博士課程の竹島美香(旧神経情報学)が「アストロサイト存在下でのL-テアニンのドパミン神経保護効果」に関する研究で学位を取得しました。10月から岡山大学交換留学制度(EPOK)により、イギリスSurrey大学のKyle Quinを迎えました。日本語、日本文化の学習をする傍ら、食器より溶出するエポキシ樹脂の中樞神経発達に及ぼす影響についての研究を当研究室で行っております。

研究活動では、8月のメタルバイオサイエンス研究会サテライト2016(静岡)で宮崎が「抗うつ薬ミルタザピンのアストロサイトにおけるメタロチオネイン発現誘導およびドパミン神経保護効果」について発表しました。10月の第10回パーキンソン病・運動障害疾患

kongress (MDSJ) (京都) では、浅沼教授が「ALSモデルの運動障害および運動神経変性に対するセロトニン1Aアゴニストの抑制効果」について発表し、優秀賞を受賞しました。この内容はAnn. Pharmacol. Pharmaceut.に論文発表しました。また、宮崎が「農薬ロテノン暴露によるドパミン神経障害におけるアストロサイトの関与」についてMDSJで発表しました。10月の第50回日本てんかん学会(静岡)において浅沼が「抗てんかん薬の作用点としてのアストロサイト」について講演しました。3月の第90回日本薬理学会年会(長崎)で磯岡院生が「パーキンソン病モデルにおけるロチゴチンの神経保護効果」について、宮崎が「ロテノンのアストロサイトを介したドパミン神経障害」について発表しました。また、3月の第122回日本解剖学会総会・全国学術集会(長崎)で浅沼が「妊娠・授乳期におけるエポキシ樹脂曝露の産仔脳1次繊毛への影響」について、宮崎が「セロトニン1Aアゴニストの1次繊毛への影響」について発表しました。

大学院特別講義では、11月に船田正彦先生(国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所室長)に「危険ドラッグ蔓延とその規制をめぐる攻防:基礎研究はどう関わったか?」と題し、若者を中心に蔓延している危険ドラッグの有害性・毒性について講義して頂きました。また、11月に長谷川隆文先生(東北大学大学院医学系研究科神経内科学分野講師)に「メンブレントラフィックから紐解くパーキンソン病の分子病態」について、1月には中曾一裕先生(鳥取大学医学部統合分子医化学分野准教授)に「p62/SQSTM1の発現誘導と神経変性疾患」について講義して頂き好評を博しました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ(<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mnb>)をご覧ください。(宮崎 記)

## 細胞生理学

会場の翌日に開催した同門会には、1967年修了の原田から2016年修了の岩藤まで幅広い年齢層の27名が参加し、とても楽しい会となりました。就職先が内定している修士2年生の6人は全員修了が認定されました。修士1年生たちは、新卒採用活動解禁の3月1日に向け準備をしながら、課題研究に励んでいます。

10月26日、弊学は国際原子力機関IAEAと、次世代のがん治療法として期待されるホウ素中性子捕捉療法(BNCT)についての協定を締結しました。BNCTはホウ素薬剤を体内に注射して中性子線を照射し、ホウ

素を取り込んだがん細胞だけを殺傷する治療法です。細胞生理学分野ではBNCTに用いるホウ素薬剤の開発に2009年から取り組んでおり、教授の松井は研究推進産学連携機構の特任教授市川とともにIAEAとのさらなる協力活動に従事しています。新規ホウ素薬剤の研究に携わってきた助教の道上は、8月に第51回典型元素化学セミナー(於倉敷市)、11月には大阪医科大学附属病院がんセンター先端医療部門シンポジウム(於高槻市)に招待されこれまでの研究成果を交え講演しました。4月にはBNCT研究の拠点となる「中性子医療研究センター」が学内に設置され、5年後を目処に治験開始を目指します。

11月5日、6日、鹿田キャンパスのJunko Fukutake Hallにおいて第68回日本生理学会中国四国地方会を、松井が当番幹事を、准教授の西木が実行委員長をそれぞれ務め開催しました。助教の松下の指導の下にオキシトシンの神経保護作用の解明に取り組んでいるミャンマーからの留学生ヘイン・ミン・ラットを含め、28演題の発表があり、35名の学生を含む計88名の方にご参加いただきました。地方会が盛会裏に終了できたことは、ご支援くださいました多くの方のおかげであると深く感謝しております。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。(西木 記)

## システム生理学

当研究室は基盤研究(S)「メカノメディシン:メカノ医工学を駆使した再生医療・生殖医療への展開」および新学術領域研究「宇宙からひも解く新たな生命制御機構の統合的理解」の研究課題「重力変化を含む力学的ストレスに対するメカノセンシング機構」を継続して行っています。

以下の学会で発表を行いました。European Muscle Conference(9月:成瀬、入部、山口)で1題、第34回日本受精着床学会総会・学術講演会(9月:成瀬)、生体医工学シンポジウム(9月:藤田(歯周科)、成瀬)で1題、7th International Workshop on Cardiac Mechano-Electric Coupling and Arrhythmias(成瀬、入部、山口)で1題、Mechanobiology of Disease-Singapore(9月:成瀬、森松)で1題、第25回ポリマー材料フォーラム(11月:成瀬)、第39回日本分子生物学会年会(12月:成瀬)ではシンポジウム座長と発表1題、61st Biophysical Society Annual Meeting(2月:成瀬、片野坂、森松)で1題、「宇宙に生きる」国際シンポジウム(3月:成瀬、高橋、森松)で2題、第94回日本生理学会(3月:成瀬、入部、片野坂、高橋、



貝原、益田、多田)。生体医工学シンポジウムでは藤田がポスター賞を受賞しました。

論文は2報掲載されました。Cardiovascular Research (氏原)、The Journal of Physiological Science (山口)。またBook chapterが2冊(高橋)、総説が1編(高橋)掲載された他、特許2件(虚血性心疾患の予防又は治療剤、細胞培養器)を取得しました。

メンバーに関しては、技術職員の岡崎旭美と小川瑠里子が異動しました。(高橋 記)

## 分子医化学

魅力ある研究分野をつくるべく教育及び各研究テーマに取り組んでいます。平成28年度「岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励賞」に大野助教が表彰されました。骨・軟骨代謝、粘膜の再生研究において優れた研究成果を上げ、米国及び国内で11件の学会賞を受賞したことが高く評価されての選出です。また、助教の米澤は4月よりドイツMax-Planck Institute of Biochemistry (Faessler教授)に1年間の予定で出張しております。教室の若手の今後の一層の活躍が期待されます。

人事関係では、1月に本年度修士2名の学位審査があり無事修了しました。今後の社会人としての活躍が期待されます。10月よりEPOK交換留学生として英国Surrey大学よりSukhmuni K. Phaguraさん、O-NECUSプログラムにより中国医科大学からChuyuan Louさんが1年間の予定で研究に参加しています。大橋はO-NECUSの面接試験のため3月に中国医科大学を訪問しました。

学会活動として、大橋が4年間班員として参加した新学術領域「神経糖鎖生物学」の最終班会議が3月に名古屋で開催されました。枝松・大橋が参加し、枝松がポスター発表を行いました。11月に米国フロリダ州にて開催されたAmerican Society for Matrix Biology (ASMB) 2016に浅野が参加し、口演・ポスター発表を行いました。3月の日本軟骨代謝学会(京都)に大野・大橋が参加しました。

教育関係では、2年次生対象の授業・実習が9月から12月まであり、教官全員で取り組みました。医学科非常勤講師として京都大iPS細胞研究所・渡辺亮先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・吉岡秀克教授を招聘し、特別講義を拝聴しました。特に、吉岡先生にはご専門のコラーゲン遺伝子研究から遺伝子発現制御について広範な内容をご講義いただき、「生

化学・分子医化学」の総括にふさわしいものでした。大学院の非常勤講師として同志社大学・堀哲也先生を招聘し、「シナプス前終末の電気生理学」の講義を拝聴し、共同研究打ち合わせを行いました。(大橋 記)

## 薬理学

当教室は、「炎症反応の制御機構の解明、及び創薬開発」を目指しています。現在、抗HMGB1中和抗体を用いた脳梗塞・脳出血・脳外傷などの治療、そして血漿高ヒスチジン糖タンパク(HRG)を用いた敗血症治療・診断法開発を研究室の主要テーマとして、研究をおこなっています。

薬理学教室メンバーは、西堀正洋教授、勅使川原匡助教、和氣秀徳助教、I Made Winarsa Rumaポスドク、出石恭久客員研究員、大学院生・短期留学生の森岡裕太、寺尾欣也、黒田浩佐、衷輝、富麗、王登莉、高遠、Soe Soe Htwe、西村義人、高尚澤、吉井将哲、高橋陽平、易跃、扈丹丹、教室秘書の矢田真理子、木田由希子で構成されています。留学生の人数が多く、国際色の豊かな研究室です。また、今春、長年に渡って教室を支えてきた劉克約助教が退官しましたが、これからも教室に籍を残して、何かと私たちのサポートを下さっています。

昨年度の研究成果は、日本薬理学会年会で西堀正洋、和氣秀徳、衷輝、富麗、王登莉、高遠、Soe Soe Htwe、高尚澤が、日本薬理学会近畿部会で勅使川原匡が、日本生化学会年会で和氣秀徳が発表をおこないました。また、技術情報協会セミナーで和氣秀徳が招待講演をおこないました。さらに、国際科学誌に和氣秀徳助教(EBioMedicine)と春間純大学院生(既卒)(Scientific Reports)の研究成果が掲載され、西堀正洋教授が報道記者会見をおこない、多くの反響を得ました。

新年1月には、教室員一同が日頃の感謝の気持ちを込めて同門会を開催しました。

ここ数年の薬理学教室は、人材・研究資金共に充実し、他教室との連携も緊密なものとなり、学術的研究と臨床的創薬開発の双方が一步一步着実に進展してきています。今後もさらに鋭意努力していきたいと思えます。(勅使川原 記)

## 病理学(免疫病理)

当教室では大学のスーパーグローバル創成事業に基づき、グローバル化が加速しております。人事面で教

員の異動はありませんが、10月から孫先生が大学院(博士課程)に入学し、同時にO-NECUS生として曾さん(ハルピン医科大学)、高さん(大連医科大学)、邢さん(大連医科大学)、李さん(中国医科大学)、4名の学生を迎えました。

教育面では、本年度は大学院生として研究を行われた高橋素真先生(消化器内科学)の学位審査が無事終了致しました。7月末のMRI報告会でミシガン、シダーズ=シナイメディカルセンターで研修を行った辻さん、ミシガン大学で研修を行った木股さんと六車君、当教室で研修を行った中村さん、山口君が研究内容の発表を行いました。年明けからは来年度にミシガン、シダーズ=シナイメディカルセンターで研修を予定している佐久間さん、今村さん、高須さんが吉村准教授の指導のもと実習を開始しています。また、講義では学生の携帯電話等の端末を利用して小テストを行う「3eMobyzer」が導入され、アクティブラーニングに資する改善が継続的に行われています。

研究面では科研費は元より各種競争的資金を獲得し、各スタッフにより、近年同定されたERK経路を抑制するSpred遺伝子の機能の解明、卵巣癌間質の新たな役割の解明、新規鉄キレート剤の開発まで幅広いテーマについて精力的に研究が行われています。

松川教授は60分授業・クォーター制の導入等の教育改革に尽力し、多忙な毎日を送っていますが、教室員が力を合わせて教育、研究に取り組んでいます。今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

(大原 記)

## 病理学 (腫瘍病理)

前のご報告から平成28年春までの教室状況についてご報告します。吉野は引き続き本学副学長として多忙な日々を送るとともに、教育・教室運営に精力的に活動しています。

人事面では10月に中国からO-NECUXプログラムにてXuanを迎えました。すでに日本での生活にも慣れ、一年という限られた時間ではありますが、熱心に研究をいたしております。高田尚良は友子を伴ってカナダのBritish Columbia Cancer Research Centreに留学中です。

学業面では8月に谷口が、10月に真鍋が学位審査を終え、いずれも学位を取得いたしました。9月に熊本にて順延開催されました日本リンパ網内系学会では吉野はイブニングセミナーや教育シンポジウム等で発表し、祇園は優秀演題口演に選ばれ、大西と田端、西田

がポスター発表をしました。11月には第22回中四リンパ腫カンファレンスが開催され、中四国のリンパ腫症例を討議するとともに、広島赤十字・原爆病院の麻奥英毅先生にご講演をいただきました。また、同日には広島市民病院の市村を世話人として中四スライドカンファレンスが開催され、宮阪と谷口、永喜多が症例発表し、安藤と大西がディスカッサントを務めました。その一週間後の日本病理学会秋期総会・IAP総会にて谷口がIAP学術奨励賞を受賞しております。医学部学生の特別講義として11月末に高知大学の降幡陸夫教授をお迎えし、遺伝子についての講義をしていただきました。12月には恒例のリンパ腫アップデートin岡山が開催され、竹内賢吾先生にDLBCLの最新の治験について、前田嘉信先生には最新のリンパ腫治療法について講演いただき、吉野が谷本光音先生と供に座長をいたしました。12月には大学院生が期末発表にて現在進行している研究を発表し、今後の方針について皆で意見を出し合いました。その夜には恒例の忘年会を行い、岡山市内だけではなく、香川や広島からも多数の同門の方々にご参加いただき、親睦を深めました。

(林 記)

## 病原細菌学

教育面では、2月の修士論文発表会で医歯科学専攻修士2年生の西川裕太郎さんが「*Vibrio alginolyticus* I.029のコラゲナーゼの発現はHapRにより調節される」の題目で修士論文発表しました。修士にふさわしい立派な発表を行い、修士課程を修了しました。4月からは国内の検査試薬メーカーで研究職として活躍する予定です。

教室の出来事としては、8月に松下治教授が中国に3週間滞在し、中国人留学生のための研究日本語教育を行いました。吉林省長春市の中国赴日本国留学生予備学校にて中国全土から集まった、多様な研究テーマを持つ留学予備生たちと奮闘しました。

年が変わって1月にはインドネシア共和国ユダヤナ大学医学部との部局間国際交流協定(屋根瓦方式による教育プログラム)に基づき、医学部5年生のNiluh Ayu Sri SaraswatiさんとGede Benny Setia Wirawanさんが特別聴講学生として細菌学教室に滞在し、短期研修生として研究を体験しました。大学院博士課程3年生のAgus Eka Darwinataさんが日本での二人の生活支援と研究指導を行いました。

研究成果では、10月に香川県で開催された第69回日本細菌学会中国・支部総会では美間健彦助教と医歯科

学専攻修士の西川裕太郎さんがそれぞれビブリオの毒素遺伝子発現機構に関する口頭発表を行いました。医学研究インターンシップで配属された3年生の師岡和輝さんの研究成果がこの発表につながりました。師岡さんはインターンシップ終了後の現在も講義の合間を見つけては教室にやっ来て研究を継続しています。

(後藤 記)

## 病原ウイルス学

教育面では、基礎放射線学は、平成28年10月から1年生対象に、カリキュラム改訂のため本年2度目の開講、12月からは、ウイルス学を開講し、腫瘍ウイルス学加藤教授、鳥取大学林教授のご支援をいただきました。また、恒例の岡山医学振興会特別講義では、岡山県地域医療支援センター長糸島達也先生にご講演をいただきました。

学会関係では、日本ウイルス学会（札幌、平成28年10月）にて難波、山下が各1題を発表しました。また、9月の日本獣医学会にて、小川が1題発表しました。大学院生の宮崎は主論文の掲載決定をうけ、学位審査をむかえています。

小川は、平成28年7月に続き、年末にもアフリカに渡航、ザンビア共和国にて果食コウモリにおけるフィロウィルスの疫学調査を行いました。さらに、3月に再度アフリカに渡り、ザンビア共和国にてブタにおけるフィロウィルスの調査を進め、『One Health』プロジェクトの一翼を担っています。

(山田 記)

## 疫学・衛生学

第28回国際環境疫学会年次総会（2016年9月@ローマ）に鈴木助教が出席し、三件のポスター発表を行いました。一件目は、疫学理論を応用して、検診データなどで得られる有病割合を罹患率へ変換することに関する内容でした。二件目は、福島における甲状腺がん罹患の分析結果に関するものでした。三件目は、高齢者における黄砂の健康影響に関する内容でした。第75回日本公衆衛生学会総会（10月@大阪）では、高尾講師が代表世話人としてソーシャル・キャピタルと健康に関する自由集会を主催し、最新の知見と実際の保健医療行政への応用について扱いました。「Social Epidemiology」第二版の翻訳作業は、今秋の出版に向けて大詰めを迎えています。第9回欧州公衆衛生学会（11月@ウィーン）に鈴木助教が出席し、気温と救急搬送の関連を評価した時系列分析に関するポスター

発表を行いました。また、研究集会「因果推論の基礎」（2017年2月@統計数理研究所）に鈴木助教が出席し、「How could the sufficient-cause model deepen our understanding of causality?」と題して招待講演を行いました。教室HPでは多数の論文も紹介しております。

恒例のハーバード大学公衆衛生大学院講義ではIchiro Kawachi教授とS. V. Subramanian教授を招聘し、社会疫学とマルチレベル分析の大学院講義を実施しました。また、学部2年生の「医学統計学」と学部4年生の「衛生学」を担当し、幅広い疫学・統計学的知識を習得した学生の教育に力を入れております。

岡山産業保健総合支援センターおよび岡山労災病院と協力した産業医研修会のほか、NPO法人岡山健康医学研究会と協力した行政職員向け食中毒疫学研修会（初級）および感染症疫学基礎研修会を継続的に行っております。

今後ともご支援の程宜しくお願い致します。

(鈴木 記)

## 公衆衛生学

教室行事は、1月28日に平成28年度、同門会・親睦会にて、緒方正名誉教授の卒寿のお祝いが盛大に行われました。同会にて緒方賞受賞者の井上清美教授（姫路獨協大学）と江口依里助教の特別公演が行われました。

また、11月26、27日に開催されました第60回中国四国合同産業衛生学会にて荻野景規教授が学会長として再任されました。

教育面では、12月10日に開催されました第5回医学研究学生フォーラム（西日本医学生学術フォーラム）にて江口依里助教の指導のもとで参加しました4回生の飯尾享平さん、青島賢治さん、今村竜太さん、内田陽介さん、佐々木啓太さん、中村俊介さんらが「生活習慣およびメタボリックシンドロームと認知症の関連について」ポスター発表を行い最優秀ポスター賞を受賞致しました。

研究面では江口依里助教の研究が第23回岡山保健福祉学会にて「生活習慣及び生活習慣病と認知症・要介護との関連：愛南町スタディ～官学連携による地域活性及び健康増進の例～」について口頭発表を行い、学会賞を受賞しました。

論文投稿に関しては大学院生の築山依果さんの「Effects of exercise training on nitric oxide, blood pressure, and antioxidant enzymes」がJournal of



Clinical Biochemistry and Nutritionに受理されました。現在行われております研究としまして、平成26年度より、萩野景気教授が文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「アルギナーゼI制御による糖尿病性血管障害及び動脈硬化の予防」、文部科学省科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)「同定したPM2.5中タンパク質(PM蛋白1、PM蛋白2)の生体作用」の研究代表として研究を行っております。江口依里助教は日本医療研究開発機構委託研究開発費(AMED)「笑い療法が生活習慣病発症・重症化予防に及ぼす影響についての前向きコホート・介入研究」の分担研究者になっております。長岡憲次郎助教は文部科学省科学研究費補助金(研究活動スタート支援)「PM2.5による喘息様気道炎症発症因子の同定に関する研究」の研究代表者として引き続き活動中です。そのほか、伊藤達男助教は「神経堤特異的Pax3プロモーター依存的CRISPR/Cas9システムを用いた後天性融合遺伝子導入マウスiPS細胞の作成と動物モデルによる検証」を立ち上げ、京都大学iPS細胞研究所(CiRA)との共同研究を締結させました。また、産業総合研究所ときわバイオ株式会社との共同研究も立ち上げ、臨床応用を目指した遺伝子改変ベクターの作成に携わっております。

当教室活動の詳細につきましては、HP(<http://square.umin.ac.jp/okayamadph/>)をご参照ください。

(伊藤 記)

## 免疫学

本年度は、消化器外科から宮本学大学院生、10月からO-NECUSプログラムの留学生のPengさん、Zhangさんが免疫学教室にて研究に参加しております。

研究活動としては、7月がん免疫学会(大阪)で榮川、渡邊(呼外)、Fang、西田、10月癌学会(横浜)で榮川、上原(整形)、渡邊、木村(消化器外)、友信、12月免疫学会(沖縄)では榮川、國定(口外)、渡邊、木村、野島(糖尿病内科)、友信、西田、本会では鶴殿教授がシンポジストとしてがん免疫治療における細胞内代謝の重要性を報告いたしました。年変わって2017年、2月免疫治療学研究会では、若手シンポジウムで榮川が、一般演題では、木村、友信が研究発表を行いました。当教室は2型糖尿病薬メトホルミンの抗腫瘍作用を免疫学的および代謝学的に解析しておりますが、本年度は、マウスでの基礎研究結果に加えて、ヒトでの臨床研究結果を報告することができました。教育面では2月免疫学講義、実習共に無事終了いたしました。

教室としては第2世代目となりますO-NECUSプ

ログラムの留学生のHe Fangさん、Wang Rinさん、Zhou Yueさんの3名は短い期間でしたが当プログラムが修了いたしました。He Fangさんは次年度、Post-O-NECUSで博士課程(糖尿病内科)に進学いたします。修士大学院生の友信奈保子さんは卒業研究発表を終え、無事課程を修了し、次年度からはICONTの社会人大学院生として博士課程に進学し、博士大学院生の渡邊元嗣先生は、次年度から臨床の現場に戻られます。皆本当に勤勉で、基礎研究、臨床研究ともに素晴らしい成果を出し、教室の発展に寄与して下さいました。皆様のより一層のご活躍を祈念いたします。

(榮川 記)

## 法医学

法医学実務面では、昨年1年間の剖検数は174体となり、昨年の総剖検数と同程度となりました。ここ数年は取り扱い数がやや減少する傾向が続いていましたが、急激な減少傾向は一段落した形です。年が明けてから2月20日までの剖検数は33体と、昨年をやや上回っています。

一昨年に新築の融合型教育研究棟に移転した新しい法医解剖室(2階)に隣接して1階に設置されたコンピューター断層撮影装置(CT)は、関連のCT画像解析用コンピューター等も整備されつつあり、近々運用が開始される見込みです。法医解剖時のAi(オートプシー・イメージング)診断に威力を発揮することが期待されています。

平成25年から法医学教室が参画して進められてきた、第3次岡山県医療再生計画の一端である「在宅死への適切な対処能力の習得事業」も今年節目を迎え、法医学教室の監修で臨床医にむけた死体検案のためのDVD「死体の視方」を作成し、日頃から検案に携わっている警察協力医など各方面の方々に配布いたしました。今後、死体検案医のスキルアップに役立っていくことを期待します。

教室内では、平成28年9月から約半年間の予定で水島海上保安部から法医学研修生として井上惣太さんを受け入れており、死体解剖の補助を中心とした法医学教室の各種業務を体験すると同時に、教室カンファレンスにも参加し、過去の海上保安部取り扱いの法医解剖および検屍事例についての統計的解析にも取り組んでいます。また、一昨年より2年間休学しておりました博士課程大学院生の山崎雪恵さんが、この4月から復学する予定です。今後、溺死事例を対象とした法医学公衆衛生学的研究を進展させ、博士論文の執筆に力を

入れることとなります。

昨年暮れの同門会総会・忘年会は、12月2日（金）にメルパルク岡山で開催致しました。前年にはご療養中のためご欠席された石津名誉教授も出席され、一昨年に引き続き妹尾昌美先生にもご出席いただき、出席者数はこのところの15名前後をやや上回る18名となり、賑やかで皆様のお話も盛りあがっておりました。

学術面では、学会発表としては9月15日から19日までの間ドイツのHeidelbergで開催された第95回ドイツ法医学会において、宮石教授が「Postmortale Diagnose des fulminanten Typ 1 Diabetes mellitus-eine Kasuistik」の発表を行いました。また、10月1日に広島で開催された第33回日本法医学会学術中四国地方集会学会において宮石教授は「劇症1型糖尿病を診断し得た若年者突然死」、修士課程大学院生の小林は「ホルマリン固定中の心筋に観察されるミオグロビン及びトロポニンTの局在変化について」の発表を行いません。その他、イタリアで開催されたIALM国際学会等でも教室員が発表を行いました。（山本 記）

## 医療政策・医療経済学

私が本学に着任してから3月末で10年になる。これまでのご支援に感謝するとともに、今後も身を引き締めて、教育、研究、社会活動に取り組みたい。

教育では、教養の学生に「地域包括ケアと多職種連携のワークショップ」の授業を行った。笠岡諸島の北木島で合宿を行い、笠岡市民会館で地域のみなさまとディスカッションを行った。この授業は、アゴラの山川路代助教がコーディネーターで、笠岡市の西江雅子保健師や川崎医療福祉大学の竹中麻由美准教授を非常勤講師に迎え、笠岡市役所、島づくり海社、地域住民の方々にお世話になった。津島で学生と意見交換したが、学生たちの成長ぶりには目を見張った。

昨秋には、岡山県看護協会主催の認定看護管理者サードレベル研修の講義を1日行った。有吉真季子院生に協力してもらい、金田病院の長尾由美子看護師、岡大病院の藤井玲子、梶清友美看護師らと意見交換できたことは有意義な経験だった。

市町村国保が今年度末までに特定健診データ等を活用したデータヘルス計画を策定するが、そのアドバイザー役で、笠岡市、美作市、勝央町、早島町に出向いた。担当保健師や国保担当の方から特定健診受診率があるように上がらないなどの苦労話を伺った。

10月には岡山市の介護保険サミットに参加して、御津医師会の大橋基医師、岡西公民館の坪井玲子さんら

とシンポジウムを行った。御津医師会の在宅医療の展開、公民館を調整役とする三門学区の住民同士の助け合いは注目に値する。2月には、岡山市の「岡山発！健康で元気に輝き続けるまち」シンポジウムに参加し、総合診療医でコンサルタントの三島千明医師、移住者で移住者の支援を行っている佐藤正彦さんらと意見交換した。

論文では、「季刊ろうさい」に、「日本の医療をどう評価するか？」「医療・介護と安心のまちづくり」を、「厚生指針」に「地域医療構想・医療計画の策定と在宅医療等の需要予測」を発表した。（浜田 記）

## 分子腫瘍学

今期の人事等については、加本佳大が修士過程を修了し、就職します。三宅雄大は、博士課程を中退して就職することになりました。

また、保田雪子が博士号の学位を授与されました。英国からのEPOK留学生として、David Sinclair Thomas Jr. が、10月から教室の研究に参加しています。

今期の学会発表は、以下の通りです。“肺癌に関わるmiR-19aの標的遺伝子解析”（大内田守）；第75回日本癌学会学術総会；パシフィコ横浜、2016.10.6-8。

（堺 記）

## 腫瘍ウイルス学

当教室の本年度下半期の活動内容について報告します。研究面では、教室員は第64回日本ウイルス学会学術集会（札幌市、平成28年10月23～25日）に参加し、谷 焯琳院生、佐藤 伸哉助教、上田 優輝助教と團迫の4名が日頃の研究成果を英語で口頭発表しました。また、團迫は京都国際会議場で開催された国際HCV会議（平成28年10月11～15日）で研究成果を発表し、国内外の研究者と熱心に討論を行いました。このように、教室員は国内外の学術集会に積極的に参加し、日頃の研究成果の発表と情報収集を熱心に行っております。また、加藤教授、上田 優輝助教と谷 焯琳院生は国立感染症研究所で開催された第5回肝炎ウイルス研修会（平成29年2月23～24日）に参加し、谷 焯琳院生が「N-89とN-251の抗HCV機構：両化合物に対する抵抗性獲得機序の解析」というタイトルで発表を行いました。教育面では、当教室の修士課程に在籍する谷 焯琳院生と小野村 大地院生が2年間の研究成果を修士論文発表会にて発表しました。両名とも、4月

より当教室の博士課程に進学する予定です。当教室の研究活動の詳細などについては、教室のホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/med/dmb/index.html>) をご覧ください。当教室は、メンバー、プロジェクトともに一層充実して研究及び教育に取り組んでいます。これまで以上に、御指導、御支援をよろしくお願いいたします。(團迫 記)

## 細胞生物学

[人事] 新潟大学より医学研究インターンシップ(MRI)で、平成28年9月から4年生の佐藤ももさん、深井悠未さん、平成29年1月から3年生の市川健さん、坂口彰さんが2ヶ月間在籍し、研究などを行いました。平成29年1月から短期留学生としてLena Audebertさん(pierre et marie curie university、フランス)が3ヶ月間在籍し、研究などを行いました。

[研究成果発表] 阪口政清准教授が筆頭の論文「Identification of an S100A8 Receptor Neuroplastin- $\beta$  and its Heterodimer Formation with EMMPRIN」がJournal of Investigative Dermatology誌、136(11)、2016に掲載されました。第75回日本癌学会学術総会(平成28年10月、横浜)に参加し、阪口政清准教授が座長、木下が癌の転移抑制を目指したタンパク質製剤の開発に関する研究成果について発表を行いました。第39回日本分子生物学会年会(平成28年11月、横浜)に参加し、村田等講師が神経細胞死・軸索変性に関与するSARM1のリン酸化制御に関する研究成果について発表を行いました。

[受賞、研究資金の獲得状況] 阪口政清准教授が次世代がん医療創生研究事業に採択されました。

新しい年を迎えましたが、平成28年も教職員一同研究に励んでいきたいと思えます。(木下 記)

## 細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ミトコンドリア機能と細胞機能発現の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術(体内診断法)の確立、がんの新規画像診断・治療法(Theranostics)の確立、酸化脂質を中心とするメタボノミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTS1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業(AMED)、基盤研究(A)、(B)、および(C)、および、挑戦的萌芽研究(JSPS)、さらには、特別電源所在県科学技

術振興事業(岡山県)などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学・産学官連携センターの研究スタッフ(計10名)および2名の日本人大学院生(博士)、マレーシアおよびインドネシアからの大学院生(各1名)が従事しています。

人事関係では、2月にインドネシア留学生Nuriza Ulul Azmiさんの修士学位論文審査が行われ無事修了しました。彼女の今後の活躍が期待されます。

教育関係では、2年次生対象の生化学の講義は様々な改善を加えつつ、実習では脂質の抽出と解析に取り組みました。また、今年度から教養科目「生命の不思議2」が始まり、松浦、小淵、稲垣が津島キャンパスに赴いて各自の研究分野の授業を行いました。松浦が中心となり、インドネシア大学およびスウィンバン大学(オーストラリア・マレーシア)との2つの大学間協定を締結し、学生交流の加速に益々の期待を寄せています。

学会関係では、松浦が国際自己免疫会議(ドイツ・ライプチヒ)で招聘講演をしました。小淵は、第89回日本生化学会大会(仙台)でPDTに関する研究を発表しました。(小淵 記)

## 組織機能修復学

平成28年4月より新設された本分野では、各種難治性疾患における組織・機能の維持・修復、組織再生等に関する有効なシーズの開発を目指し、日々研究しております。当初は、宝田、河原さんの2名でスタートしたわけですが、途中から大学院生として松本さんが、11月からは内地留学生として河邊さんが大学院生として参加してくれています。今年度は、基本的な実験機器のセットアップと、書類ベースでの立ち上げ(遺伝子組み換え申請・動物実験計画など)から始まり、培養細胞を使用した解析、保存しておいたサンプルを使用した解析がメインでしたが、ラボの人数が増えてきて、1人では手に負えない実験系も、スタートが切れるようになりました。遺伝子組み換えマウスを使用した解析系が動き始めたのは大きいところです。前任地において多数のラインを維持できていたのも多くの方々のお陰であったのだと、改めて感謝している次第です。いままで取り組んでいた実験系を精査・取捨選択し、本学にて研究の基盤を築く作業、それに新しい研究技術を取り込む作業、このスクラップ・アンド・ビルドにより、臨床ニーズに積極的に応えるシーズを本学にて創出できるよう日々精進している次第です。昨年4月の着任以来、多くの方々にサポートいただき



ているお陰で、分野が少しずつ前に進んでいる実感を  
得ております。どうぞ今後ともご指導ご鞭撻のほど何  
卒よろしくお願いいたします。(宝田 記)

## 消化器・肝臓内科学

昨年9月にIBDセンターが開設され、岡田教授、平  
岡佐規子(H6)が炎症性腸疾患の患者様をより専門  
的に診療する体制を整え、よりよい医療を提供するべ  
く邁進しております。

人事ですが、4月より桑木健志(H12)が福山市民  
病院、三浦公(H18)が津山中央病院、竹井大介(H18)  
が住友別子病院 秋元悠(H18)が岩国医療センター、  
澤原大明(H19)が赤磐医師会病院、下村泰之(H20)  
が津山中央病院、平野智子(H21)が備前病院へ赴任  
いたします。これまでに修得した知識と技術を生かし、  
新天地での活躍を期待しております。

堤康一郎(H13)は4月よりアメリカのピッツバ  
グ大学に留学します。大学に戻って来る際には、多く  
の学んだことを教室に還元し、大きな力になるものと  
確信しております。

また、3月で病棟医を終える高田斎文(H19)、皿  
谷洋祐(H21)、岡本雄貴(H22)、は大学病院の医員  
として診療を行いながら臨床研究を開始します。同じ  
く、藤井祐樹(H22)は仙台オープン病院、大森正泰  
(H23)は大阪成人病センターへ国内留学し、山内健  
司(H20)は三豊総合病院に赴任いたします。

これからも、消化器内科の発展のために医局員全員  
で精進、同窓の皆様にご貢献できるよう努力致しますの  
で引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお申し上  
げます。(加藤 記)

## 血液・腫瘍・呼吸器内科学

新たな世紀の幕開けとなった平成13年(2001年)  
のご着任以来、16年7カ月にわたり、主任教授とし  
て当科の先頭に立ってご指導いただきました谷本光  
音先生が、本年10月末日をもちまして退任されまし  
た。この間、臨床面では、当科が、血液、呼吸器、腫  
瘍、アレルギーの各分野において、中四国のLeading  
universityであり続ける基盤を構築されるとともに、  
総合的な視点を持つ内科医の養成を掲げ、当院の卒後  
臨床教育システムの整備にも尽力されました。研究面  
では、本学大学院研究科長を本年3月まで二期五年務  
められ、国内外へ精力的な研究成果を発信されました。  
学外においても、日本血液学会、日本造血細胞移植学

会、日本臨床腫瘍学会、日本癌治療学会など多くの学  
会で要職を長く勤め、その安定的な運営への貢献は大  
きく、平成16年に日本造血細胞移植学会総会、平成27  
年に日本リンパ網内系学会、平成28年に日本血液学会  
国際シンポジウムをそれぞれ会長として開催、さらに  
平成29年7月に日本臨床腫瘍学会学術集會を会長とし  
て主宰される予定です。現在は岩国医療センターに着  
任されており、4月より院長として地域の拠点医療機  
関としてのさらなる発展に寄与されます。今後も当科  
とのご連携・ご指導をお願いする所存です。

木浦勝行教授は、呼吸器・アレルギー内科科長とし  
て、基礎研究を精力的に進めつつ、治験・臨床試験に  
も大きく手腕を発揮し、この学術領域におけるトラン  
スレーショナルリサーチを積極的に推進しています。  
治験・製造販売後臨床試験の同意取得件数で呼吸器・  
アレルギー内科が首位を独走するほか、自ら全国レベ  
ルの医師主導治験を主管するなど、その圧倒的な存在  
感で、本邦の臨床腫瘍学の発展を牽引する主導的な役  
割を担っています。

教室では、4月から、浅田騰が留学より帰国し、助  
教に着任しました。病棟医員として、新たに、碓井喜  
明、近藤 匠、坂本真衣子、安東千裕、中須賀崇匡が  
加わり、松田真幸、板野純子、中西将元、原 尚史と  
ともに活躍しています。本年3月の学位審査には、藤  
井詩子が学位を取得しました。

教室の実務体制は、医局長 松岡賢市、副医局長  
西森久和・久保寿夫、病棟医長 大橋圭明、外来医  
長 市原英基、教育医長 西森久和が担当しておりま  
す。何かございましたら何時でもご連絡頂ければ幸い  
です。(松岡 記)

## 腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動を初め、  
広く精力的に活動を行っております。

当科では、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究  
活動を行っており、とくに和田教授が代表者である  
U-CARE研究(多施設共同研究)では糖尿病患者尿レ  
クチンアレイ解析を用いて糖尿病性腎症早期発見のた  
めのバイオマーカー(平成27-28年度橋渡し研究加速  
ネットワークプログラムシーズA)を探索しています。  
佐田憲映准教授は難治性血管炎研究の中心メンバー  
の一人としてわが国のANCA関連血管炎の治療・予  
後データの解析を行っております。

教室員は国内外問わず大変活発に学会発表を行って  
おります。谷村智史医師が第46回日本腎臓学会西部

学術大会で優秀演題賞を、竹内英実医師が第115回日本内科学会中国地方会Young Investigator Awardを、片山晶博医師が岡山医学会結城賞を、喜多村真治講師が第43回岡山市文化奨励賞（学術部門）を、中司敦子助教が第37回日本肥満学会ビジョナリーアワードをそれぞれ受賞しました。

人事面では、平成28年8月に勝山隆行医師が米国Beth Israel Deaconess medical CenterのTsokos教授の元へ研究留学しました。10月から井上達之助教が姫路赤十字病院へ、中島有里医師が岡山済生会総合病院へ赴任しました。平成28年10月には山村裕理子先生が岡山済生会総合病院より帰局されました。平成29年1月には、三朝温泉病院で半年間の勤務を終えた渡辺晴樹助教が帰局いたしました。

最後になりましたが、今後とも同門並びに同窓の諸先生方の御指導・御支援宜しくお願い申し上げます。

（江口 記）

## 精神神経病態学

平成28年度下半期の当教室のご報告です。

当教室の同門の山田了士先生が教授として就任し、2年が経ちました。臨床、教育、研究において、同門、教室員が協力し順調に歩んでおります。

来年度は、医局長は川田清宏、病棟医長は酒本真次、外来医長は井上真一郎、教育医長は岡久祐子と変更しすすめてまいります。

昨年12月10日、第118回岡山大学大学院精神神経病態学教室同門会には、110名を超える方々に参加いただきました。一般演題6題の後、岡山市こころの健康センター所長の太田順一郎が教育講演を、小山文彦が、東邦大学医療センター佐倉病院 産業精神保健職場復帰支援センター長・教授に就任したことに伴い、記念講演を行いました。

教室人事は、昨年12月末、助教の大島悦子が退職し、倉敷中央病院に転勤しました。4月より、枝廣暁が岡山県精神科医療センター、寒川尚登が高岡病院、赤穂千尋が慈圭病院とそれぞれ赴任いたします。

病棟は、県内唯一の閉鎖病棟を持つ総合病院であることから、精神、身体ともに重症な患者様が多いのですが、若手医師を中心として、指導医の下、奮闘しております。また、山田了士教授を中心とし、教室として臨床に向き合う姿勢を大事にしております。

29年度も、4月に3名の後期研修医を迎えることとなります。また、2名の初期研修医が長期に精神科の研修を行います。また、無事に卒業試験、国家試験を

合格されましたら、精神科志望の可能性がある初期研修医が10名、岡山大学で研修の予定です。また3名（博士課程2名、修士課程1名）が大学院に入学し研究を開始します。来年度はさらに活性化するのではないかと期待しています。

また、医師教育にも力を入れ、研修医は約40名/年、6年生の選択実習は昨年同様に約30名が精神科を選択し、学内外で副主治医として上級医の指導の下、診療に携わっていきます。

今後ともご指導のほど、宜しくお願いいたします。

（高木 記）

## 小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室、岡山大学病院小児科の現況を報告させていただきます。

まず、診療です。小児科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、新生児集中治療部門（NICU）とも、「小児医療センター」、「周産母子センター」を中心とする岡山大学病院の連携・協力体制の中で重症児への幅広い高度医療を実践しています。診療連携病院への人員補強を進めていることもあり当院にはぎりぎりの人員しかおりませんが、長谷川病棟医長、吉本外来医長が中心になり、個々の高い能力を最大限に生かしながらチーム医療を行っています。今年度も、前記の診療部門は常に100%前後の病床稼働率を堅持しています。

当教室では、教育が大学の生命線であるとの共通認識が徹底しています。私たちは岡山大学での卒前卒後教育は日本のトップクラスであると考えており、多くの若い方々にこのすばらしい教育を受けてもらいたいと願っています。現時点ですが、今年4月1日に始まる新臨床研修制度を選択した小児科専門医を目指す医師は計10名になっています。この新臨床研修制度が追い風になり、現時点で今年度の小児科新入局者は計15名に達しました。男性11名、女性4名で、卒業年も昭和59年卒から平成28年卒と幅広い年齢層の方々が私たちの仲間になってくれました。

岡田教育医長、馬場医局長が中心になり、大学病院研修医、小児科医、大学院生のさらなる増数を目指して、見学学生、若手医師への説明会、食事会をひと月に1回以上行っています。

研究も熱心です。嶋田研究推進長が中心になり、各グループが切磋琢磨しています。英語論文も継続的に出ている状況です。ここ3年間は年間30～35編の英語論文が出ており、そのインパクトファクター（IF）は年間90～100に達しています。今年度はJ Allergy

Clin Immunol (IF = 12.49)、Haematologica(IF = 6.67)、Crit Care Med (IF = 6.31)、Pediatrics (IF = 5.47)、Resuscitation (IF = 5.41)、Br J Haematol (IF = 4.94)などの一流誌で論文が発表されました。

特筆すべきことが1つあります。長谷川高誠講師が平成28年度大藤内内分泌医学賞を受賞しました。受賞した研究タイトルは「日本人特発性中枢性思春期早発症の新規原因遺伝子の探索と遺伝的背景の解明」でありました。ご支援いただきました多くの先生方に深く感謝致します。

「小児医療センター」は広報活動にも力を入れています。今年度(平成28年)は6月25日(土)～26日(日)、コンベックス岡山での「おぎゃっと21」に出展しました。10月23日(日)は岡山大学病院マスカットキューブで第2回市民公開講座を開催しました。来年度(平成29年)ですが、7月1日(土)～2日(日)、コンベックス岡山での「おぎゃっと21」に再度出展します。さらに、秋から冬にかけて市民公開講座を1回、県民公開講座を2回開催する予定です。平成29年11月25日(土)～26日(日)には、塚原が当番会長になり第69回中国四国小児科学会を岡山コンベンションセンターにて開催させていただきます。

当院小児医療部門(NICUを含む)は不器用ながら熱心な人材が豊富です。最後になりましたが、診療、教育、研究のすべてにおきまして、岡山医学同窓会(鶴翔会)の先生方のご指導、ご支援をひきつづき宜しくお願い致します。(塚原 記)

## 発達神経病態学

長年にわたり教室運営に尽力してこられた吉永治美准教授が、国立病院機構南岡山医療センターに新規開設された重症心身障害児センターのセンター長に今年1月1日付で就任されました。吉永先生は教授不在の間に診療科長代行を務められるなど、文字通り教室の中心として活躍されましたので、その貢献には感謝するばかりです。

また慶事として、岡牧郎講師が長年の発達障害医療への貢献に対し「山内逸郎記念賞」を受賞しました。

小林勝弘教授のもと、吉永先生の後任として秋山倫之が准教授・てんかんセンター副センター長に就き医局長を併任し、岡講師が病棟医長、遠藤文香助教が外来医長・教育医長の体制で、教室運営を行っております。その他の人事に関しては、兵頭勇紀が医員として専門研修を開始いたしました。また、森篤志が半年間の国内留学を終え、大阪医科大学小児科に戻りました。

診療に関しては、小児神経科は小児医療センター、てんかんセンターと結節性硬化症ボードの所属診療科として、引き続き密な連携体制をとっております。てんかん外科や食餌療法を含めた包括的てんかん診療の他、発達障害やその他の小児神経疾患についても幅広く診療を続けております。

学会活動では、秋山倫之、秋山麻里が12月に米国てんかん学会(開催地:Houston)で発表した他、日本てんかん学会(発表:小林、秋山倫之、遠藤、秋山麻里、林裕美子)、日本臨床神経生理学会(発表:小林)、先天代謝異常学会(発表:秋山倫之、柴田敬)や地方会で多数の演題発表を行いました。また、第95回岡山小児てんかん懇話会、第47回中国・四国点頭てんかん研究会を事務局として運営いたしました。

研究面では、てんかんや神経生理学等に関する臨床研究を一層進めています。代謝物質分析の依頼件数は増えており、葉酸受容体異常症、ビタミンB6依存性てんかん、低ホスファターゼ症、小児神経伝達物質病などの稀少疾患の検体も徐々に集まってきております。脳炎・脳症に関する代謝物質分析もこれまで通り進めていく予定ですので、同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。(秋山 記)

## 消化器外科学

平成28年8月～平成29年3月の教室だよりをお届けします。

第82回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会が10月2日(日)に開催され、大阪大学心臓血管外科 澤芳樹教授に「新しい外科学の価値の創造」とのテーマでご講演いただきました。1922年開講の当教室は、5年後には開講100周年を迎えることとなります。平成29年1月22日には、岡山大学関連の消化器外科医が一堂に会する第5回消化器外科フォーラムが開催され、多くの先生方にご参加いただきました。教室の垣根を越えた集まりも定着し、臓器別診療体制の確立が実感されます。この場を借りて、皆様からいただきましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

人事面では、篠浦 先が津山中央病院へ異動し、肝胆膵外科副科長は榎田祐三に、外来医長は吉田龍一に交代しました。病棟勤務を終えた渡辺信之が岡山済生会総合病院へ、樹下真希が岡山中央病院へ、研究を終えた木村圭佑は尾道市民病院へ、久保田哲史は広島市民病院へ赴任しました。米国ベイラー大学留学から帰国した重安邦俊、福岡大学への国内留学を終えた熊野健二郎、神戸赤十字病院での研修を終えた矢野修也、



大学院での研究を終えた國府島 健、大学院へ進学した松三雄騎、河本 慧、武田 正、垣内慶彦、梶岡裕紀は消化管外科・肝胆膵外科の医員に採用され、病棟で日夜奮闘しています。宮本 学、伊藤雅典、佐藤浩明、升田智也は半年間の病棟勤務を終え、大学院生として研究生生活に入りました。

研究・学会活動では、例年通り、国内外の各種学会・研究会において日頃の成果を多数発表しております。競争的資金では、AMED研究助成2件、文科省高度医療人材養成プログラム1件、基盤B、C科研究費等15件を獲得できており、活発な基礎研究、臨床研究の支援ができております。また、表彰では、黒田新士が平成28年度岡山県医師会学術奨励賞の栄誉に輝きました。

消化器外科・呼吸器乳腺内分泌外科・心臓血管外科教室が一丸となった岡山大学外科同窓会も、9月17日に第3回を開催して正式な設立総会を行いました。外科マネージメントセンター登録者も144名となり、さらなる発展が期待されます。

副院長として多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育になお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。

(岸本 記)

## 整形外科

平成28年8月から平成29年3月までの教室だよりをお届けします。

教室の大きな行事としまして、平成28年8月21日に岡山大学整形外科桃整会夏季セミナーを開催し、宮澤慎一医師、瀧川朋亨医師、雑賀建多医師、島村による4題の教育研修講演と、九州大学大学院医学研究院臨床医学部門外科学講座整形外科学分野 中島康晴教授による特別講演があり、多数の参加がありました。

10月2日には岡山国際交流センターにて「骨と関節の日」のイベントが行われ、尾崎敏文教授による「ロコモとは?」、千田益生教授による「ロコモ度テストでロコモを測ろう」、岡山大学 全学教育・学生支援機構の吉岡 哲助教による「日常生活に取り入れよう!足腰づくり体操」の講演があり、200名にも及ぶ多数の市民の方の参加がありました。

また、平成28年12月10日に岡山大学整形外科桃整会総会、桃整会学術講演会岡山運動器フォーラムならびに忘年会を開催し、昭和大学医学部整形外科学講座

稲垣克記教授による特別講演があり、100名を越える盛大な会となりました。

人事面では平成28年10月に大学院生の渡邊典行が香川労災病院へ、井上博登が光生病院へそれぞれ異動になりました。

学術面では平成28年12月に香川洋平、尾崎修平、中道亮、平成29年3月に田中孝明、山根健太郎、井上博登が学位を取得しました。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々の健康とご活躍をお祈り申し上げます。(島村 記)

## 皮膚科学

2016年9月～2017年2月についてご報告いたします。岩月教授は学内において臨床・研究・教育のほか、岡山大学病院副院長としておもに医療安全関係に携わり、学外では皮膚科関連学会はもちろんのこと、皮膚科以外の分野でも厚生労働省関連など複数の研究班にも名を連ね、精力的に活動を続けています。また2011年からタイ・バンコクでのDiploma Course of Dermatology and Dermatosurgeryにおいて、アジア諸国の皮膚科研修医に対して5日間の集中講義を毎年継続し、アジアの皮膚科医育成にも注力されています。

学術面では2016年9月にドイツ・ミュンヘンで行われた第46回ESDRで岩月が発表しました。10月に米子市で行われた第68回西部支部学術大会で横山・梶田・山本が発表し、山本はポスター賞金賞を受賞しました。インド・ムンバイで行われた2016年アジア皮膚科会議および米国・ニューヨークで行われた第3回世界皮膚リンパ腫会議で岩月が講演を担当しました。浜松市で行われた第67回中部支部学術大会で岩月が講演を担当し、浜重が発表しました。11月に浦安市で行われた第4回EADCで岩月・加持・濱田が発表しました。12月に仙台市で行われた第41回日本研究皮膚科学会学術大会で三宅が oral presentation を行ないました。2017年1月に福島市で行われた第40回皮膚脈管・膠原病研究会で岩月が発表しました。

人事面では2016年12月に高須賀が産休に入り、2017年1月に山下が帰局、松田が高松赤十字病院へ異動しました。

最後に昨年岡山大学病院内に設立されましたメラノーマセンターは2年目を迎え、メラノーマ治療を関連病院・関係診療科と診療部門が連携して統合的に行う体制が確立しつつあり、さらにはアカデミアの中でメラノーマに関する岡山大学発の新知見を成果として着実に発信しております。メラノーマ以外の皮膚科疾

患に関しましても同門の先生方のご助力により専門医療を提供しつつ、新知見の発信を継続しています。末筆となりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念申し上げます。(濱田 記)

## 泌尿器病態学

平成28年8月から平成29年3月までの教室だよりをお送りいたします。

那須教授は泌尿器科教授のみならず、平成28年4月より研究科長としても多忙な毎日を過ごされておられます。益々多忙になられる那須教授を教室員一同支えていきたいと思っております。

人事面では10月より後期研修医の土井啓介が岡大に、2月より笹岡丈人が岡山日赤に出向しました。

臨床面ですが、前立腺癌に対するロボット支援下前立腺全摘は中四国で初めて500例に達し560例を超えました。腎癌に対するロボット支援下腎部分切除も保険適応となり50例を超えました。その他腎盂形成、自家腎移植もロボットで行っております。また低侵襲の超細径尿管鏡(HDIG)を用いて結石や上部尿路上皮癌のレーザー焼灼治療も進んでおります。和田耕一郎講師はこの治療で泌尿器内視鏡学会の学会賞を受賞しました。腎移植は6周年を迎え70例を超え、1年生着率は未だ100%を保っております。また渡辺豊彦准教授(過活動膀胱)、高本篤(泌尿器悪性腫瘍)の尽力により治験件数も増え、岡山大学病院で最多となっています。基礎面は渡部昌実新医療研究開発センター教授を中心としてREIC/Dkk-3遺伝子治療をはじめ、新規医療の研究開発およびその橋渡し研究を進めています。

関連病院の先生方におかれましては、今後とも益々のご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。末筆ながら、同門の先生方のご健康とご活躍をお祈り致します。(荒木 記)

## 眼 科 学

当科に関係する学会発表や学会の開催については、2016年9月17日(土)～19日(月・祝)にかけて、第27回日本緑内障学会が開催され、内藤、藤原美幸、藤原篤之が発表しました。2016年11月3日(木・祝)～6日(日)にかけて、第70回日本臨床眼科学会が国立京都国際会館・グランドプリンスホテル京都にて開催され、松尾、森實、内藤、木村、濱崎、細川、藤原美幸、三木、柴田、土居、荒木、杉原が発表しました。2016年12月2日(金)～4日(日)にかけて、第

55回日本網膜硝子体学会総会がベルサール渋谷ガーデンにて開催され、白神教授、塩出、木村、平野が発表しました。白神教授が盛賞を受賞しました。

人事については、2016年11月から後期研修医(専攻医)の中澤理紗先生が岡山大学病院に入局されました。2017年1月から熊瀬文明先生が当院から倉敷成人病センターに異動されました。

最後になりましたが、いつも患者様をご紹介くださる各診療科の先生方、近隣の関連病院や診療所の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(濱崎 記)

## 耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。学会関係では日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会、日本口腔咽頭科学会、日本耳科学会、日本鼻科学会、日本聴覚医学学会、日本めまい平衡医学会、日本甲状腺外科学会、日本ヒスタミン学会、日本頭頸部外科学会、日本嚥下医学会、International Symposium on Recent Advances in Rhinosinusitis and Nasal polyposisなどで医局員が多数の演題を発表いたしました。

人事関係では、内藤が香川労災病院へ異動し、松本が帰局いたしました。臨床面では頭頸部がんセンターを中心に頭頸部腫瘍診療を積極的に実施しており、耳科手術(含人工内耳)、内視鏡下鼻手術も引き続き実績を伸ばしております。今後とも同門の諸先生がたのご支援をよろしくお願い申し上げます。(折田 記)

## 放射線医学・放射線部

放射線医学教室の近況をご報告致します。4月に5名の新入医局員を迎えることができました。大野 凌、北山貴裕、佐村和磨、奥野菜津子、戸田憲作です。大野は岡山大学病院で、北山は香川県立中央病院で、佐村は岡山赤十字病院で、奥野は倉敷成人病センターで、戸田は岡山労災病院でそれぞれ放射線専門医を目指し後期研修を開始しています。

4月の人事異動として、岡山大学病院では、准教授の佐藤修平が川崎福祉短期大学に教授として赴任いたしました。また児島克英は高知医療センターのPETセンター長として赴任し、坪井有加は福山市民病院、児島聡一は三豊総合病院、梶田聡一郎は岡山医療センター、馬越紀行は国立がん研究センター中央病院、久住研人は香川県立中央病院にそれぞれ赴任していま

す。

岡山大学には徳島大学から新家義崇、ハンブルグ大学から稲井良太、姫路赤十字病院から宇賀麻由、岡山医療センターから小河七子が帰局しています。研修医では、岡山赤十字病院から松本晋作、姫路赤十字病院から岡本聡一郎、岡山医療センターから田邊 新が帰局し、メイヨークリニックに留学している田中高志も近々帰局する予定です。医局役員に関しては、医局長は藤原寛康、病棟医長は片山敬久で変更ありませんが、外来医長は生口俊浩から松井裕輔に変わっております。

大学外での異動は、谷口敏孝が岡山労災病院から倉敷成人病センターへ、道下宣成が倉敷成人病センターからまび記念病院へ、岡村 淳が三豊総合病院から川崎医科大学総合医療センターへ、岸 亮太郎が福山市民病院から三豊総合病院へ、富田晃司が国立がん研究センター中央病院から姫路赤十字病院へ、坂本拓海が香川県立中央病院から呉共済病院へ赴任されています。新天地でそれぞれの先生方が、素晴らしい御活躍をされていることと思います。

放射線科では、画像診断、IVR、放射線治療において、高度先進化した充実した医療の提供を心掛けております。皆様の御力添えを受けながらこれからも日々精進してまいりますので、御指導御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。以上、簡単に教室の近況を報告させていただきます。(藤原 記)

## 産科・婦人科学

平松祐司教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。昨秋からも日本産科婦人科内視鏡学会、中国四国産科婦人科学会、日本癌治療学会、日本生殖医学会、日本女性医学学会、日本糖尿病・妊娠学会などの学会・研究会で、教室から多数の演題を発表いたしました。とくに9月にはALSO (advanced life support in obstetrics) の全国学会を教室で主催し、「Team STEPPSの普及をめざして」をテーマに熱い議論がなされました。また臨床面で特筆すべきは、関係各方面のご尽力により2016年12月に倉敷市立児島市民病院にて約8年ぶりに分娩が再開されたことです。平松教授は2017年3月をもってご退任されますが、引き続き「チーム岡大」として、同門が一丸となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に務めて参ります。

10月の人事は、福山医療センターの西條昌之が大学病院に異動。香川県立中央病院の多賀茂樹が児島市民

病院に異動。大学病院の安藤まりが福山医療センターに異動しました。また後期研修1年目の相本法慧が姫路聖マリア病院より新たに当科に入局し、大学病院で後期研修を開始。これで本年度の新入局員は計8名となりました。秋定 幸は岡山赤十字病院、楠元理恵は姫路赤十字病院、杉井裕和は広島市民病院、三島桜子は香川県立中央病院、矢野肇子は岡山医療センターに異動。後期研修2年目の松原侑子は中国中央病院、鈴井泉は津山中央病院に異動。後期研修3年目の岡山済生会総合病院の甲斐憲治、津山中央病院の清時毅典、岡山赤十字病院の宮原友里が大学に帰局し、研修の仕上げに入りました。

12月には兵庫県立こども病院にてNICU研修をしていた谷 和祐が帰局。1月には春間朋子助教が福山市民病院に異動し、玉田祥子が助教に就任。3月には安藤まりが聖路加国際病院に異動いたしました。

なお岡山医療センターの桐野智江と中国中央病院の石川陽子が9月、福山医療センターの澤田麻里が10月、福山市民病院の平野友美加が1月、津山中央病院の岡真由子が2月からそれぞれ産休に入りました。そして育休中の小川千加子が8月に福山医療センター、太田友香が10月から岡山済生会総合病院および岡山中央病院、石川陽子が1月に三豊総合病院、角南 (山崎) 華子が2月に大学病院、澤田麻里が2月に福山医療センターへと復職いたしました。

教室役職はこれまで通り、准教授 増山 寿、医局長 鎌田泰彦、婦人科病棟医長 中村圭一郎、周産母子センター産科部門長 早田 桂、外来医長 関 典子、教育医長 楠本知行の体制です。

産婦人科医不足は本学の関連病院におきましても喫緊の課題です。今後とも先生方の御指導ならびに御支援の程よろしくお願い申し上げます。(鎌田 記)

## 脳神経外科学

同門の先生方におかれましては益々ご清栄のことと存じます。昨年11月に当教室は開講50周年記念行事を盛大に行うことができました。同門の先生方には多数ご参加いただき誠にありがとうございました。

臨床面では各グループの専門的医療を中心に精力的な診療を続けております。また、教育面では伊達教授を中心とした丁寧な指導と実習が学生に好評を得ています。研究面では、移植・再生、ステレオ、血管、腫瘍の各グループとも、着実に成果をあげ、積極的に論文、学会等で発表しております。

平成28年8月に行われた日本脳神経外科学会専門医



認定試験に豊嶋敦彦先生、佐々木達也先生、春間 純先生が優秀な成績で合格をされました。

人事関連では、まず新入局者ですが、久壽米木亮先生（岡山大学病院脳神経外科勤務）、細本 翔先生（広島市立広島市民病院勤務）、胡谷侑貴先生（岡山医療センター勤務）が入局されました。

異動につきましては平成28年8月から平成29年3月の間について記します。平成28年8月に、難波洋一郎先生が岡山医療センターから済生会吉備病院脳神経外科勤務、平成28年10月に、溝瀆雅之先生が岡山旭東病院から金田病院脳神経外科勤務、中川 実先生が興生総合病院から阿智須共立病院脳神経外科勤務、松井利浩先生が高砂市民病院から姫路中央病院脳神経外科勤務、杉浦智之先生が姫路第一病院から高砂市民病院脳神経外科勤務、竹内勇人先生が大学研究室から岡山赤十字病院脳神経外科勤務、佐藤 悠先生が岡山大学病院から広島市立広島市民病院勤務、兼田圭介先生が岡山赤十字病院から岡山大学病院脳神経外科勤務となり、平成28年11月に、豊嶋敦彦先生が、岡山大学病院から香川県立中央病院脳神経外科勤務、高杉祐二先生が大学研究室から岡山市立市民病院脳神経外科勤務、岡 哲生先生が大学研究室から福山市民病院脳神経外科勤務となりました。平成29年1月に、角南典生先生が松山市民病院を退職され、福角病院勤務、藤井謙太郎先生が米国から帰国し、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科助教採用、石田穰治先生が岡山大学病院から姫路赤十字病院脳神経外科勤務、春間 純先生が岡山大学病院から福山市民病院脳神経外科勤務、平成29年3月に新治有径先生が大学研究室から岩国医療センター脳神経外科勤務となりました。

教室の役職は、医局長は上利 崇が、外来医長は安原隆雄が、病棟医長は菱川朋人が、教育医長・教育企画委員は亀田雅博が勤めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。（上利 記）

## 総合内科学

大塚文男教授は、全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立を目指して精力的に活動しております。本年3月3日（金）、4日（土）に、大塚教授が会長を務めます「第14回日本病院総合診療医学会学術総会～総合性と専門性のハブとなる機能的な連携へ～」を岡山大学鹿田キャンパスで開催いたします。総合診療に関連する臨床・研究と医療教育に関連した

エキスパートからの40講演に加えて全国より180を超える一般演題が集まりました。事務局長の近藤英生講師のもと、ユニークな企画を準備し、医局一丸となって運営にあたります。また、大塚教授が研修委員長を務めます、新専門医制度による当院の内科専門医研修プログラムは、平成30年度のスタートに向け、本年2月末にプログラムを申請し、5～6月に認定、公表の予定です。連携施設・特別連携施設の先生方におかれましては、引き続きご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

教室の動きです。臨床面では、責任病床を12床に増床し、頼冠名病棟医長、花山宜久外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取り、診療体制の更なる充実化を目指しております。診断困難例や、複数の問題を抱える症例など、症例は多彩ですが、病棟チーム内や全体カンファレンスで活発にディスカッションを行い、的確かつ丁寧な診療を提供するよう心がけております。

教育面です。卒前教育については、教育医長の花山宜久医師のもと、教育企画委員の岩室雅也医師、堀口繁医師を中心に、卒後教育については、卒研コーディネーターの花山宜久医師を中心に指導を行っております。今年度は、当科の若手医師が症例提示し、情報交換を行う月1回の「検査部勉強会」に加えて、11月から12回シリーズで救急科、GIMセンターと共催で研修医対象の「総合診療ミニレクチャー」を開催、1月には若手からベテランの内科医を対象に「第1回冬季総合内科セミナー」を開催するなど、多職種連携教育や研修医教育、内科医の生涯教育に、より力を入れております。

研究面では、江原弘貴医師がマルトフィリア感染症の研究で学位を取得しました。週1回の研究カンファレンスは、研究担当の花山宜久医師、岩室雅也医師を中心に開催され、学会発表、論文執筆など積極的に活動しています。今年度下半期も、9月の第13回日本病院総合診療医学会学術総会（東京）、11月の第115回日本内科学会中国地方会（岡山）などにて、多数の演題を発表した他、若手医師が続々と論文発表しています。2月には岡浩介医師がコーディネーターとなり、岡山市民病院総合内科とWebを利用した合同抄読会もスタートしました。

人事面です。昨年10月に、早稲田公一医師が水島第一病院へ異動のため退職、岡山大学総合診療医（GP）コース・GP後期研修プログラム（家庭医療）の大村大輔医師が水島中央病院よりレジデントに採用。本年1月には、木村耕介医師が開業のため退職、後任とし

て消化器内科より堀口繁医師が助教（GIMセンター）に採用となりました。

その他、1月には当科の西村義人研修医が病院長賞（権の木賞）を、また当科の大塚教授が医科研修部門長を務める卒後臨床研修センター医科研修部門が教育功労賞を受賞しました。今後も、臨床・教育・研究のバランスをとりつつ、診療科全体で、総合内科医として全人的医療に貢献していきます。引き続き、岡山大学総合内科を御指導・御鞭撻の程よろしくお願いいたします。（小比賀 記）

## 循環器内科学

伊藤浩教授は、相変わらずの多忙な毎日をご過ごしております。

平成29年度2月までの大学の人事異動では、平成28年9月から寒川睦子先生が高松赤十字病院、松三博明先生が、みなみのハートクリニック、10月から麻植浩樹先生が大阪の桜橋渡邊病院へ赴任されました。平成29年1月から、赤木達先生がパリ第11大学附属マリローン病院へ留学、更科俊洋先生が三朝温泉病院に短期赴任、また、平成28年9月から植木敦先生が高松医療センターから、10月から杜徳尚先生がトロント総合病院成人先天性心疾患部門から帰局されました。特に杜先生においては、海外での成人先天性心疾患の経験を、診療に役立てて頂いております。成人先天性心疾患センターが立ち上がり、約3年が経過しますが、新たな人材も増えたこともあり、成人先天性心疾患患者も増加傾向で、この分野の入院患者も増えてきております。また、卵円孔が開存しておりそれによって片頭痛をきたす患者さんがおられ、経皮的に閉鎖することで劇的に症状が改善する場合があります。今のところ自費診療となりますが、片頭痛に対する卵円孔閉鎖術も始まり症例も増えております。

臨床に関しては、虚血、不整脈いずれも症例数が伸びております。治療に携わる医師が徐々に増えてきたこと、当科に関わる臨床工学士の増加などがその一因としてあげられます。

入院患者も徐々に増えておりますが、スタッフや病棟医の先生は力を合わせて診療にあたっております。

学会活動も盛んに行われ、Heart Rhythm、米国心臓病学会、ヨーロッパ心臓病学会では、関連病院も含め多数の演題を発表しました。その他、日本の学会でも多くの発表がされております。日本内科学会中国地方会では、川田哲史先生がYIAを、日本循環器学会中国地方会では、同じく川田哲史先生がYIAを受賞され

ました。

今後も、臨床・研究・教育にはげみ、やりがいのあふれる楽しい医局を目指したいと考えておりますので、御指導御鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

（西井 記）

## 心臓血管外科学

2016年8月から2017年3月の教室の動きをご報告いたします。

2016年11月には24年という長きにわたって教室を率いてこられた佐野俊二教授が退官されました。退官後は、米国UCSF外科学（小児心臓血管外科）教授として新たな門出となりました。教授退官後は、小児部門を笠原真悟医師、新井禎彦医師、小谷恭弘で、成人部門は増田善逸医師、血管部門は大澤晋医師および藤井泰宏医師が中心となり診療を行っております。皆様におかれましては、今後とも引き続き、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2017年1月には、黒子洋介医師が東京大学医学部附属病院における埋め込み型人工心臓および心臓移植の研修終了後に帰局いたしました。今後、中四国地方では経験数の少ない埋め込み型人工心臓の経験を積み心臓移植、心不全外科治療の充実を図るため一層の努力を行ってまいります。

教室としての国際貢献として熱心に取り組んできている東南アジアを中心とした医療援助活動はアジアの各国との交流が推進されています。昨年からの契約になったJICA草の根パートナー型技術交流の大型プロジェクトの継続のもと、ベトナムからの研修のほか、多方面で活動を行っています。

教室人事に関しましては、2016年9月より、医局長が新井禎彦医師から小谷恭弘に、病棟医長が小谷恭弘から藤井泰宏助教に交代となりました。今後も教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。（小谷 記）

## 脳神経内科学

阿部康二教授は、世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野でのさらなる発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。さらに、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動において中心的役割を果たしています。まず特筆すべきことと



して2016年7月1 - 2日に福山市 ホテル鷗風亭にて第1回国際Asidanシンポジウムを開催させて頂きました。6つの講演シンポジウムに17人の著名脳科学者の先生方に講演を行って頂き、9題の口頭発表が若手研究者によって実施されました。参加者は日本国内は固より、スペイン、米国、台湾などから外国人研究者も集り活発な意見交換がなされ、盛会裏に終えることができました。また、11月26日には第28回日本老年医学会中国地方を岡山コンベンションセンターにて開催させて頂きました。東京大学大学院加齢医学教授の秋下雅弘先生から特別講演をして頂き、全体で130人を超える多くの参加者があり、盛況の内に終えることができました。

人事面に関して、10月には中国ハルビンから施暁雯さんが博士課程大学院生として、中国延吉から黄永君が研究生として、中国武漢から嚴紅静さん、中国ハルビンから焦陽さんが交換留学生として研究チームに加わり、脳梗塞マウスモデルの解析等を開始し早くも成果を挙げています。

臨床面では一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査の開発や治療研究などを基礎研究と並行して推進しています。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法を積極的に行っています。また香川大学脳神経外科との共同研究で行ったALS患者脊髄PET研究では、ALS患者脊髄では糖代謝が異常に亢進することを明らかにし、英文誌に発表するなど新たな知見が生まれています。今後もALSや脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では、脳卒中・アルツハイマー病などの認知症・ALSなどの神経変性疾患の分野において新規治療の開発を目指し、様々な観点から研究活動を継続しています。特に岡山大学神経内科と京都大学の共同研究で原因遺伝子を同定した、小脳失調症と運動ニューロン疾患の臨床的特徴を併せ持つ新たな遺伝性神経変性疾患Asidan (SCA36) の病態解明・治療法開発を目指した基礎研究やiPS細胞/iN細胞などの新たな手法を用いた再生医療分野の研究、認知症モデルマウスを用いた基礎研究など、様々な研究が進行中です。平成29

年9月には第15回日本臨床医療福祉学会と第7回日本認知症予防学会をそれぞれ倉敷と岡山で開催予定であり、今後とも宜しくお願いいたします。（山下 記）

## 救急医学

教授、中尾の就任から約1年が経過しようとしています。人手不足にもかかわらず、明るく開かれた救急科をめざして努力した結果、平成28年4月から12月までに救急車で搬入件数は前年比約140%と増加しました。これも専門科、応援科の先生方のおかげと、救急科一同、深く感謝申し上げます。国立大学でこれほどフットワークが軽い病院はおそらく全国でも例がないと思われますし、本当に恵まれた環境で診療させて頂いております。

新教授の着任以来、愛情ある教育の充実を医局の最大の目標に掲げてまいりました。岡山市民病院のERと大学病院の三次救急というバランスがとれた研修は、一定の効果をあげ、少なくとも若者が救急医学を敬遠するという大きな損失はなくなりました。

本年度は、日常の重症患者の救命医療・集中治療管理の他にも、重責ある搬送に関わりました。7月には重症間質性肺炎患者にECMO（膜型人工肺）装着の上、肺移植のために航空搬送し、11月には台湾人旅行者の肺炎重症呼吸不全にECMOを装着して患者母国の台湾に国際搬送しました。

学術活動では日本救急医学会総会、日本外傷学会学会、ヨーロッパ集中治療学会、国際ショック学会、AHAなどの学会発表、Resuscitation誌、Scandinavian Journal of Trauma, Resuscitation and Emergency Medicine誌をはじめとして多数の論文発表をしています。また、基礎研究のLabを整備しており、4月から迎える6人の大学院生が研究しやすいような環境が整いつつあります。

人事では11月に野坂宜之助教、野坂クナウプ絵美里医員が米国Cedars-Sinai Medical Centerに留学しました。平成29年度からは、新しい仲間も増える予定です。

引き続きご指導ご支援のほどよろしくお願いいたします。（内藤 中尾 記）

## 形成再建外科学

2017年2月までの近況につきご報告いたします。

臨床においては頭頸部がんセンター、乳がん治療・再建センター、ジェンダーセンター、小児頭蓋顔面形成センターの郭連携部門をはじめ、リンパ浮腫診療な



ど何れもこれまで通り多くの症例数をかかえ、各先生方とも多忙な日々を過ごしております。

国際活動に関しては例年継続しているミャンマーでの医療支援を2017年1月に行いました。今回の医療支援ミッションでは当科からは木股、徳山、松本、妹尾、越宗が参加しております。小児先天奇形の疾患手術を担当するグループと、顕微鏡手術を必要とする再建手術を指導するグループに分かれて、充実した支援提供を行いました。また、ミャンマー人医師の留学受け入れも継続しており、2016年10月より新たにミャンマー人形成外科医師であるLei Yu Mon先生が留学にいられており、当科でのマイクロサージャリートレーニングプログラムを終了した後、頭頸部再建手術を主として当科での手術トレーニングを継続しております。

学会活動として、第73回中国・四国形成外科学会学術集會を当科主幹で開催しました。特別講師としては韓国よりJeong Tae Kim先生をお招きし、盛況のうちに終えることが出来ました。

教育においては、以前より継続して行っているマイクロサージャリートレーニングプログラム(MRCP)に対して国内外を問わず多くのトレーニング希望をいただいております。他科医師や研修医、学生も含めて幅広く受け入れを行い、トレーニング指導を行っています。

今後も地域医療を担う医師の育成、世界に発信可能な医療を目指して、教育・臨床・研究に日々邁進していきたいと考えております。

同窓の先生方におかれましては、引き続き変わらぬご指導・ご支援のほど、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。(駒越 記)

## 老年医学(三朝医療センター・慢性呼吸器疾患部)

老年医学分野の近況をご報告させていただきます。

2016年3月の三朝医療センター廃止をうけて、光延は同4月より鹿田地区に異動し、診療・研究・教育を開始しております。診療面では、呼吸器アレルギー内科での外来診療を中心に、他科との連携によって、老年医学的観点からの診療に少しずつ幅を広げております。研究面でも、関連分野との共同で研究計画を徐々に進めております。教育面では、昨年までと同様に学生・大学院生の教育に携わるとともに、中国赴日本国留学生に対して、赴日予備学校において実施された2016年度日本語予備教育(専門日本語教育、医学・薬学系前半、7/28～8/12)を担当いたしました。医学・薬学系後半(8/15～8/31)は、病原細菌学分野松下治教授が担当されました。

赴日予備学校は、吉林省長春市の東北師範大学(当時は吉林師範大学)に、日本語教育とともに日本の大学入学要件を満たすための準備教育機関として設立され、1979年3月に学部進学予定の100名の中国人学生に対する教育が開始されました。毎年、基礎日本語教師団と専門日本語教師団が我が国から派遣され、対象学生はいくつかの変遷を経て2007年度より進学博士のみとなっています。専門日本語教育のとりまとめは、2014年度までは東京工業大学、2015年度から岡山大学が担当となっています。今回、光延も参加する機会を与えていただきました。

診療・研究・教育の面で、さらに少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。(光延 記)

## 臨床遺伝子医療学

臨床遺伝子医療学の2016年度下半期の活動報告をさせていただきます。

遺伝子医療学は単一遺伝子病(遺伝性疾患)と、癌や生活習慣病など体細胞変異やエピジェネティック変異による遺伝子異常が関連する疾患という2つの分野の医学研究・医療の推進を目標にしております。

一つ目のいわゆる遺伝性疾患診療に関しては、稀少疾患が多く、なかなか個々の医療者らが同じ疾患の経験を積むことが難しい分野であります。それ故にカンファレンスで情報を共有させていただくことを大事にしており、毎月定例の岡山臨床遺伝カンファレンスを続けております。院外院内の医師やカウンセラーの先生方、時には遺伝子検査に精通した先生方やバイオインフォーマティクスを専門とする先生に加わっていただき、チームカンファレンスをしております。

二つ目の遺伝子異常が関連する疾患、いわゆる多因子遺伝病ですが、外傷や中毒などの不慮の健康被害以外はほとんどの疾患に、遺伝子異常が関与すると言われております。がんや生活習慣病のみならず、薬剤感受性の研究や歯科の研究などにも遺伝子解析が有用であります。これらの研究のサポートと研究の質の向上のため、岡山大学バイオバンクにて臨床検体の保管、品質管理、研究者への提供を行っております。2016年9月からは新しくバイオバンクの品質管理・品質向上を主に担当する新しい職員も加わり、リスクマネジメントや最適な作業手順の見直しを行っております。

がんの遺伝子変異に関しては、2015年12月から腫瘍センター内に設けた抗がん剤適応遺伝子検査外来で次

世代シーケンサー解析による腫瘍関連遺伝子パネル検査を開始しておりますが、受診希望者は徐々に増加し、結果の解釈を検討する多職種カンファレンスも活発に行っております。

研究に関しましては、呼吸器・乳腺内分泌外科、腫瘍センター、バイオバンクと共に「CytoTune®-iPSを用いた抹消血単核球(PBMC)からのiPS細胞誘導方法の有用性に関する研究」を行っております。また、抗がん剤適応遺伝子検査外来を利用いただいた患者様のうち、同意のあった方のNGSデータを集積しており、観察研究中です。

バイオバンクも抗がん剤適応遺伝子検査外来も、臨床遺伝カンファレンスやカウンセリングも、研究も、いずれも多く、広い分野にわたる専門家の方々の御指導や御協力で成り立っております。この場を借りまして心より御礼申し上げます。(母里 記)

## 自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設(光・放射線鹿田施設)のスタッフは小野俊朗施設長(教授)、花房直志准教授、長田直之助教、金野郁雄技術専門員、永松知洋技術専門職員、作埜秀一特別契約職員(技術職員、平成28年12月31日退職)、工藤健一特別契約職員(技術職員)、寺田輝子事務補佐員です。退職した作埜に代わり平成29年3月1日より富永亜希が着任しました。平成28年度後期の行事として、9月16日には当施設を会場に日本アイソトープ協会放射線安全取扱部会中国・四国支部研修会を開催しました。10月13日には特定許可施設として定期検査・定期確認を受検(11月2日合格)しました。また11月30日~12月2日に日本放射線安全管理学会を開催しました。この学会では医歯薬総合研究科の松井秀喜教授らによるBNCTをテーマとしたシンポジウム、小野施設長の大会長講演の他、花房、長田、工藤がポスター発表を行いました。学会最終日には永松、作埜の2名が学術業績賞の技術賞を受賞しています。定例の行事として教育訓練講習会、施設見学会に加えて英語による臨時教育訓練講習会を12月6日に開催しました。平成29年1月27日には自然生命科学研究支援センターコロキウムが開催され、工藤が「モノテルペノイド処理によるマウスリンパ球の放射線抵抗性」の演題で発表しました。平成29年1月よりe-ラーニングによるエックス線業務従事者のための教育訓練を開講しました。(花房 記)

## 動物資源部門

本施設は、昨年度の大規模改修を受け整備した飼育室の手直し及び空調機器の保守及び修理、省エネルギー対策工事をこの期間に集中して実施した。そのため設備面では目立った整備は行われなかった。顕彰関係では、平成28年9月30日付で樫木勝巳教授が、独立行政法人日本学術振興会から科学研究費助成事業の第一段審査(書面審査)において「有意義な審査意見を付した審査委員」として表彰された。さらに、実質的に本施設に所属、研究活動を行っている医歯薬学総合研究科M2の中村綾花が、“ストレッチハンドリングによるラットのストレス軽減効果について”で、10月29日に九州実験動物研究会第12回「山内・半田賞」を受賞した。

施設の教育活動では、平成28年12月13日~21日にかけて例年通り医学部医学科の生物学実習を実施、平成29年1月28日及び29日には、実験用ブタの取り扱い手技(入門)講習会を昨年度に引き続き開催した。さらに、1月18日~23日及び3月15日~23日にかけて、マウス及びラットを用いた取り扱い初心者&初級講習会を学内の研究者及び学生向けに開催した。この講習会は、上述の中村の研究結果を受け、本年度からマウスとラットの取り扱いに不慣れな初心者を対象に開催するウェットハンド講習会である。

人事面では、文科省の「研究強化促進事業」の枠で雇用されていた技術職員(特別契約職員)の磯本祥恵が平成28年11月1日付で国立循環器病研究センター研究推進支援部上級研究員として転出した。後任として平成29年3月16日付で橋本春奈を同技術職員として新たに採用した。(樫木 記)

## 薬剤部

人事関係では、3月31日までに3名の薬剤師が退職した。

業務関係では全病棟への薬剤師配置により、安全な薬物療法の実践を行っている。さらに、外来薬剤業務管理室では、対象診療科を増やし手術・入院患者の持参薬管理・薬剤指導について積極的に実施している。

学会活動として、第55回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会を主催し、約1,800名の参加であった。また、第26回日本医療薬学会年会、第1回日本薬学教育学会大会、第16回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2016 IN 大宮、日本薬学会第137年会等で研究発表を行った。国



際学会ではThe 35th Anniversary Annual meeting of the Korean Society of Health-System Pharmacists、Neuroscience 2015 で発表を行った。また、千堂教授がミャンマーで日本の薬学教育に関して講演した。

学術論文として、2016年度は英文原著論文に11報、和文に9報、総説・解説7報の研究成果を掲載した。

教育関係では、薬学部5年生の長期実務実習が行われ、第Ⅱ期（9月5日～11月18日）16名（岡山大学薬学部）第Ⅲ期（1月10日～3月24日）15名を受け入れた。（北村 記）

## 卒後臨床研修センター 医科研修部門

平成28年度マッチ結果としましては、先進プログラムに42名が、小児科特別プログラムに2名が、産婦人科特別プログラムに2名がマッチし、平成21年度以来のフルマッチとなりました。これも協力型病院との連携によるたすき掛けプログラムの充実によるものと思います。

11月12日（土）には、研修医2年目を中心となり『第2回瀬戸内レジデント』を開催いたしました。研修医による研修医と医学生のためのセミナー・ワークショップであり、42名の参加がありました。

平成29年1月5日の岡山大学病院互礼会では、病院長賞である権の木賞を、研修期間中に米国医師免許試験であるUSMLEの合格を果たし、後輩研修医に勉強のノウハウを教え、種々の後輩教育に貢献した2年目西村 義人 研修医が受賞しました。

各学会では、松尾 逸平 研修医が第55回日本肺癌学会中国・四国支部会で研修医優秀演題賞を、原田 洸 研修医が第13回日本病院総合診療医学会学術総会でベストポスター賞を、伊藤 眞未 研修医が第27回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会で研修医奨励賞を、小柳 太作 研修医が第56回日本呼吸器学会中国・四国地方会で初期研修医セッション優秀演題賞を受賞しました。また、総合内科では原田 洸 研修医が論文発表しております。ご指導頂きました先生方にこの場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

また、10月22日～23日には、卒後臨床研修指導医講習会を開催し、35名の指導医の先生方にご参加頂き、より良い臨床研修を考える2日間になりました。

若手医師がアカデミックに活躍し、屋根瓦式教育で切磋琢磨しながら成長することができるのは、日ごろから熱心にご指導頂き、教育の重要性を肌で感じ取る環境で育ってきた賜物と思います。中四国を中心とした協力型病院や地域医療研修の施設の先生方、またス

タッフの皆さまも、今後とも研修医のご指導をよろしくお願いいたします。（三好 記）

## 運動器知能化システム開発講座

運動器知能化システム開発講座は平成22年に開講し、平成24年10月からは藤原一夫（准教授）、武田 健（助教）、平成26年4月からは秘書の前原亜美、平成28年4月からは藤原智洋（助教）が加わり（武田 健は平成28年3月で退職）、現在の体制となりました。通常業務は整形外科で外来、手術、病棟、研究に携わっています。藤原一夫は臨床面では成人股関節疾患を担当し人工股関節置換術を中心に治療をしております。研究は「コンピュータ支援手術システム、ロボット手術」を中心に行っており、術中支援ナビゲーションシステム、人工関節ロボットの開発を、東京大学工学部、千葉大学整形外科、帝人ナカシマメディカル（株）と連携しすすめております。特に独自開発の人工関節用ナビゲーションシステムは実用化に向け最終段階での精度評価を重ねております。国際学会としては平成28年10月にボストンで開催された第29回 International Society of Technology in Arthroplasty において「The short term result of 3D porous cup with CT-based navigation system」について発表し新素材を使用したナビゲーション併用人工股関節置換術のインプラント設置について議論しました。藤原智洋は骨軟部腫瘍分野を中心に活動しており、臨床研究として「骨軟部腫瘍に対する術中ナビゲーションシステムを用いた手術精度解析」や「超希少軟部肉腫に対するニボルマブの医師主導治験」などに、基礎研究として「骨軟部腫瘍におけるLiquid biopsyの開発」や「RNA干渉技術を用いた肉腫に対する新規治療法の開発」に携わっております。国際学会としては平成28年11月にリスボンで開催されたConnective Tissue Oncology Societyにおいて「Clinical relevance and prognostic significance of cellular/tissue and circulating microRNA dysregulations in patients with osteosarcoma」を発表しました。また、平成29年3月にサンディエゴで開催されるOrthopaedic Research SocietyでBest poster awardおよびORS/OREF Travel Grant In Orthopaedic Research Translationを受賞しました。論文としては平成28年12月に「Overcoming Therapeutic Resistance of Bone Sarcomas: Overview of the Molecular Mechanisms and Therapeutic Targets for Bone Sarcoma Stem Cells」がStem Cells Internationalにpublishされまし



た。同門・同窓の諸先生方には、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。（藤原 記）

## 先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行う目的で開講され、この春で8年目の開始となります。当講座の母体である循環器内科の伊藤教授のご尽力により、今後2年間の継続が決まっております。スタッフは、森田（教授）、西井（講師）で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。臨床研究では西井が中心で行っている心臓植込み型デバイスを用いた多施設共同研究が論文化され、現在、治療介入を行った研究が進行中です。さらにはランダムマイズ試験も構築中です。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の三好（章）先生、杉山（弘）先生、橘（元見）先生など多くの先生方にもご協力いただき、順調に進んでおります。学会では日本心不全学会（10月）、Asian Pacific Heart Rhythm Society（11月）、日本循環器学会（3月）で報告を行い、春以降もHeart Rhythm Society（5月）、European Society of Cardiology（8月）、日本心不整脈心電学会・アジア・太平洋不整脈学会（10月）など国内外の学会で報告予定を予定しており、論文作成も行っています。これからも広く循環器系の臨床・基礎研究に取り組んでまいります。様々な先生方の協力のもと、研究・教育・診療を行っており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。（森田 記）

## 地域医療学講座

地域医療学講座は、平成22年4月、岡山市との連携で開講しました。岡山市立市民病院（以下市民病院）にER型救急医療システムを構築することと、救急医療を担う人材を育成することを目指して研究及び診療活動を行なってまいりました。

開講当初、平成26年度までの予定でしたが、2年間延長していただき、平成27年の市民病院の移転に伴い拡充されたERで、1次、2次救急を中心に、「断らない救急」を目指して診療を行いました。市民病院全体の協力体制のもと、移転後は95%程度の応需率を保つことができるようになりました。

搬送依頼の時点で断る症例の中には、その病態に対してかかりつけの病院がある患者や、重症度や専門性

において市民病院で対応できない可能性の高い患者なども含まれます。患者の利益を考えた結果、あえてお断りさせていただくこともあります。

人材育成については、当講座の開講期間中に、後期研修医として直接救急医を育てることはできませんでしたが、しかし、研修医や岡山大学の臨床実習の学生に救急初療を学んでもらうことで、救急に理解のある医師を増やすことを目指して、教育にあたってまいりました。

平成29年3月をもちまして、当講座は終了となりました。皆様には色々のご協力いただき、ありがとうございました。（芝 記）

## 地域医療人材育成講座

地域医療人材育成講座が設立されて8年目を迎えます。平成28年度の活動について報告します。

本講座は地域医療教育を最大のミッションとしています。地域医療実習に関するカリキュラムの改編が完了し、1年生に早期地域医療体験実習、2～3年生にかけて地域医療体験実習、5～6年生に選択性臨床実習を行っています。低学年の実習では、臨床医学の知識が乏しい時期だからこそその感性で実習に臨み、望ましい医療人のあり方、医療が地域に果たす役割などを学んでいます。また、昨年に引き続き、指導医の先生方を対象として、2月7日にFaculty Developmentを開催しました。金沢医科大学医学教育学の高村先生をお招きし、「私達は医学生に何をどのように地域で教えることができるのか？」と題して講演をいただいた後に、グループディスカッションを行い、熱く語り合い、アイデアを共有しました。

新しい専門医制度は一旦延期となりましたが、この春から地域枠卒業医師の一期生のうち2名が地域勤務を開始しました。制度を取り巻く状況に注視しながら、継続的なキャリア形成支援を行っていくことが重要です。岡山県地域医療支援センター、岡山県医療推進課と連携し、地域貢献と人材育成の両立を目指して、継続的に支援していきます。文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業に採択された「地域を支え、地域を科学する総合診療医の育成」のプロジェクトとも協働し、地域で求められる総合診療医の育成に努めています。

今後も地域医療を担う医師の育成とより良い地域医療の推進のため努力して参りますので、引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。（岩瀬 記）

## CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、平成23年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座が5年の設置期間を終えた後に、それまでの仕事を引き継ぎ、かつ、さらに発展させる目的で、平成28年11月から新たに3年間の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁准教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科、平成28年11月より講師に昇進）より構成されています。

内田は日本慢性腎臓病対策協議会（J-CKDI）の幹事、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを平成29年3月に開催しました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市や美作市などでの特定健診フォローアップ事業の効果解析を各自治体と共同で実施しています。平成29年2月に美作市で一般住民向けの講演会を開催しました。平成29年3月には開始後10年目を迎える毎年恒例となった世界腎臓デーのイベントを開催しました。

研究活動ですが、臨床研究としましてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyo 3C study）を継続しております。参加施設の先生方におかれましては、最大で平成32年までのfollow upのご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。基礎研究としまして、内田はアンジオテンシンIIが心・腎・血管へ及ぼす影響の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて成果を報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。（内田 記）

## 小児急性疾患学講座

小児急性疾患学講座は、平成25年4月開講以来、広島県福山地区周辺の小児二次救急医療体制の再構築に向けて、福山市と岡山大学において活動を続けております。平成26年11月から池田政憲が講座教授に就任し、現在は池田・藤井2名の体制で、さらに精力的に活動

を進めております。

福山市においては、市内中核病院における平日診療援助や二次輪番救急担当として診療活動を行っており、開講以降二次輪番の空白日は消失しております。平成27年度からは市内4病院や福山市の協力のもと、土曜日日中の二次輪番体制の整備を行ない、24時間365日対応可能な小児の救急車対応・二次医療体制が出来上がりました。今後はさらに安定的な小児二次救急医療体制を構築するため、小児救急拠点病院の設置、さらには総合周産母子医療センターの設置に向けて、計画を進めております。

院外活動として、福山市周辺の小学校や幼稚園を訪問して、小児救急対応研修会を3年間でのべ54校で開催しました。多くの教職員に参加して頂き、大変好評を頂いております。また市民公開講座も年2回のペースで開催しており、第6回市民講座では小児医科学岡田あゆみ准教授に小児の発達障害について御講演を頂きました。当日は福山市保健所、消防局、子育て支援のNPO法人などの協力を頂き、盛況な会となりました。他にも、福山医療センター市民講座や岡山県小児保健協会公開シンポジウムなどでの講演、また若手研修医やコメディカル向けの講習会なども随時開催しております。

岡山大学においては、それぞれの専門領域であるアレルギー、感染症、消化器の診療に加え、医学生、研修医への小児診療や小児救急の講義や実習を行っております。

平成28年度は講座4年目となりますので、活動をさらに活発にさせていくとともに、今まで行ってきた活動・調査の集大成に向けて一層努力してまいりたいと存じます。同門、同窓の諸先生方には、今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

（藤井 記）

## 救急外傷治療学講座

救急外傷治療学講座はおかげさまで開講3年目を迎えることができました。これもひとえにみなさま方のご協力の賜物と厚く御礼申し上げます。本講座の母体である社会医療法人雪の聖母会 聖マリア病院の年間救急車受け入れ台数は全国8位で、西日本最大クラスの救急病院です。救急車受け入れ台数実績は平成26年1月～12月：9,320台、平成27年1月～12月：10,051台、平成28年1月～12月：11,000台を突破いたしました。平成28年4月より岡山大学病院の研修協定病院として提携し、すでに3名の初期研修医が3ヶ月間の多忙な



救急科研修を修了しました。今年度はさらに2名の研修医が聖マリア病院救急センターを巣立ち、合わせて5名が過酷な研修を終えることとなります。聖マリア病院救急センターでの初期研修は他施設の3倍以上の経験数を誇るのみではなく、多診療科専門医による充実した診療内容を目の当たりにできることが最大の魅力です。さらに一学年19名の研修医総勢38名で屋根瓦方式の研修を実施しており、岡山大学病院の初期研修医もその一員となり同等の研修を受けることができます。この3ヶ月間の研修終了時には大きな自信を持って岡山に戻ることができることを期待しています。

救急外傷治療学講座のもう一つの使命は、多科連携による救急集中治療実施能力を向上させるシステム構築にあります。聖マリア病院でシステムの構築を行い、本学にフィードバックさせることが問われていると考えています。救急センターの施設間によってその機動能力には差異があるからこそ、どの施設でも最大能力を発揮できるようなプラン構築を計画できれば、より救命効果を発揮できるようになると考えます。

救急外傷治療を円滑に行うには、集中した指揮系統のもとに治療方針を瞬時に決定することが必要です。そのため救急専門医の能力が何よりも問われます。救急医のコントローラーとしての能力を高めることにより、より良い救急医療を行ってまいりたいと考えています。また診療各科のみなさまにご理解を得られるよう、より一層鋭意努力して参る所存です。

学内の諸先生方に於かれましては、今後ともご指導ご鞭撻の程なにとぞよろしくお願い申し上げます。

(鶴川 記)

## 高齢社会医療・介護機器研究推進講座

当寄付講座は、在宅における遠隔リアルタイムモニタリングに関する研究をすすめています。平成28年度後半の主な研究活動を報告いたします。

遠隔モニタリングに関して、笠原、坂野で講演を行いました。1) HCIF (ヘルスケア・イノベーション・フォーラム) 第10回総会「ネットワーク対応型生体情報監視システム「メディカルおだやかタイム」に関して」坂野 (2016/11/18、高松市) 2) 医療連携組織力向上セミナー in 岡山「在宅医療・在宅看取りにおける遠隔モニタリングの活用」笠原 (2017/3/28、岡山市)。

メディア掲載に関して、笠原教授の遠隔診療の様子がNHKワールドの国際放送にて英語で放送されました。「Medical Frontiers」離れた場所から命を守る～

遠隔医療最前線～ (2016/9/13放送)。さらに、ファイザーとの共同研究について、新聞記事が掲載されました。「化学工業日報 ファイザー デジタルヘルスで新事業開拓 産学連携モデル実証 遠隔モニタリングなど」(2016/8/30朝刊4面)。

また、文献として「ちゅうごく産業創造センター会報No.111」に笠原教授の寄稿「生体モニタリング機器を用いた遠隔医療システムの確立」が発表されました(2016/12/15)。

そのほか、学会発表や機器展示発表については、下記の通りです。日本遠隔医療学会JTТАスプリングカンファレンス2016. (東京、御茶ノ水) 2016/2/12-13 (講演、笠原)・第20回日本遠隔医療学会学術集会(米子) 2016/10/15-16 (口演、笠原)・第23回岡山県保健福祉学会(岡山) 2017/1/23 (口演、坂野)・岡山大学知恵の見本市2016～未来をみつめて～岡山大学主催 2016/11/11 (機器展示、坂野)。

当講座は、引き続き笠原真悟(教授)、坂野紀子(講師)、松山美穂(事務補佐員)で活動してまいりますので、同門・同窓の諸先生方には今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。(坂野 記)

## 医療資源開発・学習支援環境デザイン学講座

本講座は、医療資源(医療人材をはじめとする医療機器、医療材料、医療教材、医療施設など、医療をかたちづくる全て)の更なる進化を目的として、「大人の学び」という観点での研究開発をミッションとしています。

余り聞き慣れない方向性の講座ではないかと思えます。

そのため講座の活動範囲も日本をはじめ欧米・東南アジアと国内外に広く分布し、活動内容も医学生への教育プログラム実施や各種講演に始まり、医療系・教育系企業との共同開発事業まで多岐に渡っています。

今後も学内外の皆様からの組織開発、人材開発、製品開発またはそれらの改善等に関するご相談がありましたら、専任職員である伊野教授並びに山下技術職員が真摯にご対応いたしますので、お気軽にご連絡いただければと思います。(山下 記)

## 陽子線治療学講座

陽子線治療の外来を平成28年1月4日より開設させていただきます。勝井、井原と放射線医学の片山が診療にあたっています。各診療科・センターの専門家の先生



方と協力し最適な放射線治療を提供してまいります。引き続き何卒お願い申し上げます。

津山中央病院での陽子線治療は平成28年4月28日に開始、7月1日から先進医療適応となりました。平成28年7月時点で前立腺癌、肝臓癌、早期肺癌、頭頸部癌（非扁平上皮癌）に対して開始いたしました。以後、小児腫瘍、肺や肝臓への転移性腫瘍に対しても開始しています。総合病院のメリットを活かして平成29年2月時点で進行肺癌、胆管癌、膵癌、食道癌への化学陽子線治療も可能となっています。対象疾患など詳細は、津山中央病院ホームページに掲載してまいります。

先進医療では陽子線治療の技術料として288.3万円、その他の入院・薬剤・検査等は保険が適応される仕組みです。基本的に先進医療の枠組みで運用されますが、平成28年4月に陽子線治療は小児腫瘍、炭素イオン線治療は骨軟部腫瘍に対して保険が適応されました。

平成28年8月以後、岡山済生会総合病院、岡山市立市民病院、福山医療センター、高知医療センター、松江市立病院、香川労災病院、米子医療センター、呉共済病院、川崎医科大学総合医療センター、高松赤十字病院にて陽子線治療に関する説明会を開催していただきました。その他にも多数の研究会等にお声がけいただき、同窓の先生方にはこの場をお借りして深謝申し上げます。

陽子線治療を皆様には是非ご利用いただき、臨床、研究のお役に立てればと考えております。今後とも先生方のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。（勝井 記）

### 三朝地域医療支援寄付講座

2016年3月から2017年2月までの報告をさせていただきます。

昨年10月21日に、鳥取県中部地震が発生し、三朝町も屋根の瓦が落ちるなどかなりの被害が出ました。私が現在診療している三朝温泉病院は、建物にひび割れ等できたものの、幸い、診療には大きな支障なく継続できております。先生方にはご心配頂き誠に有難うございました。

地震の影響が心配されました11月12日の“高齢者の薬物療法について”の市民公開講座は、関係者の方々のご厚意により、東京大学秋下雅弘教授（老年医学）をお招きし、無事開催することができました。

学会関係では5月に山成が日本温泉気候物理医学会総会で発表を行っております。

人事面では、1月より勤務しておりました山成俊夫

医師が6月をもって退職し腎免疫内分泌代謝内科学教室へ帰局、7月からは同医局より渡辺晴樹医師が半年間（12月まで）ご勤務されました。1月より循環器内科学教室より更科俊洋医師が赴任、診療にあたっています。

この一年、この講座が軌道によるように、ご協力いただきました諸先生方には、心より感謝申し上げます。

そして、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（芦田 記）

### 血液浄化療法人材育成システム開発学講座

本寄付講座は平成28年1月に開講し、腎不全、特に血液透析を主体とする血液浄化療法に関する教育、研究等に力を入れております。杉山 斉教授は、慢性腎臓病（CKD）や腎不全治療に関する研究・教育・臨床に精力的に取り組んでおり、研究は基礎研究から疫学調査、臨床研究に至るまで幅広く網羅しております。腎不全治療の更なる向上と地域連携による人材育成システムの開発を目指しております。

平成28年9月に主催した岡山アクセスセミナー2016では小倉記念病院 腎臓内科 福岡晃輔先生に一般講演を、重井医学研究所附属病院 外科 櫻間教文先生、腎不全センター幸町記念病院 外科 松田浩明先生に教育講演をして頂きました。特別講演では静岡県立総合病院 透析アクセスセンター長 村上雅章先生より内科医が作成するバスキュラーアクセスとアクセス地域連携について非常に奥深く、実践的な内容の講演をして頂きました。また、平成29年1月に開催支援した岡山HIV透析医療講習会では、当院看護部・感染制御部 宮村純子副部長より感染講習を、特別講演では国立国際医療研究センター病院 腎臓内科科長 日ノ下文彦先生からHIV感染症と透析医療について、本邦の現況・治療・診療体制構築など、幅広い内容の講演をして頂き、理解を深めました。

学会等の活動では、杉山教授が平成28年10月に第46回日本腎臓学会西部学術大会よくわかるシリーズ『J-RBR（日本腎生検レジストリー）レジストリー研究 Up To Date』を発表し、8月に三豊観音寺地区ファブリー病セミナー（観音寺）、10月に広島東部地区高尿酸血症フォーラム（広島）、11月に尾道腎疾患研究会（尾道）にて特別講演を行いました。大西は9月に岡山ADPKDセミナー、平成29年2月に岡山県CKD・CVD対策専門会議の事業として慢性腎臓病（CKD）研修会にて講演を行いました。

今後も腎不全、血液浄化療法の研究、教育や診療を

通じて人材育成システム開発に尽力して参りたい所存です。本年9月には昨年に引き続き岡山アクセスセミナー2017を主催する予定です。

本講座は岡山県医師会透析医部会を中心に、透析関連施設よりご支援を頂いております。末筆となりましたが、関連病院における先生方には、平素よりお力添え頂いておりますことを厚く御礼申し上げます。引き続き御指導御高配を賜りますよう心よりお願い申し上げます。(大西 記)

## 運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に対する治療法の研究・開発を行い、国内の運動器外傷に関する教育を牽引することを目的として2016年4月に開設されました。スタッフは野田知之(准教授)、中原龍一(助教)、増田鈴子(秘書)の計3名です。

基礎研究では「整形外科インプラントのMRI発熱予測システムの開発」、「脛骨遠位端骨折逆行性髄内釘の解剖屍体を用いたフィッティング検討」、免疫病理・松川教授との共同研究で「抗菌性骨接合材」にかかわる研究などすすめており、10月の日本整形外科学会基礎学術集会では野田が整形外科インプラントのMRI発熱予測の研究成果につき報告しました。

臨床面では救急科と連携しての多発外傷・高エネルギー外傷に関連した重度整形外傷に対する専門的・集学的治療を急性期から一貫して提供、さらには他院で対応困難な骨盤骨折・寛骨臼骨折など難治性骨折に対する手術治療を行っております。

国内外の学会活動も精力的に行っており、12月には野田がスイスのダヴォスにて開催された骨折治療の祭典ともいえるAO courseに招聘され講義ならびにfacultyを務めました。教育活動として本年度も、大塚教授をはじめとする人体構成学教室のご協力による臨床解剖実習を3月に開催予定としております。

同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。(野田 記)

## 検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。今田昌秀主任と鳥越佳子主任が平成29年3月で早期退職されました。再雇用の平尾早苗さんも退職になります。また、石倉寛子主任と行司元子さんが定年退職になりますが、引き続き再雇用になります。業務上では特に大きなイベントはありませんでした。今年5

月に新総合診療棟へ検査部が移転の予定になっております。血液検査室と生理検査室が2階、生化学検査室が3階、微生物検査室が5階、遺伝子検査室が6階と場所があちこちに点々とすることになりましたが、新しい場所でも診療貢献に努力する所存です。教育関係では保健学科学生および倉敷芸術科学大学学生の臨地実習および本学医学科学生のポリクリを受け入れました。資格関係では日本臨床神経生理学会認定技術師認定証脳波分野 筋電図・神経伝導分野が1名、認定フローサイトメトリー技術者認定が1名、認定臨床微生物検査技師が1名、JAB審査技術研修Ⅱ「修了」が1名、認定および資格を取得しました。研究・学会活動では、国際学会で3演題、全国学会で13演題、地方学会で7演題発表しました。また、邦文論文4編が掲載されました。その他にも雑誌や臨床検査技師教本などの執筆もありました。表彰関係では、渡辺修久主任が9月に第64回日本心臓病学会学術集会で優秀演題セッション(メディカルスタッフ部門)最優秀賞と11月に岡山大学永年勤続表彰、小郷博昭主任が10月に病院優良職員表彰、石倉寛子主任が11月に医学教育等関係業務功労者表彰を受賞されました。(岡田 記)

## 集中治療部

2016年の総括と致しまして、手術件数(約10000件)、麻酔科管理症例数(約7000例)の増加に合わせ、術後の重症患者のICU入室数も約1900人にまで増加致しました。しかし、死亡率1%、平均ICU滞在日数4日と例年通りの好成績を維持することができました。ひとえに各診療科の先生方をはじめ、看護師、コメディカルスタッフの皆様のご理解、ご協力に感謝申し上げます。

日常業務では多職種を交えたラウンドや治療など、物事を多角的にとらえ、チームとして管理に当たっていくシステムが定着してきております。さらに患者の層別化、それぞれに応じた治療計画などを充実させると同時に、unitでのスタッフへの教育、臨床経験からのフィードバックなどを強化していくべく努力して参ります。

近々、新専門医制度の導入となります。集中治療の領域も同様で、より専門性・専従性を求められることとなります。当院麻酔科の特徴である術前から術後まで通して診ていく、周術期管理を担う部署としてICU業務の質をこれまで以上に向上させていく所存です。

(清水 記)

## 循環器疾患集中治療部

循環器疾患集中治療部は心疾患術後の集中管理を行うユニットで、これまでの集中治療室の概念を破る高度な医療設備とスペースを備えています。これまでと同様に循環器部門、特に重症心不全患者と心臓血管外科に全国から受診されるハイリスクな心疾患患者の術前・術後管理を担当する部門として、麻酔科・心臓血管外科・循環器内科・小児循環器科など多くの診療部門が共同して、高度な集中管理を行っています。成人先天性心疾患センターの開設以来、成人期の先天性心疾患患者の再手術の症例数の占める割合が増加していています。

心房中隔欠損症や動脈管開存症のカテーテル治療はこれまでに1000例を越す治療を実施し、国内トップの症例数と実績をあげています。全国各地から患者さんの紹介をいただいています。さらに同様の治療を行う各地の大学病院へ治療技術指導を行っています。治療実績は海外でも高く評価されており、数々の国際学会から招請を受けています。2016年6月からは卵円孔閉鎖を伴う片頭痛患者に対し、卵円孔のカテーテル閉鎖術を自由診療として開始しました。新聞・テレビに取り上げられた影響でこの治療に対する反響は非常に大きく、全国から受診者が集まっています。今後、治療の有効性・安全性についてきちんと検証していきたいと思っています。(赤木 記)

## 総合リハビリテーション部

千田益生教授のもと、PT25名、OT7名、ST3名、看護師1名で日常業務をこなしております。医師は整形外科より、交代でリハビリテーション（以下、リハ）の診療業務をリハ医とともにを行っています。

学会は日本リハ医学会、日本運動器科学会、中国四国リハ研究会、日本PT学会、日本OT学会、日本食道学会などスタッフ一同、慣れないながら発表を行っています。療法士の発表は、様々な分野にわたり、多科の先生方にご指導いただいております、大変感謝いたしております。

教育面では、医学科5年生の1週間の臨床実習を行っています。色々な職種の内容を知ってもらうために、月・金曜はリハ医、水曜は理学療法士、木曜は作業療法士、火曜は言語聴覚士が担当しています。リハを経験することで、将来主治医になった時、リハ依頼をする時の役に立てばと思っています。リハスタッフ総勢で実習を楽しいものにしようと頑張っています。

リハ単独の実習は残念ながら3月で終了となります。新5年生からは新体制で、整形外科の実習の中で引き続き臨床実習に携わっていく予定です。

昨年中に篠原PT、今田PTが退職し、3月に坂口OTと難波STが退職します。4月は、新しいスタッフが4名入職する予定です。スタッフ同士でいつも連絡も密にとるよう心がけておりますが、行き届かない点も多々あると思います。お気づきの点がございましたら、お知らせいただくと幸いです。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(堅山 記)

## 病理診断科・病理部

柳井広之教授、助教2名（田中健大、田中顕之）に変更はありませんが、この春に都地友紘先生を助教に迎えることができ、教授1名助教3名の体制となりました。今まで科を支えてくださった大森昌子先生が異動され、大学院生の能島舞先生、西田賢治先生、表梨華先生に代わって柴田嶺先生、小野早和子先生が医員として新たに加わってくれました。昨年の10月、11月にミャンマーのDr. Nan Cho New MonとDr. Khin Kant Kaw Ooの2名が病理診断科で研修を行いました。2月17日に第6回岡山県がん病理実務者研修会が開催され、関西医科大学の蔦幸治先生をお招きして「肺腫瘍 新WHO分類とTNM」のタイトルの講演をしていただきました。医療の著しい進歩とともに病理診断の果たす役割というものが少しずつ変わってきていると感じています。少人数で力を合わせて頑張っていると思いますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。(田中健 記)

## 輸血部

人事面では、佐伯恭昌医師、谷勝真医師、中村真医師の3名が医員として、輸血部業務に尽力してくれています。検査技師、看護師については不動のメンバーで、信頼される輸血部門を目標に安定した業務を行っています。

学会活動では、9月にJunko Fukutake Hallで輸血部前副部長（現・岡山県赤十字血液センター所長）の池田和真先生を会長に開催された第61回日本輸血・細胞治療学会中国四国支部例会において、藤井敬子医師が「Spectra Optiaを用いた骨髄濃縮－小児科、低体重児における骨髄処理－」、浅野尚美技師が「シミュレーションを用いた輸血当直業務トレーニング」を登



表しました。また、藤井伸治は「科学的根拠に基づく輸血ガイドライン」における血小板ガイドラインの作成に参画しています。今後も継続的に情報発信を行っていきたくと考えています。

さて、本年度の大きな目標である「アルブミン製剤の輸血部門における一括管理」に関しては、新中央診療棟への移転後に開始できるよう、各部署の協力を頂きながら準備を進めております。電子カルテからのオーダー方法などに変更点があり、開始後すぐは何かとご不便をおかけすると思っておりますが、何卒ご理解、ご協力のほどお願い申し上げます。

今後も、輸血部門の最大の目標である安全な輸血医療の推進に加え、より適正で効果的な輸血療法に貢献できるようスタッフ一同努力して参りますので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。（藤井 記）

## 血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田淳部長（腎・免疫・内分泌代謝内科学教授）のもと、スタッフ医師4名（木野村賢、田邊克幸、山成俊夫〔腎・免疫・内分泌代謝内科学〕、大西章史〔血液浄化療法人材育成システム開発学〕）、医員5名（益田加奈、田中景子、森下美智子、谷村智史、垣尾勇樹〔腎・免疫・内分泌代謝内科学〕）で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

人事面では、12月より医員が荒田夕佳から森下美智子へ交代となっております。

血液浄化療法部は、関連病院の先生方から多数の透析患者のご紹介を頂いており、平成28年は、血液浄化療法部での延べ治療件数（アフエレーシスを含む）は2007件と、初めて2000件を突破いたしました。血液透析の治療件数の増加とともに、当院のIBDセンターの開設に伴って白血球吸着除去療法の件数が特に増加致しました。今後も腎移植に関連した血漿交換療法などのアフエレーシスの治療件数の増加が予想されます。平成29年5月に、当部は新総合診療棟3階へ移転する予定となっております。移転後は現在の10床から15床へ増床し、更に多くの患者に対応できるようになります。また、現在離れているCAPD外来も同一フロアに移転し、より効率的な運営が可能となります。今後も当院における透析患者への安全で確実な血液透析を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生

方、関連病院の先生方におかれましては透析患者のご紹介をお願い申し上げます。（田邊 記）

## 高度救命救急センター

高度救命救急センターは通常の救命救急センターの業務に加えて、急性中毒、四肢切断、重症外傷、広範囲熱傷に常時対応可能とする施設とされています。当センターでは加えて重篤呼吸障害に対する膜型人工肺の使用や小児重篤症例など、他施設で治療に難渋する症例にも力を注いでいます。また、専門診療スタッフを脳神経外科、整形外科、口腔外科より高度救命救急センターに派遣していただいています。脳神経外科においては多発外傷に伴う重症頭部外傷で迅速に対応を、整形外科は非常に精度の高い外傷手術を24時間体制で対応を、さらに口腔外科には顔面外傷から口腔内ケアまで集中治療の質の向上に貢献していただいています。また、大学という特色を生かした専門診療科の先生がたへの紹介にも迅速に対応していただき、中四国地方において非常に質の高い高度救命救急センター業務を遂行できていると自負しています。今年度より、新センター長に中尾が着任しました。もうすぐ一年が経過しようとしていますが、積極的に活動し他専門診療科の垣根を越えて多くの患者の救命をしています。患者数は既に前年度を上回っており、岡山県の救急の要としての役割を果たしています。

病院前診療では岡山市の救急隊への連携と教育に尽力を注いでいます。病院間連携では重症患者のご相談に積極的に対応させていただきたいと考えています。病院後、つまり出口問題に関しては、急性期を脱した患者のスムーズな受け渡しを実現するため、紹介元病院への転医や後方病院の協力が不可欠になります。今年度は前年度以上に協力を得て、より多くの重篤患者の診療に当たることができました。

4月からは新たに医局員が加わります。高度救命救急センターという社会的責任を全うすべく救急センタースタッフ一同、さらに精進していきます。この場をかりて、平素よりご協力頂いている関係各科の皆様方、連携病院の皆様方にお礼申し上げます。

（塚原 記）

## 周産母子センター

周産母子センターは2008年の開設から9年が経過し、岡山県内の地域周産期母子医療センターとして、県内外から多数の症例をご紹介いただいております。

合併症妊娠や習慣流産・不育症などのハイリスク妊娠、先天性心疾患をはじめとする胎児異常症例、周産期合併症や分娩時大出血などの産科救急などに積極的に対応しているのが当院の特色です。

当センターには産科部門とNICU部門があり、平松祐司産科婦人科教授がセンター長、鎌田泰彦が副センター長、産科婦人科の早田 桂が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、周産期および生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医および後期研修医にて運営されております。NICU部門は、小児科の専従医を中心に運営されておりますが、産科婦人科の谷 和祐が兵庫県立こども病院での研修を終え、新たにNICU配属となりました。さらに当センターでは、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、麻酔科、高度救命救急センターなど多くの科と協調して診療に従事しております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、新生児集中治療室（NICU）6床、重症新生児病床12床。4階西病棟に産科（母体）5床がそれぞれ配置されています。妊娠25週以降であれば、胎児の推定体重にかかわらず受け入れておりますので是非ともご相談いただければと存じます。

無侵襲的出生前遺伝学的検査（non-invasive prenatal genetic test; NIPT）すなわち母体血胎児染色体検査が開始されて3年半が経過いたしました。おかげさまでこれまでに約700件の患者さんをご紹介いただいております。遺伝カウンセリングを含めた慎重な対応が求められる本法でございますが、適切な運用ができているものと思われまます。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設として専門医の育成にも力を注いでおりますので、今後も引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。（鎌田 記）

## 腫瘍センター

腫瘍センターは、田端センター長と久保の腫瘍内科医2人体制に変わりはありませんが、他部署の方々に甚大なるご協力を賜りながら、患者さんに満足度の高いがん治療を受けて頂けるよう、日々取り組んでおります。

腫瘍センター外来治療室では、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など多くのスタッフが、患者さんが安心・安全・確実に化学療法を受けられるよう努めております。免疫チェックポイント

阻害薬をはじめとした新規抗がん剤の登場もあり、外来化学療法患者数は年々増加傾向にあります（約40人/日）。また、分子標的薬をはじめとした経口抗がん剤の種類も増え、がん治療における外来診療の占める割合は増々大きくなっています。外来でがん治療を受けられる患者数は今後も増加することが予想されますが、主治医だけの対応はなかなか困難です。腫瘍センターでは、主治医と緩和ケアチームや歯科、MSWとの橋渡しや、がん領域の専門看護師や認定看護師、薬剤師による「がん看護外来」、「内服抗がん剤サポート外来」との連携など、他職種によるきめ細やかなサポートができるよう体制づくりを行っています。

また、近年求められている個別化医療に対応するかたちで平成27年12月に開設いたしました「抗がん剤適応遺伝子検査外来」ですが、平成28年11月のNHKスペシャルでPrecision Medicineの特集が放送されて以来、問い合わせや受診が増えております。自費診療ではありますが、希少がんや標準治療が無効となった患者さんの腫瘍細胞における遺伝子異常を網羅的に解析し、個別化治療の可能性を探索するもので、臨床遺伝子医療学講座を含めた専門家チームで解析結果を検討し、アクセス可能な治験を含めた治療薬の可能性についてアドバイスをしています。平成29年2月末までに22件の受診があり、今後さらに充実させていきたいと思っております。なお、「抗がん剤適応遺伝子検査外来」に限らず、希少がんや治療抵抗性となった患者さんの化学療法の依頼、相談なども引き続きお受けしておりますので、是非ご紹介頂けましたら幸いです。

今後は、人口の高齢化に伴う高齢者のがん治療（Geriatric Oncology）も重要な課題であると考えます。現在、老年医学講座 光延文裕教授と連携して、老年腫瘍部門の立ち上げに向けて準備中です。腫瘍センターでは、今後も診療科・職種の枠を超えて質の高いがんのチーム医療を実践できる場、さらには地域で求められるがん医療に対応できる人材育成のための研修の場の提供を目指して活動を充実させていく所存であります。同窓の先生方におかれましては、今後もご支援とご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。（久保 記）

## 内分泌センター

内分泌センターでは内科・外科Cフロアおよび西7階病棟にて内分泌内科・外科・コメディカルが一丸となって全身多臓器に及ぶ多様な内分泌疾患に対して関連各科と緊密に連携しながら日々診療を行っております。



す。中四国を中心に全国の同窓の先生方から患者様をご紹介頂き、内分泌センターカンファレンス等にて各専門の立場から活発な意見交換を行いつつ、1症例毎に多彩な病態を呈する内分泌疾患に対してチームで取り組むとともに、専門医育成や学生・研修医教育にも尽力しております。

2016年9月には内分泌センター開設十周年を迎えることができました。同窓の先生方におかれましてはこれまで多大なご指導・ご協力を頂き改めて感謝申し上げます。開設十周年記念講演会「Endo Talk ～岡山内分泌の集い～」を2017年1月28日に開催し多数の先生方にご参加頂き盛会裏に終えることができました。

2016年度下半期の学会活動として、日本内分泌学会臨床内分泌代謝Update・日本甲状腺学会・日本神経内分泌学会・日本生殖内分泌学会・間脳下垂体副腎系研究会・間脳下垂体腫瘍学会・日本乳癌学会中国地方会・内分泌学会中国地方会・中国四国甲状腺外科研究会・岡山内分泌同好会など、内分泌代謝領域の主要な学会・研究会に参加し、数多くの学会発表を行いました。

最後になりましたが今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

(稲垣 記)

## 臓器移植医療センター

岡山大学病院での臓器移植を集中的に管理・運営することを目的として設立された臓器移植センターですが、大藤剛宏センター長・八木孝仁副センター長の下、当院での移植医療を円滑に遂行すべく日々業務にあたっております。

活動報告としましては、腎移植医療への貢献が評価されて腎移植コーディネーター(山下・有森)が病院長賞・楷の木賞を受賞しました。当院での泌尿器科による腎移植開始から6年を経過して症例数は70例を超えておりますが、その成績は1年生着率100%と良好です。その他、心移植・肝移植・肺移植のチームも同様に高いレベルでの活動を続けており、今後もその維持に尽力していきたいと考えております。

また、2017年2月に麻酔科、呼吸器外科を含む肺移植チームが首都ハノイへ赴き、ベトナム第1例目となる肺移植を成功させました。スリランカにおける第1例目肺移植成功の実績を踏まえたアジア地域での当院の声誉をうけてベトナム軍医大学病院からオファーがあり、先方の関係各部署の医療従事者が当院へ短期研修を繰り返して双方で入念な準備を行った後に実現し

たものです。今後も引き続き国際的な貢献を行うことが当臓器移植医療センターの存在意義の一つであると考えております。

臓器移植医療センターとして先進的な医療を提供できるのも、各診療科のチーム力のみならず、病院全体での御協力の賜物であると考えております。今後も本邦屈指の臓器移植医療施設としての自負を持ちつつ、移植医療の発展に寄与するよう精力的に活動して参る所存ですので、引き続き同窓会の諸先生方の御指導、御支援を何卒宜しくお願い致します。(大谷 記)

## 超音波診断センター

超音波診断センターは、2011年4月に開設され今年で7年目を迎えました。

大塚文男センター長(総合内科学教授)、中村進一郎副センター長(消化器・肝臓内科助教)、2016年12月より新たに就任された、高谷陽一助教(循環器内科)の下、診療に役立てる検査を心がけて日々業務に取り組んでおります。

人事面では超音波診断センター開設当初より、長年ご活躍された麻植浩樹助教(循環器内科)が退職されました。麻植浩樹助教の指導の下これまでに、多くの研究・学会発表等を活発に行っており、膨大な業績が蓄積されています。現在も意志を受け継ぎ日々、業務に奮闘しています。

研究・教育面におきましては日本心エコー図学会、日本超音波医学会など国内学会のみならず、ESC(ヨーロッパ心臓病学会)など海外での発表も行っています。2016年9月には日本心臓病学会学術集会において最優秀賞を、世界医学検査学会においてポスター賞を2名の技師がそれぞれ受賞しました。

教育面では、2名の技師が日本超音波学会認定超音波検査士の資格の取得を目指しております(心臓領域)。

開設当初に比較して、他領域にわたる検査(循環器、消化器、血管、乳腺、甲状腺、関節など)を行っており、患者様のために質の高い検査を行えるよう一同励んでおります。(竹内 記)

## 低侵襲治療センター

低侵襲治療センターでは県下の低侵襲鏡視下手術の推進とそのレベル向上を目的として、センター長の藤原俊義教授のもと兼任・専任スタッフが、各分野での普及と、手技、技能の向上に努めております。あらゆ



る外科手術が低侵襲化に進む中、鏡視下手術は従来の手術とは異なる技能を要する一方で、安全な普及が求められております。当センターでは日常臨床での手術指導、県内外病院への技術支援、講演等の活動に加え、研修医、修練医、上級医師向けの教育セミナー、研修を定期開催してまいりましたが、現在、岡山県は中国四国では最も多くの内視鏡外科技術認定医を擁する県となっております。当院の診療では外科手術における鏡視下手術の割合は一層高くなっており、教育面では当センタースタッフの近藤助教、吉田助教は、解剖学との連携でカダバーによる鏡視下手術研修プログラムの開発にも取り組み、浅野助教中心となって学生、研修医らへの鏡視下手術手技の指導も行っております。新たな取り組みとして、腎臓・糖尿病・内分泌内科が推進する肥満症治療の外科治療としての腹腔鏡下スリーブ状胃切除術を導入しました。診療科の垣根を越え、高度な最先端の鏡視下手術が安全に普及されるよう教育、研究に尽力して参ります。なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(香川 記)

## 糖尿病センター

当センターでは、「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局業務に加えて、平成26年度からは「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ（日本糖尿病療養指導士）チーム岡山」の事務局業務も担当しております。また、岡山大学病院における糖尿病診療では、各科横断的な切れ目のない医療を患者様に提供するための院内連携体制の確立、多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、SAP（Sensor-augmented pump）療法等の先進糖尿病治療の導入に取り組んでいます。特に特殊性の高い治療として、消化管外科、糖尿病内科、周術期管理センター（PERIO）をはじめとした多部門の協力・連携の下、肥満外科手術（腹腔鏡下スリーブ状胃切除術）が開始されています。本手術は全国でも限られた施設でのみ行われていますが、今後、肥満症治療において当院が中心的な役割を果たせるよう、引き続き取り組んでまいります。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内における糖尿病医療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めており、平成26年度に新設された「おかやま糖尿病サポーター制度」では3年間で約1,400名を認定し、認定後も独自のスキルアッププログラムにより知識とスキルの維持・向上を図っています。さらに今年度は、超高齢社

会を鑑み、訪問看護ステーションや介護老人保健施設のメディカルスタッフから多くのサポーターを誕生させたことは特筆すべき点です。また、県内で約330の施設が糖尿病総合管理医療機関（かかりつけ医）として岡山県知事及び岡山県医師会から認定されており、かかりつけ医と専門施設との円滑な連携ならびにおかやま糖尿病サポーターも加えた地域密着型の糖尿病診療・連携体制（「おかやまDMネット」）の構築を推進しています。上記に加えて、平成28年度から県医師会ならびに県歯科医師会の協力の下、医科歯科連携の取り組みも本格始動し、糖尿病合併症としての歯周病管理のみならず、高齢者の栄養サポート、嚥下機能維持、フレイル対策という観点からも今後の発展が期待されます。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。(利根 記)

## IVRセンター

IVRはInterventional radiology（日本語名：画像下治療）の略であり、血管撮影装置やCTなど画像診断装置により得られた画像を用いながら、カテーテルや針を体内に挿入し、様々な疾患の低侵襲治療を行うものです。当院のIVRセンターは、センター長の金澤 右の下、IVRを行っている多数の診療科の医師により成り立っており、多種多様のIVR治療を行っています。2016年は3692件のIVRを行い、ついに全国国立大学において一番の件数となりました。その他にも小児心臓カテーテルの件数も国内最多であります。

研究面におきましても、世界初の心臓幹細胞移植臨床試験（第3相）治療や肺動脈狭窄に対するCPステントにおける医師主導治療、その他にもCTガイド下IVR用ロボットの開発などを精力的に行っております。

人事面におきましては12月から循環器内科の渡邊敦之先生がIVRセンター所属の講師として新任されました。また学会活動と致しましては、金澤 右センター長を大会長として第46回日本IVR学会総会が2017年5月18日～20日に岡山コンベンションセンターおよび岡山県医師会館で開催されます。2000名程度の参加者を見込んでおり、会長の下、鋭意準備を進めているところであります。また会期中には海外からの招待演者のIVRセンター見学ツアーも予定しております。

今後もセンターのチームワークの良さを存分に発揮し、医師、看護師、放射線技師、臨床工学技士などメ

ディカルスタッフが一丸となり、診療、教育、および研究に更に邁進していきたいと考えております。

(平木 記)

## ジェンダーセンター

松本、中塚、難波が委員を務める日本精神神経学会GID委員会から同学会理事長名で日本形成外科学会理事長宛に、SRSに対する保険適用の申請を外保連に継続して行ってほしい旨の要望書を提出し、日形会理事会で承認されました。また精神科、泌尿器科、婦人科、形成外科の4学会理事長連名のGID治療に対する保険適用要望書の中塚、難波が精神科、泌尿器科の代表とともに厚労省を訪問して提出し事務官と面談しました。これからも当センターはGID治療に対する保険適用に向けて各方面に働きかけを行うつもりです。

他にGIDに関する「特例法」の要件改訂に向けて、松本と難波は日弁連のプロジェクトチームと検討会議を行いました。身体的治療を戸籍変更の要件から外したいというのが先方の考えでした。社会的包括サポートセンターなど当事者支援団体のメンバーが岡山大学病院を訪問し、連携してGID患者の支援を行う事を確認しました。また日本子宮移植研究会の菅沼理事長が面談に訪れ、中塚、難波と今後の連携について話合いを持ちました。

岡山大学病院あるいは関連施設でのSRSは順調に手術件数を延しています。また岡山大学病院では第2例目のMTF音声手術と、第1例目のMTF顔面女性化手術に向けて渡邊が鋭意準備を進めています。沖縄中部病院での手術協力は継続して行っています。また来年度は日本医大よりGID治療研修を希望する国内留学生を迎えます。GID治療を行える施設の拡大につながればと思います。

学会活動として難波は本年3月の第19回GID学会、第14回日本病院総合診療医学会、4月の第60回日本形成外科学会、6月の日本精神神経学会、日本アンドロロジー学会、国際マイクロサージャリー学会にて講演や発表を行う予定です。また他のスタッフも各関連学会にて積極的に発表を行う予定です。(難波 記)

## 核医学診療室

核医学診療室では、平成28年8月から平成29年2月までの間に、約1800件の核医学検査を行いました。最も多い検査は脳血流シンチグラフィで約400件です。次いで肺、心臓、センチネルリンパ節、腫瘍・炎症、

肝臓、腎臓、骨シンチグラフィの順となっています。

この間の核医学診療室での最も大きなトピックスは、アルファ線を用いた内照射治療が開始されたことです。具体的には、平成28年11月より去勢抵抗性前立腺癌骨転移に対するRadium-223を用いた治療が本院でも可能となり、現在までに3名の患者の治療を行いました。これは本邦では初めてのアルファ線を用いた内照射治療です。これまでのベータ線を用いた治療とは異なり、QOLの向上だけでなく生存期間の延長効果も期待されています。本邦では法規制等の問題がありアルファ線による治療は難しいとされてきましたが、関連学会等の努力によって保険診療を行うことができるようになりました。

また、平成28年5月からソマトスタチン受容体シンチグラフィ製剤も使用可能となっています。これは神経内分泌腫瘍に特異性の高いトレーサであり、SPECT/CTの高い空間分解能を利用して臨床的に有用な画像を提供しています。現在までに9名の患者に検査を行いました。

なお、呼吸器系の診療科に多く利用いただいていたキセノンガスが諸般の事情により平成28年8月をもって販売中止となりました。現在は代替検査として、クリプトンガスによる肺換気シンチを行っています。関連診療科の皆様のご理解を宜しくお願い致します。

内照射治療関係では、子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法なども引き続き行っています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導ご協力をよろしくお願い致します。(佐藤 記)

## 結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石砕石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石砕石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石砕石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる必要があることとなりま

す。体外衝撃波結石碎石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後も積極的に体外衝撃波結石碎石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。 (和田 記)





## 海外への留学者一覧

平成29年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 子 医 学	植 木 靖 好	平 6	University Missouri-Kansas City School of Dentistry, Kansas City, Missouri U.S.A. E-mail: uekiy@umkc.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
病 理 学 (腫瘍病理)	高 田 尚 良	平 16	British Columbia Cancer Centre, Vancouver, Canada	2016. 4～未定
消 化 器・臓 肝 内 科 学	中 川 裕	平 1	University of Pennsylvania, Philadelphia, U.S.A.	1999. 4～未定
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
	堤 康一郎	平25院	University of Pittsburgh, Pittsburgh, U.S.A	2017. 4～
血 液・器 腫 瘍 科 学	武 田 勝 行	鳥大昭59	National Jewish Medical and Research Center, Denver, U.S.A. E-mail: mktakeda@aol.com	2000. 4～未定
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Queensland Institute of Medical Research, Herston, Australia. E-mail: mokomoko125125@yahoo.co.jp	2009. 2～未定
	遠 西 大 輔	平 14	British Columbia Cancer Agency, Vancouver, Canada E-mail:daisukeennishi@yahoo.co.jp	2011. 4～未定
	藤 井 昌 学	平 14	Beth Israel Deaconess Medical Center Boston, U.S.A.	2015. 4～未定
	藤 原 英 晃	平 18	University of Michigan, Internal Medicine, Hematology and Oncology, U.S.A.	2015. 8～未定
腎・免疫・代 内 分 泌 科 学	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
	辻 憲 二	平 18	Massachusetts General Hospital, Boston, Massachusetts, U.S.A.	2014. 10～約2年間
	勝 山 隆 行	平 19	Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, Boston, U.S.A	2016. 9～
	寺 坂 友 博	平26院	University of California, San Diego Department of Reproductive Medicine, U.S.A.	2015.11(予定)～約3年間
消 化 器 外 科 学	吉 田 一 博	平 17	Baylor Research Institute, Dalla, Texas, U.S.A.	2015. 4～未定
	橋 本 悠 里	平24院	The University of Texas MD Anderson Cancer Center, Houston, Texas, U.S.A.	2012. 10～未定
呼 吸 器・乳 内 分 泌 科 学	諏 澤 憲	平28院	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, New York, U.S.A.	2016. 4～未定
整 形 学 外 科 学	齋 藤 太 一	平 17	University of Michigan, Michigan, U.S.A.	2015. 9～約2年間
	山 根 健 太 郎	平 19	University of Miami Miller School of Medicine, Miami, U.S.A	2017. 4～約2年間
放 射 線 医 学	田 中 高 志	平 20	Mayo Clinic Arizona, Scottsdale, U.S.A	2016. 4～約2年間
産 科・婦 人 科 学	浦 田 陽 子	平 15	Ottawa Hospital Research Institute, Ottawa, Canada	
麻 酔 学 蘇 生 学	中 平 毅 一	平 9	Brigham and Women's Hospital Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2003. 11～未定
	末 盛 智 彦	平 11	The Royal Children's Hospital, Melbourne, Australia	2013. 7～未定
	内 藤 宏 道	平 13	University of Pittsburgh, Pennsylvania, U.S.A.	2014. 11～未定
	小 坂 順 子	平25院	The Florey Institute of Neuro Science and Mental Health, Australia	2014. 2～未定
	谷 真 規 子	平26院	University of Pittsburgh, Pennsylvania, U.S.A.	2015. 8～未定
総 合 内 科 学	村 上 和 敏	鳥大平11	Cincinnati Children's Hospital Medical Center, U.S.A.	2016. 4～未定
心 臓 血 管 外 科 学	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	金 光 仁 志	平 14	Stanford University, California, U.S.A.	
	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定
	鶴 垣 伸 也	平20院	Stollery Children's Hospital, Alberta, Canada	2011. 5～未定
	立 石 篤 史	平21院	National Heart Institute of Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia	
脳 神 経 内 科 学	村 上 哲 郎	平 9	University of Toronto, Toronto, Canada E-mail: tetsuromurakami@msn.com	2007. 9～未定



## 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会のご案内

このことについて、下記日程により開催しますので、会員多数のご参加を賜りますよう、ご案内申し上げます。

### 記

期 日：平成29年6月3日（土）

場 所：岡山プラザホテル 岡山市中区浜2-3-12 電話086-272-1201

### 日 程

- 13：00～13：30 一般社団法人鶴翔会 理事会
- 13：40～13：45 岡山医学会 総会
- 13：50～14：15 鶴翔会評議員会・総会
- 14：15～14：35 岡山大学関連病院長会 総会
- 14：35～14：45 一般社団法人鶴翔会 社員総会
- 14：45～15：00 岡山大学医学部創立150周年記念事業について
- 15：10～15：50 岡山医学会主催 新任教授講演会  
 [演題] 小児神経学の進歩と展開 小児医科学発達神経病態学領域 小林 勝弘
- 16：00～17：00 岡山大学関連病院長会主催特別講演会  
 [演題] 新専門医制度について 日本医師会副会長（日本専門医機構副理事長）  
 松原 謙二
- 17：00～17：45 岡山医学会賞及び各種助成金受賞者等による研究ポスター紹介（ロビーにて）
- 17：45～18：15 岡山医学会賞授賞式
- 18：15～20：00 合同懇親会  
 懇親会にご出席の方は、5月10日（水）までに鶴翔会事務局へ会費を添えてお申し込み願います。会費は5,000円です。  
 なお、学外の方は郵便振替口座（01290-7-12749：岡山大学関連病院長会）をご利用下さい。

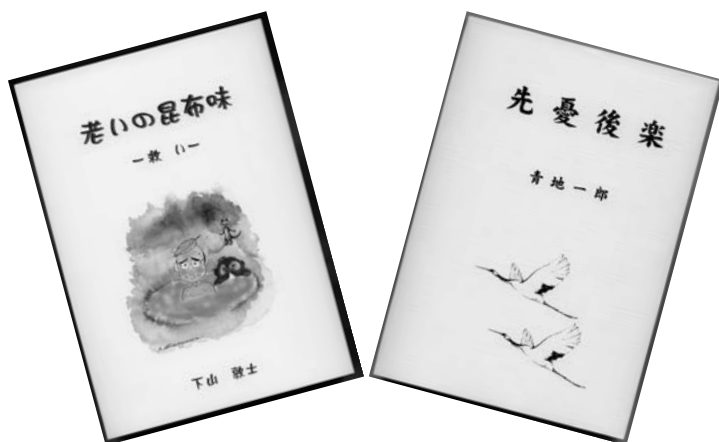
※岡山医学会賞の受賞講演は、平成29年6月5日（月）及び6日（火）両日、岡山大学医学部臨床第二講義室で開催します。多数の聴講を期待しております。

## ご寄贈いただきました！

このたび、次の方から書籍をご寄贈いただきました。  
ここにご厚意に対し深く御礼申し上げます。

青地 一郎 先生（昭33）  
「先憂後楽」

下山 敦士 先生（昭41）  
「老いの昆布味 一救い一」（丸善書店株式会社出版）



下山 敦士



## 平成28年度 Student Doctor 認定式

平成29年1月、岡山大学医学部医学科 Student Doctor 認定式がJ-Hallにおいて執り行われました。



## 平成28年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

平成29年3月24日（金）、岡山大学学位記授与式が岡山県総合グランド体育館で執り行われました。

同日午後、鹿田キャンパスJ-Hallにて関係教授の見守る中、医学部医学科の学位記授与式が挙行され卒業生一人一人に医学部長から学位記が授与され、120名の医学生が学者から新しい第一歩を踏み出しました。卒業生の皆様におかれましては、これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



## 第111回 医師国家試験 合格者状況

## 全国（国公立）の合格状況

	合格率 (%)	合格者数	受験者数
全国計	88.7	8,533	9,618
(参考：第110回)	91.5	8,630	9,434

## 中国・四国地区国立大学における合格状況

大学名	合格率 (%)	順位			備考
		中四国 (9校中)	国立 (43校中)	全国 (80校中)	
鳥取大学	94.3	1 (6)	7 (27)	14 (50)	
島根大学	93.9	2 (1)	10 (6)	17 (19)	
<b>岡山大学</b>	<b>93.0</b>	<b>4 (3)</b>	<b>14 (18)</b>	<b>21 (38)</b>	
広島大学	93.9	2 (2)	10 (17)	17 (37)	
山口大学	87.6	9 (4)	34 (19)	56 (39)	
徳島大学	91.8	5 (5)	18 (20)	29 (40)	
香川大学	89.3	7 (7)	27 (36)	43 (62)	
愛媛大学	88.0	8 (8)	31 (39)	50 (65)	
高知大学	90.7	6 (9)	22 (40)	35 (71)	

※ ( ) 内は、昨年度の順位を表す。

## 岡山大学の年度別合格状況

試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新卒者率		既卒者率		計		順位		備考
				合格	率	合格	率	合格	率	国立	全国	
12. 3	99	16	114	86/ 98	87.8	13/16	81.3	99/114	86.8	9/43	16/80	(新卒者1名は未受験)
13. 3	100	15	115	98/100	98.0	12/15	80.0	110/115	95.7	6/43	10/80	
14. 3	94	5	99	92/ 94	97.9	4/ 5	80.0	96/ 99	97.0	5/43	9/80	
15. 3	92	2	94	89/ 92	96.7	0/ 2	00.0	89/ 94	94.7	9/43	17/80	
16. 3	98	5	103	89/ 98	90.8	5/ 5	100.0	94/103	91.3	20/43	29/80	
17. 2	102	10	112	98/102	96.1	7/10	70.0	105/112	93.8	12/43	20/80	
18. 2	98	7	105	93/ 98	94.9	4/ 7	57.1	97/105	92.4	15/43	30/80	
19. 2	98	8	106	93/ 98	94.9	4/ 8	50.0	97/106	91.5	21/43	30/80	
20. 2	92	8	100	87/ 92	94.6	5/ 8	62.5	92/100	92.0	22/43	36/80	
21. 2	104	7	110	98/103	95.1	2/ 7	28.6	100/110	90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22. 2	94	12	103	87/ 93	93.5	6/10	60.0	93/103	90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23. 2	107	10	116	94/106	88.7	5/10	50.0	99/116	85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24. 2	98	20	116	95/ 98	96.9	12/18	66.7	107/116	92.2	15/43	33/80	
25. 2	95	10	103	90/ 95	94.7	6/ 8	75.0	96/103	93.2	8/43	23/80	
26. 2	105	8	113	97/105	92.4	5/ 8	62.5	102/113	90.3	25/43	46/80	
27. 2	105	12	117	101/105	96.2	6/12	50.0	107/117	91.5	26/43	46/80	
28. 2	115	10	125	109/115	94.8	6/10	60.0	115/125	92.0	18/43	38/80	
29. 2	120	8	128	113/120	94.2	6/ 8	75.0	119/128	93.0	14/43	21/80	

平成28年度卒年次別会費納入状況

平成29年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0	0	-	38	61	50	36	72%	6	120	115	52	45%
17	2	0	0	-	39	59	50	30	60%	7	109	95	36	38%
17専	4	1	1	100%	40	66	59	40	68%	8	101	97	37	38%
18	4	1	1	100%	41	78	74	61	82%	9	97	94	34	36%
18専	7	3	2	67%	42	74	72	48	67%	10	105	99	41	41%
19	2	0	0	-	43	81	73	50	68%	11	96	91	35	38%
19専	8	3	0	0%	44	81	73	50	68%	12	99	91	32	35%
20	8	3	0	0%	45	81	76	58	76%	13	100	95	23	24%
20専	11	4	2	50%	46	87	79	57	72%	14	94	76	26	34%
21	9	2	2	100%	47	81	75	53	71%	15	92	80	27	34%
22	6	4	2	50%	48	98	94	60	64%	16	98	79	20	25%
23	21	15	7	47%	49	104	96	64	67%	17	101	79	27	34%
23専	16	10	5	50%	50	77	73	46	63%	18	98	81	25	31%
24	24	16	10	63%	51	110	102	64	63%	19	98	84	25	30%
24専	42	26	16	62%	52	101	94	50	53%	20	91	74	22	30%
25	15	9	6	67%	53	73	67	42	63%	21	104	92	30	33%
25専	54	37	25	68%	54	120	117	62	53%	22	94	90	33	37%
26	23	17	14	82%	55	117	113	74	65%	23	107	97	22	23%
26専	22	13	8	62%	56	108	103	62	60%	24	98	89	21	24%
27	33	29	16	55%	57	127	121	74	61%	25	95	93	34	37%
27専	9	6	2	33%	58	114	108	65	60%	26	105	103	25	24%
28	33	24	12	50%	59	123	119	60	50%	27	105	103	21	20%
29	38	29	23	79%	60	112	106	51	48%	28	114	113	91	81%
30	38	27	23	85%	61	113	107	51	48%	学部卒計	6,213	5,532	2,826	51%
31	48	36	24	67%	62	118	111	65	59%	備考: 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
32	46	32	24	75%	63	130	122	65	53%					
33	48	41	27	66%	平1	108	100	57	57%					
34	61	45	32	71%	2	120	112	58	52%	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
35	65	53	35	66%	3	112	99	57	58%	大学院計	1,161	817	278	34%
36	53	43	33	77%	4	117	99	56	57%	その他	1,828	1,686	897	53%
37	56	47	32	68%	5	110	102	37	36%	合計	9,202	8,035	4,001	50%

注：  
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）  
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。



## おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

鶴翔会会員の先生方には、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げますと共に、平素から岡山大学医学部及び鶴翔会に対して、ご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動をおこなっております。こうした活動は会員の皆様からの会費に支えられております。会費納入に皆様のご理解ご協力をお願いします。

鶴翔会では多様な会費納入に対応しています。先生方のライフスタイルに合わせてお選びください。毎年お手数を煩わせております手間を省いていただけるものと存じます。

- **会報に同封の払込用紙** ※終身会費または平成29年度会費を既にお支払いいただいている先生には同封しておりません  
会報に同封の「払込取扱票」をお使いください（手数料は鶴翔会負担になります）。  
下に示す金融機関の口座に直接お振り込みいただいても、また、鶴翔会へお持ちいただいても結構です。
- **インターネット・モバイルバイキング**  
先生方がご利用の金融機関のネットバンキング申込をされていまして、デスクのパソコンから、何時でもお振り込みできます。振込口座は下の金融機関の口座となっております。
- **自動引き落としサービスもご用意しています**  
毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。手続きをご希望の方は鶴翔会事務局まで、電話・FAX・e-mailなどで、お気軽にお問い合わせください。手続用紙をお送りします。
- **お得な会費制度もいっぱい！**  
一時に25年間分の会費（75,000円）を終身会費としてお納めいただきますと以後の会費は納めていただくことはありません。振込用紙の金額欄を75,000に訂正してお振り込みください。  
満77歳になられたときは、お申し出により会費が免除になりますので、お申し出ください。

### 【振込金融機関名、口座番号等】

中国銀行 清輝橋支店 (チュウゴクギンコウ セイキバシシテン)  
普通預金 1591434 鶴翔会会費口 (カクショウカイカイヒグチ)

#### ゆうちょ銀行

##### ※ ゆうちょ銀行からの振込の場合

ゆうちょ銀行 (ユウチョギンコウ) 記号、番号 15410、38020041  
鶴翔会会費口 (カクショウカイカイヒグチ)

##### ※ ゆうちょ銀行以外からの振込の場合

ゆうちょ銀行 (ユウチョギンコウ) 店名 五四八 (ゴヨンハチ)  
店番 548 番号 3802004  
鶴翔会会費口 (カクショウカイカイヒグチ)

### 【お願い】

- お振込に際しては、同封の払込取扱票により振込金額をご確認いただくと共に、会員番号（払込取扱票の氏名右側の番号）及び氏名を必ず入力してください。
- 鶴翔会会費についてのお問い合わせは、鶴翔会事務局へお願いします。  
電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052 e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## (公財) 岡山医学振興会より — 継続は力 —

代表理事  
難波正義

医学部の正門から南に伸びる車道の両側に6-7mほどの高さのフェニックスが大きな羽状の葉を広げて立ち並んでいます。

その車道と図書館との間にある歩道は、初夏から秋の中ごろまで、車道側のフェニックスと図書館側のプラタナスの木々の葉が茂る濃い緑のトンネルになります。正門を入り、両側にクルミ色のレンガ造りの旧生化学棟を眺めながら、フェニックスとプラタナスの緑の影を落とす歩道を歩むとき、歴史を経た大学のキャンパスの風格を感じます。

そして、医学部のキャンパスにこの緑豊かなフェニックス並木を作られた人たちに感謝を禁じ得ません。一体、誰が、いつ植えられたのでしょうか？

私が津島キャンパスで2年間の医学部進学コースを終え、鹿田キャンパスに入った1956(S31)年の頃は、正門を入ると長い石畳がつき当たりのグラウンドまで一直線に延び、その西側には、校門のすぐそばのレンガ造りの生化学教室から奥へ向かって、解剖学、生理学、衛生学教室などの入ったコンクリート造りの3階建の建物があり、その南には法医学、細菌学、病理学教室の木造の2階建の建物が並んでいました。道の東側は、校門の近くに生化学教室と同じレンガ造りの建物(当時、2階に医学部長室)があり、その南に順次、コンクリート造りの図書館と書庫、山上研究館、木造の薬理学教室、講義室、学生の溜まり場などが建っていました。当時、フェニックスはありませんでした。

私の学生時代、1956年に鹿児島大学から法医学の教授に就任された三上教授が岡山大学の医学部は緑の少ないキャンパスだと言われたことを思い出します。私は三上教授の言葉から南国の鹿児島大学のキャンパスはさぞ緑豊かなキャンパスだろうと予想しました。それで、三上教授は生化学教室の前にソテツを植えられました。私が現職のときは大きなソテツが5-6本、旧生化学棟玄関横にあったのですが、現在では見当たりません。大変残念です。

1965(S40)年頃から、キャンパスの整備が進み始めました。1966(S41)年、現在の図書館が医学部100周年事業の一環として起工され、翌年に完成しています。その工事の所為もあって、正門から伸びる風情のあった石畳の道は、現在の記念会館あたりまでコンク

リートの道に変わり、その両側は樹木もなく殺伐としていたことを思い出します。

その頃のある日、大学に出るとその殺伐とした地表に、直径20-30ほどの葉の開いたシダのような植物が地に張り付けられていました。後で、それがフェニックスであることを知りましたが、この植物は一体どうなるのだろうか、暑い夏の日に不安を憶えたことを思い出します。

このような私の記憶から、この拙文の冒頭に書いた、いま、大学の歴史を感じる風格のあるフェニックス並木は、1966(S41)年か1967(S42)年頃に植えられたものであろうと推測していました。

ここまで書いた時、同窓会事務室より、S31年にご卒業になられた小林敏成先生の今回の本同窓会誌へのご寄稿「フェニックス」(31ページ)を読ませていただき、フェニックスの植樹の正確な年を知ることができました。S31年ご卒業の諸先生が卒業10周年記念植樹として、1966(S41)年に植えられています。

現在、一抱え以上の大木になり、大きな特有の羽状の葉を揺らめかせるフェニックスの並木の下を歩むとき、歴史と品位を醸し出している大学のたたずまいを感じます。

このような大学らしい雰囲気を作りあげられるまでには、植樹から50年の歳月がかかっています。ゆつたりと大木になったフェニックス並木を当財団(記念会館3階)の窓から眺めながら、「継続は力なり」をしみじみと感じる今日この頃です。そして、1956年のご卒業の先生方に感謝する毎日です。

同窓の諸先生のご支援をいただいて2001年創立した当財団も、「継続は力なり」で、今後、がんばって行きたいと存じています。何卒、よろしくご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(2017年3月17日)

## 事務局からの訂正・お詫び

会報121号および会員名簿（2016年12月発行）に誤字がありました。  
下記のとおり訂正し、お詫び申し上げます。

	誤	正
<b>会報121号</b>		
1 頁右段 9 行目	2014年 4 月に	2013年 4 月に
1 頁右段13行目	翌2015年に	翌2014年に
2 頁左段 5 行目	また、2015年度から	また、2014年度から
2 頁左段 8 行目	2016年 4 月には	2015年 4 月には
3 頁左段18行目	2014年11月に	2011年11月に
<b>会員名簿</b>		
(19) 頁	2号評議員（支部長） 鳥取県支部 森下 公紀	松下 公紀
42頁	佐々木 澄治 勤務先：岡山博愛会病院・外科	勤務先：削
372頁	病理学（免疫病理） 内野かおり 板倉淳哉 小田晋輔 河原明奈 THAR HTET SAN 太田陽子 山口隆廣 楊旭 大倉隆宏 AYE MOH MOH AUNG 孫翠明 真鍋明広 祇園由佳 能島舞 藤井将義 大西信彦 田端哲也 永喜多敬奈 西田賢司 宮阪梨華 表静馬 柴田嶺	病理学（免疫病理） 内野かおり 板倉淳哉 小田晋輔 河原明奈 THAR HTET SAN 太田陽子 山口隆廣 楊旭 大倉隆宏 AYE MOH MOH AUNG 孫翠明 病理学（腫瘍病理） 真鍋明広 祇園由佳 能島舞 藤井将義 大西信彦 田端哲也 永喜多敬奈 西田賢司 宮阪梨華 表静馬 柴田嶺
377頁	免疫学 友信奈保子 石塚隆元 見勢井湧 小林智瑛	免疫学 友信奈保子 石塚隆元 見勢井湧 法医学 小林智瑛



岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長 金澤 右  
 副病院長〔診療(医科)担当] 尾崎 敏文  
 同〔教育(医科)・企画担当] 大塚 文男  
 同〔研究(医科)・国際担当] 藤原 俊義  
 同〔医療安全担当] 塚原 宏一  
 同〔総務・運営担当(兼)防災担当] 伊達 勲

平成 29 年 4 月 1 日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長
内 科	総 合 内 科	大 塚 文 男	近 藤 英 生	小比賀 美香子	花 山 宜 久	頼 冠 名
	消 化 器 内 科	岡 田 裕 之	高 木 章乃夫	加 藤 博 也	池 田 房 雄	大 西 秀 樹
	血 液・腫 瘍 内 科	(代)前田 嘉信	金 廣 有 彦	松 岡 賢 市	市 原 英 基	大 橋 圭 明
	呼 吸 器・アレルギ-内 科	木 浦 勝 行	金 廣 有 彦	松 岡 賢 市	市 原 英 基	大 橋 圭 明
	腎 臓・糖 尿 病・内 分 泌 内 科	和 田 淳	佐 田 憲 映	江 口 潤	喜 多 村 真 治	中 司 敦 子
	リウマチ・膠 原 病 内 科	和 田 淳	佐 田 憲 映	江 口 潤	喜 多 村 真 治	中 司 敦 子
	循 環 器 内 科	伊 藤 浩		西 井 伸 洋	三 好 亨	渡 邊 敦 之
	神 經 内 科	阿 部 康 二		太 田 康 之	武 本 麻 美	佐 藤 恒 太
	感 染 症 内 科	草 野 展 周				
外 科	消 化 管 外 科	藤 原 俊 義	白 川 靖 博	岸 本 浩 行	西 崎 正 彦	浅 野 博 昭
	肝 胆 膵 外 科	八 木 孝 仁	榎 田 祐 三	岸 本 浩 行	吉 田 龍 一	信 岡 大 輔
	呼 吸 器 外 科	(代)土井原博義	大 藤 剛 宏	山 根 正 修	宗 淳 一	山 本 寛 齐
	乳 腺・内 分 泌 外 科	土井原 博義	平 成 人	平 成 人	枝 園 忠 彦	枝 園 忠 彦
	泌 尿 器 科	那 須 保 友	渡 邊 豊 彦	和 田 耕 一 郎	谷 本 竜 太	小 林 泰 之
	心 臓 血 管 外 科		笠 原 真 悟	小 谷 恭 弘	増 田 善 逸	黒 子 洋 介
	小 児 外 科	野 田 卓 男				尾 山 貴 徳
緩 和 支 持 医 療 科	松 岡 順 治					
感 覚・皮 膚・運 動 機 能 科	整 形 外 科	尾 崎 敏 文	西 田 圭 一 郎	島 村 安 則	遠 藤 裕 介	古 松 毅 之
	形 成 外 科	木 股 敬 裕	難 波 祐 三 郎	徳 山 英 二 郎	山 田 潔	杉 山 成 史
	皮 膚 科	岩 月 啓 氏	山 崎 修	平 井 陽 至	深 松 紘 子	三 宅 智 子
	眼 科	白 神 史 雄	松 尾 俊 彦	濱 崎 一 郎	塩 出 雄 亮	細 川 海 音
	耳 鼻 咽 喉 科	西 崎 和 則	岡 野 光 博	片 岡 祐 子	菅 谷 明 子	小 野 田 友 男
脳・神 經・精 神 科	精 神 科 神 經 科	山 田 了 士	寺 田 整 司	川 田 清 宏	井 上 真 一 郎	酒 本 真 次
	脳 神 經 外 科	伊 達 勲	市 川 智 継	安 原 隆 雄	菱 川 朋 人	亀 田 雅 博
	麻 醉 科 蘇 生 科	森 松 博 史		小 林 求	松 崎 孝	清 水 一 好
小 児・産 婦 科	小 児 科	塚 原 宏 一	岡 田 あゆみ	馬 場 健 児	吉 本 順 子	近 藤 麻 衣 子
	小 児 循 環 器 科	大 月 審 一				
	小 児 神 經 科	小 林 勝 弘	秋 山 倫 之	秋 山 倫 之	遠 藤 文 香	秋 山 麻 里
	小 児 血 液・腫 瘍 科	塚 原 宏 一				
	小 児 麻 醉 科	岩 崎 達 雄				
	小 児 放 射 線 科	新 家 崇 義				
産 科 婦 人 科	(代)増山 寿	増 山 寿	鎌 田 泰 彦	小 谷 早 葉 子	中 村 圭 一 郎	
放 射 線 科	放 射 線 科	金 澤 右	平 木 隆 夫	藤 原 寛 康	松 井 裕 輔	片 山 敬 久
救 急 科	救 急 科	中 尾 篤 典	内 藤 宏 道	内 藤 宏 道	塚 原 紘 平	湯 本 哲 也
病 理 診 断 科	病 理 診 断 科	柳 井 広 之		田 中 健 大		

## 鶴翔会会報 投稿内規

項 目	字数（程度）	内 容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部（病院）の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1,600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1,600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1,600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2,000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1,600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
<b>挿絵</b>		<b>(原則として白黒での掲載となります)</b>

1. 字数はあくまで目安です。
  2. 4月号のメ切は2月中旬、10月号のメ切は8月中旬です。
  3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないと  
思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
  4. 原稿、挿絵はデータ（一太郎、word、JPEG等）にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、  
紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
- ※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7052

E-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## 編集後記

会報122号をお届けします。

120名の澁漑とした卒業生を送り出しました。地域医療・患者さんを大切にしつつ世界に目を向け活躍する医療人として、前進してくれることを期待しています。鶴翔会の先生方のご指導、よろしくお願ひ致します。120名の次代を担う優秀な新入生を迎えました。国際感覚を身に付け地域に根差した医師、医学者になってくれるよう医学部が一丸となって教育にあたってまいります。

森田潔学長、許南浩理事が任期満了で大学を去られました。「研究大学強化促進事業」、「スーパーグローバル大学創成支援（Top Global University Project）」、「革新的医療技術創出拠点事業」等多くの国の再興戦略政策に基づいた事業、また本年3月末には岡山大学病院が、医療法上の臨床研究中核病院に選定されるなど、我が国屈指のポテンシャルを持つ大学へと飛躍を見せており、森田学長が取り組まれた成果が実を結んできていると実感しています。ありがとうございます。

また谷本光音教授、佐野俊二教授、三好新一郎教授、平松祐司教授が定年を迎えられました。長年、医学部及び大学病院のためにご尽力いただき、ありがとうございます。引き続き、変わらぬご支援、ご協力をお願い致しますと共に益々のご活躍を祈念致します。

病院長の槇野博史先生が、森田学長の後任として岡山大学長にご就任されました。医学系から2代続いで学長誕生です。槇野先生らしいリーダーシップで、大学改革の荒波の中、新たな挑戦に取り組む岡山大学の舵取りに大いに期待しているところです。

昨年12月8日（木）19時30分から、NHK総合テレ

ビ番組「ファミリーヒストリー」で、脚本家倉本聰氏のご家族が取り上げられました。倉本氏の祖父である山谷徳治郎（岡山県医学校 明治18年卒）先生及び岡山大学医学部の前身学校である岡山県医学校関係事項についての取材があり医学部長が対応され、放送されました。ご覧になられた先生おられると思います。いかがでしたでしょうか。取材にあたっては井原市の小田皓二先生（昭和30年卒）が執筆された会報の掲載記事、岡山大学医学部百年史が大活躍したと聞いています。会報は会員共有のメディアでもあり財産でもあります。会員の皆様からの積極的なご寄稿をお待ちいたしています。

より多くの会員の皆様に広報するため150周年記念事業の報告を今号から別刷りとしました。ぜひご覧ください。皆様からのご支援のおかげをもちまして、記念事業も着実に進んでいます。Jホールと旧生化学棟の連携運用に向けた第1期改修工事が完成し、4月から運用に入ります。また、Floor150計画も工事を終え運用に向けた準備が進められています。旧生化学棟の第2期改修工事では大講義室のリニューアルを中心に計画しており、完成予想図をお示ししています。経費的に厳しい状況となっています。関連病院をはじめ先生方の絶大なるご支援をよろしくお願い致します。人材育成・教育関係事業についても順調に実施しています。

鶴翔会の皆様とともに医学部創立150周年を契機に新たなSTAGEへ向かって挑戦していきたいと思っています。一層のご理解とご支援をよろしくお願い致します。

松井秀樹

発行	鶴翔会（岡山医学同窓会） 会報幹事 松井秀樹 鶴翔会会報編集委員 阿部康二、 大塚愛二、加藤宣之、木浦勝行、 伊達 勲、土居弘幸、西崎和則、 槇野博史、松井秀樹、柳井広之
電話	(086) 235-7060・7061
F A X	(086) 235-7052
E-mail	dosokai@md.okayama-u.ac.jp <a href="http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/">http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/</a>
印刷	友野印刷株式会社
電話	(086) 255-1101
F A X	(086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。



## 鶴翔会会員向けサービスのご案内

### ○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険について

鶴翔会では会員の方を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。  
ご案内パンフレットを鶴翔会ホームページに掲載していますが、ご希望の向きにはご連絡いただければ  
お送りいたします。

#### 特徴、メリット

- ※ 個人で加入するよりも保険料が20%割安
- ※ 契約期間中に勤務先が変わっても有効
- ※ 契約は1年更新

加入を希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局 TEL: 86-235-7060、7061 FAX: 086-235-7052  
e-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

### ○ クレジットカードサービスについて

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して、ステイタスの高い「VISAゴールドカード」サービスを行っています。  
開業されている会員の先生は、従業員の方もサービスの対象です。入会ご希望の方は、カード会社へ直接お申し込み下さい。

#### 三井住友トラストVISAゴールドカードサービスをお手軽に!!

 **VISA ゴールドカード**  
通常年会費 税抜10,000円+税が **税抜2,500円+税**

 **ロードサービスゴールドカード**  
通常年会費 税抜11,000円+税が **税抜3,000円+税**

別途ETC年会費 税抜500円+税 (初年度無料。1年間に1回以上のETCご利用請求があれば次年度も無料です。)

ゴールドカード + ロードサービス + ETC (初年度年会費無料)

割引は2年目以降も続きます。どちらのカードも、ご家族会員年会費は 税抜1,000円+税です。

- ・ゴールドサービスセレクト (情報誌「VISA」郵送サービスまたは個人賠償責任保険を選択) は適用外となります。
- ・ご入会にあたっては、カード会社所定の審査があります。

#### 主なサービス

- ①紛失や盗難にも安心の「**会員保障制度**」
  - ②年間500万円までの「**お買物安心保険**」
  - ③死亡・後遺傷害だけでなく、病気やケガも幅広くカバー。日本出国から3ヶ月間、何度でも自動付帯の「**海外旅行保険**」
  - ④公共交通乗用具 (鉄道・バス・タクシー等) 乗車中の事故や宿泊施設宿泊中の火災事故を補償する「**国内旅行保険**」
  - ⑤お車のトラブルにも安心。緊急宿泊・帰宅費用サポートも付帯の「**ロードサービス**」 (ロードサービスゴールドカードのみ)
- ※各種保険サービスやロードサービスの記載内容はあくまで概要であり、詳しくはカードと同送の「保険ご利用の手引き」「ご利用ガイド」等にて必ずご確認ください。

詳しい資料・お申込書のご請求は 三井住友トラスト・カード(株)まで

◆お電話 0120-006-542 (通話料無料) ◆メール : Osaka\_Info@smtcard.jp

右のコードを読み取るとメールが立ち上がります。氏名・ご住所・日中ご連絡先・提携先(鶴翔会さま)・家族カードご希望有無 を記載の上お送りください。

必ず「鶴翔会会員」とお伝えください。担当 大阪営業推進部 立川・今井 受付 09:00~17:00 (土・日・祝日・12/30~1/3除く)



## 裏表紙の写真

医学部正門からの道路両側にあるフェニックス(昭和31年卒 卒後10周年記念植樹)は、鹿田地区のシンボリック樹木です。  
植樹から50年を経過し傷みもみられるので、農学部の支援の下、種子から育てた新しい苗が順調に育っています。



# 鶴翔会

岡山医学同窓会報